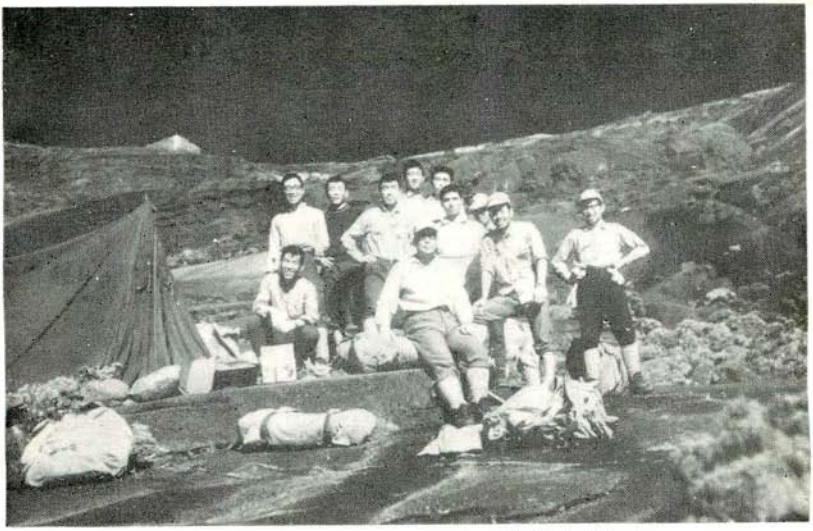
# 北ボルネオ合宿報告書

早稲田大学ワンダーフォーゲル部

1969年3月

ヘッドクォーターよりキナバル山を望む

キナバル山よりクロッカー山脈を望む

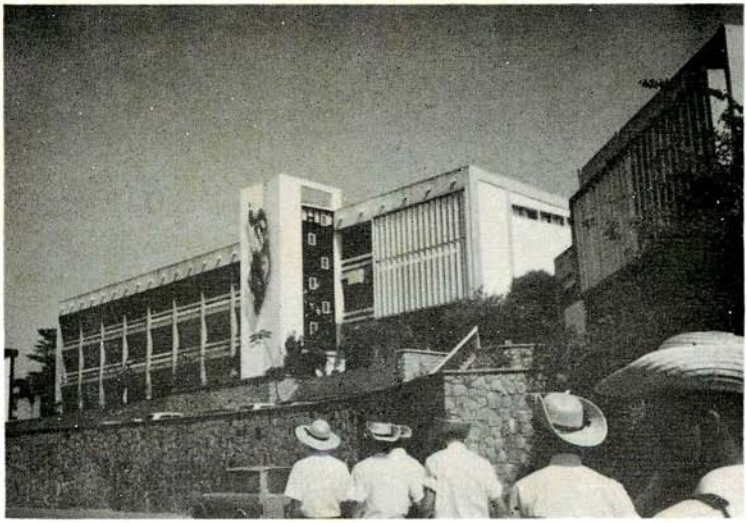


キナバル山ベースキャンプ（標高3700 m）

クロッカーのジャングルを行く

里　　道

奥地原住民の家



ガヤカレッジ訪問

# 北ボルネオ合宿報告書

# 目　次


巻頭言

- 北ボルネオ合宿を終えて……部長　神沢惣一郎　5
- 北ボルネオ合宿について……監督　里見昭二郎　6
- 今後の発展の基盤に……主将　吉越昌治　14

計画……吉越昌治　17

- 方針……18
- コース決定まで……19
- 隊員表……22
- 地図……23

行　動……25
・先発隊行動日誌……寺光克彦　26
・本隊行動日誌……深井関雄　29
本部報告……川崎清明　45
反　省……49
・係別反省……49
装備・食糧・医療・気象・記録・カメラ
トレーニング・スクーリング・会計
・総　括……寺光克彦　65
感想・研究……71
・北ボルネオの自然……72
・クロッカー縦走について……深谷　豪　75
・原住民の生活……82

・都市の生活……
・部員の活動……
・貧しい町・貧しい人々……竹崎三立 106
・B寄稿……109
・海外遠征について……小川剛完 110
・台湾遠征を思いおこして……塚崎義樹 112
・北ボルネオ合宿の成功に思う……山本隆夫 113
・北ボルネオ合宿をふりかえって……寺光克彦 116
経過報告……119
・公文書・関係文書一覧……126
・協力者リスト……132
・北ボルネオ参考文献リスト……133
・体育名誉章授賞……134
・編集後記……135

# 巻頭言

## 北ボルネオ合宿を終えて

部長　神沢惣一郎

あわただしく厳しかった学生部の仕事を止めてから九カ月も経った。この間役職のない教員の気楽さと自由さを深々と味合っていたのであるが、また大学は騒然とした状態になってきた。しかしこれが来年を控えてのわが国の大学の現実であり、この暗雲は当分払いのけることはできないであろう。とはいえ、私共はこういう情勢下の大学に学ぶことを不幸と考えてはならないように思う。むしろ乱世の大学で学ぶことによって正しい見識をもつ強い人間になるように心がけなければならない。なぜならば大学教育の大きな目的はそこにもあるからである。

ところでわがワンダーフォーゲル部は三月の休みを利用して北ボルネオ合宿を行なった。未知であるのみでなく熱帯地でもあるので心配していたが、予期していた以上の成果をもってこの仕事をやりとげた。特にクロッカー山脈の跋渉踏破は現地人すら驚嘆の的であったという。しかしこのために払われた里見監督、O・B及び現役隊員の周到な準備と現地での奮闘は高く評価されなければならないし、またO・B会があげてこれを支援してくれたことも絶対に忘れることができない。

今度の遠征の大きな特徴は現役部員が全員これに参加したということである。現時の趨勢やワンダーフォーゲル部の実力からしては、彷徨の範囲を内地に留めることはできなくなっている。したがって私としても今後この貴重な成果を活かして、在学四年間に一度ぐらいは海外遠征が行なえるようになることを願っている。

# 北ボルネオ合宿について

監督　里見昭二郎

昨年の夏休みも終りころ、新しくリーダーに決った吉越、深井両君が私の家までやってきて、北ボルネオで合宿をしたいので是非とも許可を与えてほしいと、年度方針について現役の希望を述べた。遠征というほど大上段にかまえなくても、合宿の海外版としての海外合宿を、いつかは実行に移したいと願っていたところでもあり、その場では原則的に賛成の気持を明らかにしておいた。しかし、大いに結構とは言ったものの、ボルネオについてはまったく予備知識もなく、これはなかなか容易ならぬ計画であると思った。そこで川崎、山本、田嶋の三コーチとも相談してプランについてくわしく検討することになったが、現段階での資料や情報はかならずしも充分とはいえないが、それでも成算の見込みありというわけで、現役の総力をあげて実現すべく計画を断行することになった。記録によれば、9月21日のスタートである。

さて、初の海外合宿を行なうにあたっては、隊員の編成、コースの選択、資金の調達など、決定的な要素がいくつも含まれていたが、海外合宿が通常の合宿の延長上にある部活動であるからには、なによりもまず体育局の承認を必要とするものであった。計画は手続きに従って体育局協議員会（12月19日）にかけられることになったが、神沢部長の積極的な働きかけと説明によって、原案通り、そして隊長は監督が引きうけるということで、協議員会の承認を得るこ

とができた。

プランを体育局に提出するまえに、当然のことながらO・B会において問題は煮つめられていったが、大勢は実施に向かってかたむいていったものの、なお一部には現実を無視しようとする動きもみられた。たとえば、この計画が当初から部員全体の盛りあがりによって進められているにもかかわらず、監督・コーチが既成事実を積みかさねてプランを強行しているとか、あるいはなかには、一将功成って万骨枯る式のアナクロニズムな批判もあって、海外合宿の趣旨について公平な理解を得るには、なお少なからぬ時間を要した。このほか、海外に出ることについて部活動にとって必然性がないとか、具体的な成果があらわれないからといって、反論の立場をとる人がいないわけでもなかった。たしかに一度ぐらい外国にいったからといって、すぐさま何かがよくなるといった即効性をもつものではなかろう。しかし、これはあまりにも近視眼的な見方であって、教育というものは一生にわたって持続する人間形成の過程であり、今日のようなユニヴァーサルな時代にあって、外国に出ることについて意義のある無しを論ずるのは、まったくもってナンセンスといってよかった。

ともかく、多少の紆余曲折があったにもかかわらず、二回にわたるO・B理事会（10月25日、11月8日）において、北ボルネオ合宿の支持が決定されたのである。そして、①遠征ではなく現役合宿であるので、O・B会としては主体的には募金活動はしない。ただし、少しでも多くのO・Bに寄付というかたちで参加してもらうように呼びかけ、個人のレベルで募金に応ずる

ような方法をとる。②これまで積立ててきた海研資金30万円余は、趣旨にそうので全額使用してもよい。③遭難対策の面では、通常の合宿と同じように○・B会が可能な限りの支援を行なう。以上のような了解を、○・B理事会で得ることができた。

体育局、○・B会の承認に次いで、もっとも気がかりな問題は、北ボルネオまで何を利用して渡るかということであった。費用の点からいえば、往復とも船を使うのが一番経済的であり、当面の目標は船をどのようにしてうまく確保するかにあった。ところが海運会社の回答では、ボルネオ行の材木運搬用不定期船には、海運局のきびしい規則とか、労働合理化をめぐる組合と会社との協定があって、一般の乗船はいずれも難かしいということであった。他方では、このころ太平洋上で新造船のタンカーが真二つになったり、台湾坊主の余波で貨物船が沈没したりして、悪いニュースがしきりと入っていた。タイムリミットはどんどん迫ってきており、合宿に船を利用することはほとんど否定的なことが明らかになってきた。そこで、この際思いきって計画を変更して航空機を使うことにしたのである。たまたまマレーシア・シンガポール航空（ＭＳＡ）に校友がおられ団体扱いでかなりの割引き率が適用されることがわかり、最終的に往復ともＭＳＡ（安保条約を思い出すような略称だが）を使うことが決まった。隊のまとまり、現地滞在費、安全性、体力の維持などを考え合わせてみると、ＭＳＡの利用によってわずか二日間で現地に全員が集結することが可能であり、移動についての心配がまったくなくなって、隊長としてはほっとした気持であった。船便からＭＳＡに変更したため、予算としては約

一割増となったが、安全性と迅速性とを考えてみれば高価な支出とは思えなかった。このようにして、アプローチの問題は解決したのである。

＊

ボルネオ島は、ニューギニアとともに世界的な未開発地域として知られている。したがって、山奥のジャングルの様子についてほとんど情報が集められないのは当然のこととして、現役の合宿であるからには、絶対安全という保証がなくてはならなかった。マレーシア大使館、外務省、商社、これまでの遠征隊など、あらゆるところを手わけしてまわって山の様子を聞いてみたが、私たちの目指す地域に関してはどの返事にもあいまいなところがあった。五万分の一の地図のコピーを何とか手に入れることができたが、不明な部分ばかり多く、結局のところ合宿成否のカギは先発隊の調査如何ということになってきた。

さて、合宿地のボルネオ島は、わが国の約二倍の面積で、目的地のマレーシア・サバ州は島の北部全域を占めていて、北海道よりやや小さい広さである。西南サラワクの国境から海岸線に沿って走るクロッカー山脈がサバを東西に二分しており、山脈の北端に東南アジア最高のキナバル山（四、一〇一米）がそびえている。9月ごろ、サバ（北ボルネオ）の帰属問題をめぐってマレーシアとフィリッピンの関係が急に険悪になったが、事態はそれ以上に悪化することもなく武力衝突は避けられたので、幸いなことに合宿にはまったく影響はなかった。

サバは豊富な森林資源にめぐまれており、その木材の七割以上が日本向けである。昨年のサバ紛争の火つけ役は、ある意味では木材資源の開発によって、サバに周辺諸国の羨望の目を集めさせた日本だといえないこともないという論評もみられた。このように日本とサバの関係はかなり密接であるが、一般的にいえばボルネオについては無知と偏見が横行しており、相もかわらず猛獣と疫病のはびこる蕃地と考える人が普通であった。もちろんジャングルはさすがに深く、昼なお暗い密林に違いなかったが、少なくともサバに関しては、おそれられていた毒蛇やワニ、サソリもいなかった。名物のオランウータン（マレー語で森の人）にも会えなかったし、まして首狩り族にいたっては、すでに伝説上の物語りであった。

3月2日本隊十二名はMSAでコタキナバルに到着した。コタキナバル（旧ジエッセルトン）はサバ州の首都であり私たちはこの街を合宿の根拠地とした。先発隊三名の説明によれば、関係官庁でクロッカー山脈の情報を集めようとしたが、合宿に役立ちそうなインフォメーションはまったくなく、そこでジャングルに入っての実地調査ということになったが、どうにか縦走できるという報告であった。調査した結果では、まだ不明なコースが残ってはいたものの、日本において情報なしで計画をたてていた段階よりは、はるかに確信をもって実行計画をたてることができた。また暑さに対してうまく順応できるかどうか見通しがつかなかったが、コタキナバルでの暑気順応により自信をもって行動に入ることができた。かくて、アラブ山以北のクロッカー山脈をほぼ全山にわたって縦走しうる目算がたったようなわけである。

3月5日から、いよいよクロッカー山脈のアラブ山塊に入ることになり、私は第一キャンプまで皆を見送った。そして、渉外やら食糧補給のことが残っているので、再びコタキナバルの本部に戻った。縦走隊の行動には百パーセントの信頼をおいていたものの、やはり心配であった。3月11日、私は縦走の本隊と合流するため、チャーターしたランドローバーに乗って出発した。コタキナバルから約55マイル、3時間半で目的のキナバル国立公園事務所に着いた。ところが、本隊の姿はまだ見えなかった。予備日がとってあるとはいえ、それこそ一晩中まんじりともできなかった。

翌日、本隊は予定より一日遅れて公園事務所にたどり着いた。深谷副隊長の報告では、クロッカー山脈は熱帯特有のジャングルに厚く被われており、パーティーは密林にのみこまれたという感じであった。そして、ルートは歩くというよりは、むしろ這って行くという表現がぴったりするところであった。全員で悪戦苦斗のすえ、山脈の北半分を縦走できたが、おそらく初踏破であることには間違いなく、私たちはシャンペンをぬいて縦走成功の祝杯をあげたのである。

海抜一、五〇〇米の公園事務所から仰ぐキナバル山は、絶壁を中空に屹立させた一大岩峰であった。キナバルという言葉の起源については、いろいろ伝えられているが、原住民のカダザン族は死者の霊が安息するところと考え、また中国語では神山と書いて、いずれにしても聖なる山として崇められている。他を圧してそびえるキナバル山は、まさに「神の山」にふさわしい雄

大きな山であった。私たちは規定通りガイド一名をつけ、ジャングルをきりひらいた急登のコースをたどった。初日は、約三、三〇〇米のバナラバン小屋のそばで幕営し、翌日は三、七〇〇米のサヤサヤ小屋近くの台地に天幕を張った。頂上附近は、小河内ダムに一杯入ったセメントを、そのままぶちまけたような巨大なブロックであった。四千級の山としては天候が安定して穏やかな日日が続き、ほかのパーティは一人も居ないので、まったくキナバル全山を独占しての豪華な三日間であった。

この合宿をしめくくるハイライトは、3月20日コタキナバルを去る前日、サバ州の元首にお会いできたことがある。コタキナバルの小高い丘のうえにたつ官邸を、藤牧副領事と私たち代表四名で訪問することになった。私たちは大学から持参した校歌入りのオルゴールと、体育局のネーム入りペナントをナガラ（元首）にさしあげ、合宿の無事成功と滞在中サバの人たちから受けた好意に満ちた協力を感謝したのである。ナガラは私たちの活動と日本の教育事情についてかなり強い関心を示されていたが、儀礼的なあいさつとはいえ、私たちにとってはながく思い出に残る訪問であった。

＊

わずか一カ月たらずの海外合宿にすぎないということからして、客観的な評価としては疑問であるという批判がないこともない。あるいはそうみえるかもしれないが、現役たちがさまざま

な障碍に全身でぶつかり、それをことごとく乗り越えていったという事実は、部活動において何ものにもかえがたい経験であった。現役中心の海外合宿（〇・Ｂ三名、現役十一名、医師一名計十五名）は、私の知るかぎりでは、わが国ワンダーフォーゲル活動では最初のことである。海外への壁をひとりＷＷＶのみがうち破って、このような先駆的な活動をなしえたのも、体育局を始めとして部関係者のかわらぬ支援体制の賜物ということができよう。「百聞は一見に如かず」ということわざがある。この北ボルネオ合宿を通じて現役が見聞を世界に広め、国際的な感覚を身につける機会を持ち得たことは、早稲田建学の精神とも方向を一にするものであって、隊長としてまことに心強くもうれしく思うわけである。

海外合宿を行なうにあたっては、フェアプレイの姿勢でのぞんでこそ部にとって意義があるものと考えていたが、この点に関して、現地での行動はもちろんのこと、羽田帰国にいたるまで学生らしい真摯な態度で行動したことをみて、この北ボルネオ合宿が部活動にとって疑いもなく一つのケルンたり得ることの確信をもった。同時に、海外合宿がいかに多くの人々の援助によって支えられているかを実際に知って、隊員一同その社会的な立場をあらためて知ったような次第である。末筆になって申し訳けないが、とくに合宿のバックアップに専念した監督代理小谷浩一〇・Ｂほか、連絡事務局員の労を心から謝するものである。

（昭和44年5月5日）

# 今後の発展の基盤に

主将　吉越昌治

3月21日、南国の太陽が強烈に照りつける小さな飛行場、コタキナバル空港、いよいよ緑の島ボルネオともお別れである。わずか20日間程度の滞在であったが、いざ出発となると、生れ育った故郷を離れる思いがする。〃海外、ボルネオ！〃と言い出してから丁度1年になる。実際現地にいたのはわずかだったけれど、我々はすでに1年間ボルネオの大地に住みついていたわけです。〃現役合宿としての海外〃この言葉は、無限なる可能性を秘め、かつ無限の魅力を感じさす言葉であると同時に、不安な言葉でもありました。しかしその不安を吹き飛ばすが如く、下級生部員も頑張りました。そして、計画段階から、アフガニスタン計画当時活躍された方々をコーチングスタッフとしてもち、海外遠征合同委員会という意義ある部会もでき、かつ台湾遠征に行かれたＯＢの方々のアドバイスもいただき、まさに我々は幸せでした。また、すべてのＯＢの皆様方の絶大なる御援助、御支援と、まさに、長年にわたる先輩の御努力と、現役のチームワークの結晶であると深く感謝しております。

＊　＊　＊

最近、合宿のマンネリ化という言葉をよく耳にします。年間6合宿制が、相も変らず、ここ数年続いているために言われている言葉なのでしょうか。しかし表面的な合宿形態云云よりも内容的なものを考えてみますと、各代ごとに切磋琢磨し意欲的な活動を展開してきた事は事実であり、日を追うごとに進歩して来ている状態です。我々のような活動も屈曲している時は、難かしい問題が山積みされていますが、それを一つ一つ解決してゆくことによって、活気ある部を作り上げて来るものであると考えます。しかし、それが屈曲している状態から幾多の試練をへて、一つの道にまとまりかけ、伝統が築き上げられることによって、平穏無事にみえてくるのは、いたしかたないと思います。しかし、それは停滞ではなく、充実であり、今後の活動の根源であると考えます。我部の活動も、一応、ある程度来るべきところにまで来てしまったのです。さあ、これから何をやろうか？はこれからです。また、昨今の登山ブームによって、早稲田大学だけでも、自然における活動を行うクラブは20数部あり、ワンダーフォーゲル部、ワンダーフォーゲル活動の主体をなしている各大学の活動が様々な状態で、ワンダーフォーゲル活動の位置づけ及び、方向性が非常に難かしい現状で、我々は何をやらねばならないか？活動であると思います。魅力ある自信のもてる活動をすることが意義あることなのです。そのためには我々の心の中に充実した力を生むべき場所、すなわち活動の対象を求めなければなり

ません。今回の北ボルネオ合宿はそのきっかけであります。あくまで熱帯の過酷なジャングルでの可能性を追求し、かつそれを実践し、言葉の通じぬ奥地原住民との素朴な心の対話、四千米峰の経験はまさにその力を生むに充分であると同時に、部員一人一人の今後の部活動、さらには人生における貴重なるポイントになった事と確信しております。

ゲーテの言葉に〃考えることは、知ることよりも興味がある。しかし、観察することは、考えるよりも興味がある。〃というのがあります。その言葉を借りるならば、考えることは知ることよりも興味がある。しかし体験することは、考えるよりも興味がある。まさに今合宿はこれであったと思います。

最後に、この合宿に参加していただき未熟な我々を御指導下さった、里見監督はじめOB参加者の方々に深く感謝するとともに、神沢部長、小谷代理監督、事務局員の方、物心両面の援助を下さった諸先輩の皆様に現役一同深く感謝いたします。

# 計画

# 方針

吉越昌治

## 1 方針

我々は9月に代を交代し、一大合宿制を採り、その合宿は、例年の春合宿の時期に、海外合宿の準備に現役全員がとりかかった。海外合宿の時期としては、春、夏の2つの可能性はあったが、諸事情を考慮した上で、部として最高のチームワーク、実力の保たれている春に決定した。地域は当初からの計画通り、熱帯の強烈なジャングル、及び4000メートル峰があり我々の強い精神、肉体を充分に発揮でき、かつ活動の魅力あるボルネオに決定していた。

この合宿においては、ボルネオにおける活動及び合宿を実現するにあたって、あくまで現役合宿である事を確信しあらゆる困難にたちむかい、実現することによって、部員が部の精神を改めて体得し、今後の活動の大きな支えとなり自信となることを根本目標とした。さらに、今後の我部の海外合宿の一つの布石となるよう努力した。

## 2 隊員編成

現役の合宿であることから、現役を一番よく把握していらっしゃる監督にお願いし、隊の代表として総てを統括していただく事をお願いした。現役リーダーが未だ、春ということで、未熟でかつ、ジャングルに入るということにより、4名のOBの方々に参加していただくことにした。そのうち2名は現役を終えられたばかりの4年生にお願いし、準備段階からの詳細にいたるまで現役と共に活動していただいた。また副隊長は、隊の行動計画及びその実践の最高責任者としての任をお願いし、ヘッドコーチは、隊の総マネージメントで、渉外、会計等の広範囲の事柄、及び行動計画にも参加していただいた。各係は、現役が主で、平常の部活動とほぼ同じ係分担を行い、4年生の方には、それの最終チェックもみていただいた。さらに、現地が熱帯で種々の熱帯病の危険があることにより、医師1名を同行することにした。

## 3 行動計画

次の〃コース決定まで〃の項に書いてある通り、現役の活動が遺憾なく発揮できる縦走形式をとり、ジャングルの踏破の可能性を第一に位置しかつ、キナバル峰に登頂するような行動計画を立案し、安全性の面から考えて、全行動を統一行動とすることに

した。

4　資料計画

現役合宿というたてまえより、極力、自力で行う方針をたて、我々は9月以降、極力時間をみつけ、強制アルバイトを行い、資金の一端とした。またOB及び、一般の方からは、絶大なる御援助をたまわり、この合宿の実現の大なる部分をしめた。

5　隊の統制

現役が主体であるために問題となる点はほとんどなく、OBの方も、週1回のミーティングには必ず出席され、最良のチームワークで合宿に入れた。また冬合宿には、チームワークの育成及び、強い精神、肉体を助長するために、現役全員一統になっての行動を行なった。

6　連　絡

現地行動中は、在京本部を神沢部長、小谷代理監督を中心に構成していただき、現地との連絡及び隊員家族、大学当局との連絡をおねがいした。

## コース決定まで

我々はボルネオで活動するにあたって、現地民族、植物等を研究する活動、すなわちボルネオの地域性を生かした活動も興味ある事であると考えた。しかし、そういうものを対象とする場合、やはり我々が少なからず専門的に、民族等に関しての知識を身につけていなければならない。かつ言語もある程度出来なければ、結局、表面を滑るにしかすぎないという結論に達した。と同時に経験を存分に生かし、熱帯の自然をエネルギッシュに歩く・ジャングルを踏破する方に我々はより一層の魅力を感じた。

コース決定に際しては2つのコースを考えてみた。第1のコースは西海岸沿いに伸びているクロッカー山脈のジャングルを歩く計画、第2は東海岸サンダカンより昔、日本軍が、いわゆる〝死の行軍〟を行なったサバ州横断計画である。又2つのいずれの場合にも、南海の最高峯キナバル山に登ることは、絶対の条件である。キナバル山に関しての情報は日本でほぼ完全なものが入ったし、また横断に関しては、旧軍人の方に

話をうかがったり、現地に行って来られた方に話をうかがった事によってある程度の想像は出来たが、クロッカー山脈は全く何等の情報も得られなかった。（現地でも得られなかったが）すなわちスポーツ活動では全く誰も足を踏み入れていない未知な地域である。我々は横断計画よりも、2000メートル級のジャングルで厚く覆われた山を歩き、誰も足を踏み入れていないジャングルでの我々の活動の可能性を追求する方を取った。

ここで現地の地図に関して述べてみたいと思う。我々の手元にあったのは50万分の1の地図10枚弱であった。5万の地図が10枚も得られたのは幸いであった。というのは現地では、日本領事館を通しても得られず、海外鉱物資源会社の方がラナウ付近で銅の採掘を行なっていらっしゃる関係で、東京本社の方からお貸りしてそれを複写した。それはコタキナバル及びラナウ周辺、そしてコタベルト付近で、キナバル山、クロッカー北部が含まれていたのはラッキーであった。

クロッカーでの活動は決定して、コースの問題となると、当然縦走形成を考えていたので食糧買付の可能地と我々の負荷できる量そして地形を考慮に入れて計画立案した。それに付け加えるに、隊員の身体のコンデションを考慮しなければならなかった。真冬の日本から真夏のボルネルへ、暑期順応は何日あればできるか、行動時間はどれくらいが最適か。……を考えてみてキナバルを先にやるか、クロッカーを先にやるか。一つの問題でもあった。体力的なアルバイトを考えるとジャングルのクロッカーは、キナバルで身体を慣らしてから入った方が良い。またどこまでやれるかわからないクロッカーを先にやるよりは、まず確実性のあるキナバルで先制点をあげて、全力投入でクロッカーをやる。しかしキナバルを先にやる事は、真冬から真夏へ、そして4000メートルに登ってまた回転する事によってコンデションを崩して、後半の本番クロッカーをベストがやれるか。以上の様な事を総合して結局、暑期順応をコタキナバルで行い、前半で行動順応を行い、ベストコンデションでクロッカーのジャングルに突入し最後にキナバルをやることに決定した。実際のコースは、キナバルの麓をベースにしてのリングワンダリング形式を取った。そして現地でガイド等の問題でキナバルを先にやらなければならなかった場合、クロッカーは絶対入れない場合の3コースを持った。しかし詳細なコースはクロッカーの状態をみてからでなくては決めかねたので先発隊を必要とした。

先発隊調査の結果、想像以上にクロッカーは進めると

いう報告があり、コースを変更して、コタキナバルから入り、クロッカー山稜を縦走し、キナバルの麓に抜け、キナバルを登る事に決定した。

# 隊員表

隊長　里見昭二郎（38才）
早稲田大学第一法学部卒

副隊長　深谷豪（25才）
早稲田大学教育学部卒
埼玉県庁土木部勤務

ヘッド・コーチ　寺光克彦（23才）
早稲田大学教育学部卒
自家営業

コーチ　高野裕文（22才）
早稲田大学教育学部　4年

コーチ　吉野弘純（22才）
早稲田大学第一商学部　4年

主将　吉越昌治（21才）
早稲田大学教育学部　3年

主務　深井関雄（20才）
早稲田大学第一商学部　3年

隊員　剣持典夫（20才）
早稲田大学第一政治経済学部2年

隊員　小林努（20才）
早稲田大学第一商学部　2年

隊員　小西克三（20才）
早稲田大学第一政治経済学部1年

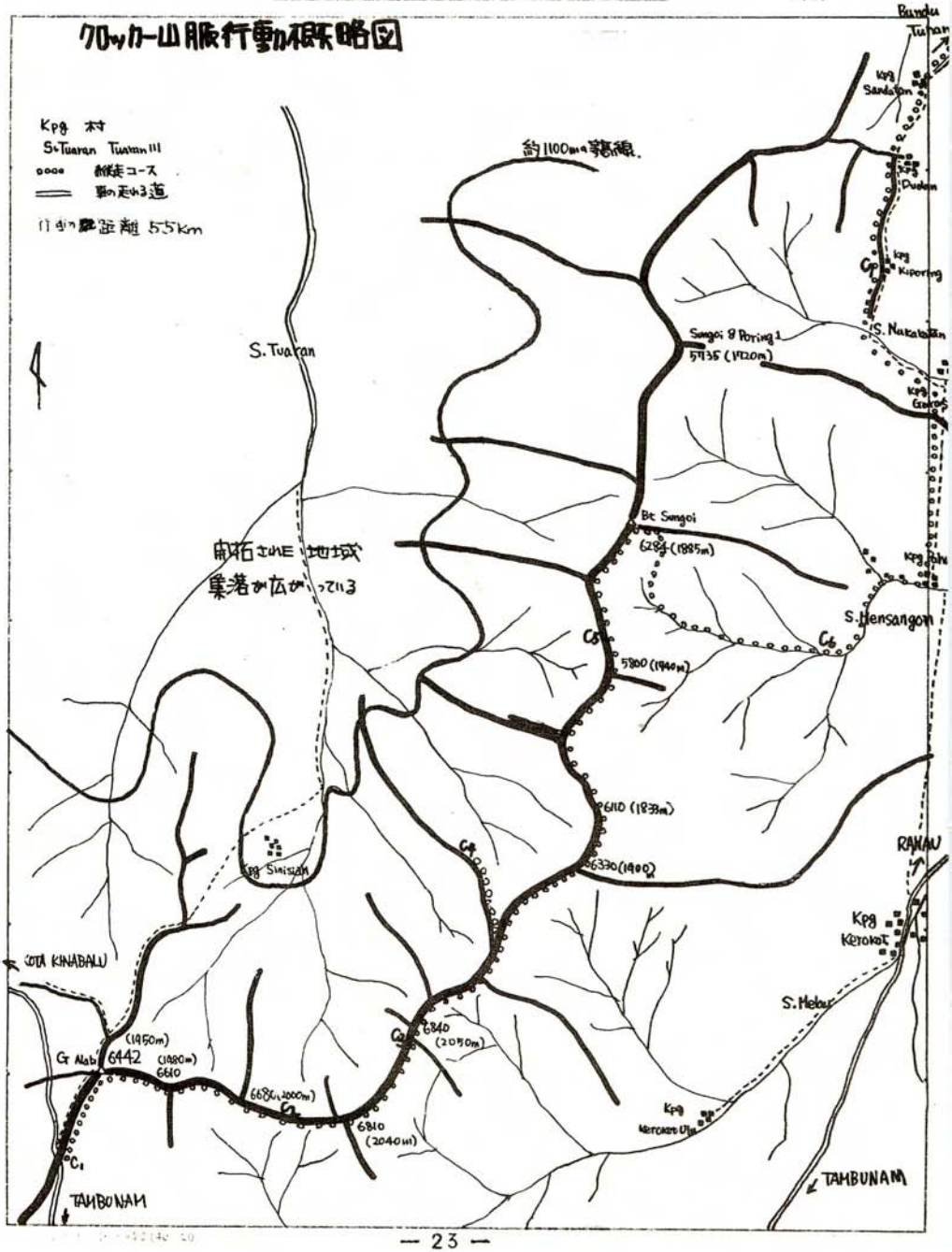
隊員　田原史人（20才）
早稲田大学第二文学部　1年

隊員　土屋猛（20才）
早稲田大学教育学部　1年

隊員　萩原英次（18才）
早稲田大学第一商学部　1年

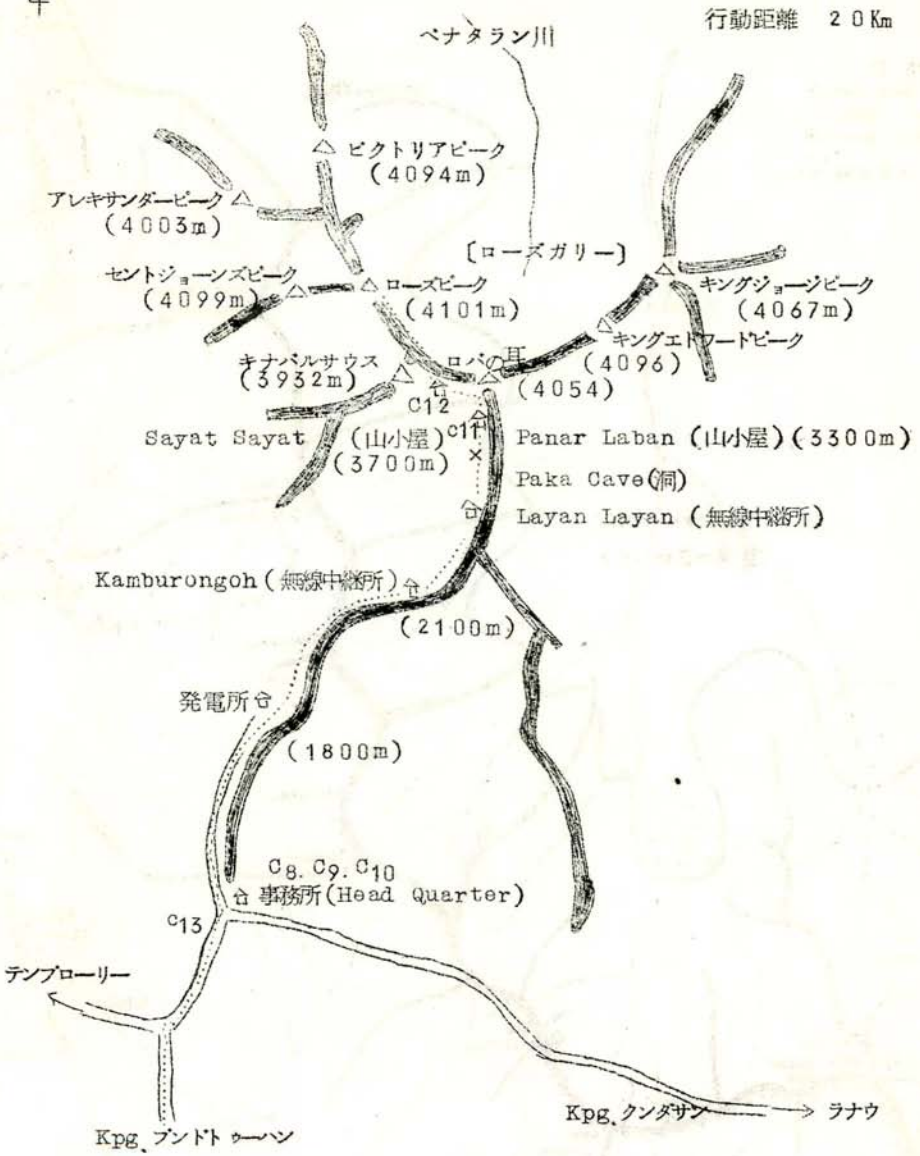
隊員　渡辺正美（19才）
早稲田大学教育学部　1年

医師　竹崎三立（26才）
福島県立医科大学　6年


クロッカー山脈行動概略図
Kpg 村
S.Tuaran Tuaran III
継走コース
車の走れる道
行動距離 55km
約1100mの等高線
S. Tuaran
南西部地域
集落が広がっている
Bundu Tuhan
Kpg Sandaan
Kpg Kiporing
S. Nakatatan
Sungai Poring
5935 (1720m)
Bt Sungai
(1885m)
S. Hensangan
5800 (1940m)
6110 (1833m)
6330 (1900)
Kpg Sinisian
KOTA KINABALU
RANAU
Kpg Kiroket
S. Melar
Gr Alab
6442 (1950m)
6610 (1980m)
6840 (2050m)
6810 (2040m)
Kpg Kiroket Ulu
TAMBUNAN
TAMBUNAN

4

キナバル山概略図


行動距離　２０Km
ペナタラン川
△ ビクトリアピーク
（４０９４m）
アレキサンダーピーク △
（４００３m）
〔ローズガリー〕
セントジョーンズピーク
（４０９９m）△
△ ローズピーク
（４１０１m）
キングジョージピーク
（４０６７m）
キングエドワードピーク
（４０９６）
ロバの耳
（４０５４）
キナバルサウス
（３９３２m）
C12
C11
Sayat Sayat
（山小屋）
（３７００m）
Panar Laban（山小屋）（３３００m）
Paka Cave（洞）
Layan Layan（無線中継所）
Kamburongoh（無線中継所）
（２１００m）
発電所
（１８００m）
C8. C9. C10
事務所（Head Quarter）
C13
テンブローリー
Kpg. ブンドトゥーハン
Kpg. クンダサン
ラナウ

# 行動

# 先発隊行動日誌

寺光克彦

先発隊メンバー
隊長　深谷　豪
寺光克彦
吉野弘純

2月22日

先発隊3名（深谷、吉野、寺光）は、本隊、OBの見送りを受け、一路北ボルネオへ向け出発した。夜は香港に泊る。

2月23日

午後5時半、緑の映えるコタキナバル空港に到着した。第一印象は暑いということである。空港からコタキナバルの中心地まで、約6キロ、高床式の建物が緑の芝生の中に立ち並んでいる。我々は〃キャンファーホテル〃に泊る。夜は明日からの行動にそなえて、町の状況偵察に行く。しかしマレードルを所持していないので、単なる散策である。町は、我々のいるニュータウン街が西のはずれで、そこから東のはずれまで歩いて15分ほどかかる。銀行、倉庫会社、官庁街らしき所、商店等を確認してホテルに帰り、明日からの予定を立てる。

2月24日

まず銀行で両替し、領事館へ挨拶に行く、藤牧副領事に今後の詳細な日程及び、本隊の到着日を報告し、コタキナバルについての情報を聞く。次にクロスファイドハリソン会社に行き、荷受け書をもらう。昼飯の後、キナバルワーデンへ行き、キナバル登山届、及びクロッカー山脈の情報、警察への届けが必要なのか等をきく。その後情報局へ行き、クロッカー山脈の情報を収集する。親切に教えてくれるが、3分の1位しかわからない。ただ、クロッカー山脈の林道工事地点や、地質学協会のウォング氏に会えるようにとの手配、26日のクロッカー山脈の調査に必要なランドローバーの手配をしてくれる。夕方海水浴に行く。

2月25日

8時ウォング氏に会い、クロッカー山脈内部の情報を聞くが、よくわからない。ただ、海外鉱物資源の吉村さんを紹介してもらったので、すぐに行ってみる。そこでは、キナバル山東附近の密林並びに、蛇などの様子をきく、昼ごろ明日からの調査のためのパッキングをし、不要物を領事館に預けるように仕分けする。その時カメラ1台紛失したことに気がつく。ひとまず税関に行って、荷物を取り出し先発用の荷物をバラし、残りを領事館に預けにゆき、内

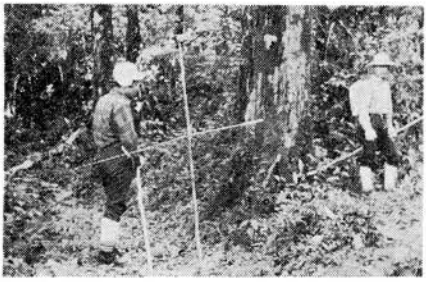
海領事に挨拶する。その後1人は買つけ、2人は日本にカメラ手配の電報を打つ。夜になると又もや爆竹が鳴り出す。まことに騒がしい。

2月26日

朝7時半にホテルを出、タクシーでカシグリーまで行く。10Km約1,000円である。ここで、蛮刀、果物を買い、8時半ランドローバーで出発、ランドローバーとは、日本でいう運送屋と、山奥の乗合バスを兼ねたようなものだ。林道終点まで約2時間、この道はやがて、タンブーナン、ラナウ、サンダカンまで通ずるとのことだ、目的のアラブ山の取り付き点まで引き返してもらう。そこでは、現地人に山道のルートが判明する所まで案内してもらう。ランドローバー代は3人で1,200円であった。林道の横の果まった所に幕営し、林道沿いの沢で水場を見つけ、昼飯とする。午後は半停、夜は満天の星である。有名な南十字星を見ようとするが、どれが南十字星だかわからない。

2月27日

3、4、5、の予定であったが、6時過ぎなければ夜が明けなかったので、8時半出発、ゲバ棒を作る。ルートは日本の山道と同じようで比較的歩きやすい。15分ほど行くと三叉路となっておりアラブ山への道はせまくなっている。昨日の現地人が木を十字に組み合わせ道標を作っていてくれた。しばらく急登を登り、稜線に出る。しばらく進むと今度は竹藪だ、そうこうしているうちにアラブ山の三角点が見える。約1時間半である。頂上は刈り払いきれており、白い四角錐の標識がある。その後南東に伸びるクロッカー山脈の主稜を前進する。



先発隊：クロッカー調査

なた目や、わずかな踏み跡があるのと、下草がないのでどんどん進む。これで合宿の見通しが立ち、本隊のクロッカー主稜縦走への計画変更の可能性が出てくる。2本程進む。しかし視界が全くきかず、我々の経験により、時間、速度から距離を推定する。これが今合宿初期の現在地未確認と、日程計算にもくるいを生ずる原因であった。帰途。午後になると山一面ガスってくる。このガスが一時的なものか否かは、合宿時いつも午後になるとガスがかかってくることにより結論が出る。5時幕場着、これで幕場の位置も明確となり、調査を切り上げることとする。

2月28日

帰る準備をしているとランドローバーが林道終点方向に行くので、急ぐ。引き返えして来るのを待ち、乗り込む。大変混み合っている。ベナンバンまで帰り、バスでコタキナバルまで帰る。その後領事館に行き、小荷物を引き取り、本隊到着までバカンスとする。深夜ナイトショウを見にゆく。非常に混んでいる。映画は、「風流濱」という現地題名のついている大映映画「不倫」であった。感覚の相違か、反応が違っており、客の拍手、口笛、ざわめきが大変おもしろかった。

3月1日

休養。

3月2日

午後5時まで自由とする。本隊コタキナバル到着は5時5分であった。これにより先発隊は解散。

# 本隊行動日誌

深井関雄

3月1日（晴）

午前6時30分、体育館前に隊員全員集合する。見送りの神沢部長・川崎コーチもこられる。午前7時00分自動車部のマイクロバスで羽田へ、OBはじめ諸関係者の盛大な見送りを後に午前9時30分我々を乗せた飛行機は羽田空港を飛び立った。機内はサービスがよくゆきとどいて快適だ。台北近くに来て、時間を1時間おくらす。午前11時55分休憩のため台北空港に立ち寄る。台北空港は羽田と比べると実に閑静な飛行場だ。雨で視界が悪く、我々の機の出発は1時間ほど遅れ午後2時35分となる。午後4時22分香港着。今日からは日本語ではなく英語の世界だ。我々が泊まるミラマホテルのバスでホテルへ。香港で一流のホテルだそうで、非常に豪華なホテルだ。夕食まで各自諸関係者への礼状、家族への手紙書きに時間を費やす。7時に夕食をホテルの食堂で食べ、9時から全員で市内を散歩する。いかにも夜の町といった感じで、どぎついネオンサインが目につく。9時45分全員ホテルに戻って来て疲れをとるため早目に寝る。

3月2日（曇）

午前9時00分朝食を食べる。12時まで全員自由行動を取る。香港は夜と昼とではまるっきり違う。昼は静かな都会へ戻ってしまう。

今日は日曜日のせいか、子供づれやアベックの姿が目につく。午後12時35分ホテルのバスで空港へ。午後2時03分香港を離れる。4時30分をまわった頃から、雲の上にそびえたキナバル山が見え出す。実に雄大な山だ。機内での会話も活気を帯びてくる。まもなくブルーの海に囲まれた明るい感じの島が見えてくる。ボルネオ島だ。5時10分、コタキナバル空港に到着。真黒に日焼けした先発隊の深谷さん、寺光さん、吉野さんが出迎えてくれる。ボルネオはさすがに暑い。（いままで着ていたセーターなどはとてもではないが着ていられない。）タクシーで我々の常宿となるキンファーホテルへ。空港近くはアップタウンらしく、緑の芝生の中に南国風の白い清潔な家々がまばらに立っている。我々のホテルは市内のはずれに位置していた。（マレーシア航空の人にいちばん安いホテルをお願いしていたので、さ

ぞかしひどいホテルであろうと思っていたが、まあまあのホテルだ。日本でいえば木賃宿にあたるのであろうか素泊り1人840円也である。）部屋割りや荷物の整理などをした後、7時より、自由外出となる。自然にOB組、3、4年組、2年組、1年組に別かれて市内を散策することとなる。ここの町の夜は非常に静かだ。浜風がふきぬけて実に心地よい。9時よりミーティング、1年、2年に諸注意を与える。

3月3日（晴）

午前9時より活動を開始する。里見隊長、深谷副隊長、寺光OB。吉越は領事館へ挨拶に行き、4年生の高野さんと吉野さんと私とでマレーシアドルの両替のため銀行へ行く。残った1年・2年は諸関係者へのお礼状を書く。午後から、高野さん吉野さん剣持・小西。土屋と私の五人でコタキナバルの海岸へ泳ぎに出かける。海水浴場はバスで10分の所にある。コタキナバルの海岸の景色は、実にすばらしい。それに加えて水は非常に澄んでいて遠浅で海水浴には絶好の浜である。（それなのに海水浴に来ていた者は我々の他は誰一人としていなかった。）ホテルへもどり、5時から3、4年とOBとでクロッカー山脈での行動およびその後の日程の進め方についてのミーティングを行なう。先発隊の調査からクロッカーは楽勝とのことだったのでクロッカーの計画を主脈横断から縦走に切りかえる。それでも日数が余るということなのでどうするかということが討議される。出発前から頭にあったシンガポールへ行くかあるいはコタ。キナバルでの滞在を増やすということになる。これは後日のミーティングで議論をだすこととする。7時から現役のミーティングを行ない、今後の日程を発表する。ミーティング後は自由行動をとる。

クロッカーへの出発

3月4日（晴）

ホテルの下の食堂で軽い朝食をとりながらザバ。タイムズを見ていたら、我々の記事が一面に乗っていた。さすがに話題の少ない土地らしい。午前9時に全員でバスターミナルへ行き、ツァラン行きのバスに乗る。今日の行く先はかねてからの約束のあったガヤカレッジだ。10時、ガヤカレッジ着。イギリス人の校長と中国人、インド人などの事務員と学生の案内で校内を見学する。学生数がたった300ということだったが、整備された広大なグランド、設備の整った教室など日本の大学より環境にめぐまれている。会話はすべて英語だが、みんなどうにかしゃべっている。11時35分に訪問を終へ、ホテルへと引き返す。午後から日本領事館へパスポート、皮靴等の山ではいらないものを預けにいく。4時から食糧の買付パッキング等を行ない、明日の出発を持つばかりとする。夜はみなそれぞれ、しばらくの間離れるコタ・キナバルの夜を思い思いに過ごす。

3月5日（晴時々曇り）

今日からクロッカー山脈縦走の第1日が始まる。今朝は7時に起床し、出発前の最後の準備をする。1時50分にチャーターしたランドローバー2台が来る。普通のジープよりやや大きなヤツ2台に15人の人間と1人当り30Kg余りの荷物をのせるのであるから大変である。ランドローバーの中はまったくのぎゅうぎゅう詰めである。8時10分碧の空の下、我々を満載したランドローバーは、コタ・キナバルを離れる。コタ・キナバルは実に小さな都市である。ものの10分もしないうちに緑の牧場が見えはじめる。その緑の中に、きれいな南国風の家とヤシの木がまばらに立っており、そのまわりでは、灰色をしたやせた水牛、猪のような豚、さまざまな色をした鶏が遊んでいる。これから人のいない山、多分ヘビやトカゲ・ヒルなどが多くいるであろうジャングルを歩くのかと思うとむしょうにコタキナバルの町が懐しくなる。やがてランドローバーはカシグリという村を過ぎた。ここからは舗装はなくなり、砂ぼこりがすさまじい。午前9時50分に今日の幕営地につく。隊長はここで引き返し、町で国内本部との連絡にあたることになる。今日の行動は車オンリーであったが、明日からは足のみがたよりの行動が続く。ここで先行隊の上級生は明日からの行動にそなえてゲバ棒をつくる。午後6時30分よりミーティング、8時00分就寝。

3月6日（晴）

4時起床、4時45分朝食、5時50分出発。6時近いというのに南国の夜はまだ明けない。ちょっと信じられない人も多いと思うが、実際にそうである。懐中電燈をとり出し、それをたよりに歩く。6時を過ぎる頃から東の空がほのかに白みはじめる。約2時間半でアラブ山にたどり着く。ここまでは完全な道がついておりスムーズに行動できる。アラブ山には、1等3角点があり、そこに日本人の名前も刻まれていた。記念撮影の後、いよいよクロッカーのジャングルに突入。入口はまったく道のない、木の密生した所であったが、すぐかなりはっきりした道に出る。植生は、ほとんど日本と変りないようである。しかし雨がよく降るせいかどの木も20m位の高さがあり、まっすぐにのびていて枝はかなり上のほうにしかはえていない。どの木も日光を求めて競い合っている。そんなわけでジャングルの中は日があまりさし込まず、赤道直下の山だというのに日本の夏山より涼しい。ジャングルの中の道はぐねぐねと曲がっていて、急に道がなくなってしまったりして非常に迷いやすい。また巨木が繁茂しているため視界も非常に悪い。地図と磁石と山のカンだけがたよりだ。今日は2時40分に行動を打ち切り、6680と6810手前との間に天幕を張り、明日の行動にそなえる、深谷OB、寺光OB、4年生の吉野さんと私の4人が調査に出る。しかし明日のルートを確認しただけで現在地点を把握することはできなかった。しかし我々は、ルート状況と行動時間から考えて、磁石のさす方向から判断しておかしいと思いつつも磁石がなにかの磁気によってくるっているのではないかと考え、今日の幕場は6330地点であると判断していたのである。

ジャングルの幕場

3月7日（晴）

5時起床、5時50分朝食、6時53分出発。飯を食べ終り、パッキングをしている頃、はたして磁石の指す東とほとんど同じ方向から太陽が登りはじめる。これをもって私たちは我々の判断がまちがっていたのではないかと気がつきはじめる。しかし万が一の可能性を信じて我々は前にそびえる大きな山がスンゴイ山ではないかと思い、登る。しかしこの山はスンゴイ山ではなく、6810の手前のポコであった。このことが確認できたのは、幸いにしてこの山には巨木がはえてなく、まわりの地形がはっきりと見渡せたことによる。望遠レンズをとおして我々の登ったアラブ山の三角点が確認でき、我々が通ってきた林道、我々が進む山々が見渡せ、山々の向こうには神の山キナバルの勇姿がある。ここで現在地点を確認して、さらに前進する。クロッカーの山はやはりさすがにきびしいということを改めて痛感させられた。今日は6840手前にて天張る。小休止の後、明日のコースを調べる調査隊（深谷OB・高野さん・吉越）と、水汲み隊（寺光OB・吉野さん・剣持・小林と私）とが編成される。我々水汲み隊は、うっそうとした草木のおいしげった沢の中を水を求めて下る。なにかヘビがでそうで、非常に薄気味悪い沢だ。しかし10分ほど下った所で思っていたより楽に水を汲むことができた。これで明日までの行動は保障される。また調査隊の調査により現在地点の確実な把握と明日からのルートが見つけられた。明日からはゴイゴイかせごう。8時30分就寝。

3月8日（霧）

4時起床、5時朝食、8時半出発。

5時50分に出発の用意ができたが、あいにくの濃霧のため出発を見あわせる。ジャングルの中で視界が10mほどしかきかない濃霧の中を行動するということは危険この上もない。8時半視界が50m位になったので出発。ジャングル歩きでのもっとも大きな障害となるのはこの山ではトゲのはえた木である。（この木にはトゲのはえたツルまでついていて、しつこいほどに衣服にからみつく。）先行隊はこの木をケバ棒で、はたきながら進む。今日は6840のポコから進路を北東にとり、それから尾根にそって進路を北東にとり、それから尾根にそって進路を北にとったわけであるが、いつのまにか4950のポコへ続く尾根へ入り込んでしまった。行けども行けども下りばかりで6110のポコは見つからず、12時40分に行動を打ち

切り、現在地確認と明日のルート調査のため深谷OB、高野さん、吉越の3人が通ってきた道を引き返し、正しいルートを発見に出かけ、寺光OB、吉野さん、剣持、小林の4人が現在地点の確認ならびに水汲みのために尾根をさらに下る。そして、ドクターの竹崎氏と私と1年が残り、天幕を張る。今日の幕場は平坦地で絶好のところだ。テントを張り終えた後は自由に思い思いの時間を過ごす。日記をつけるヤツあり、歌を唄えるヤツあり、縫物をするヤツあり。下へ行った調査隊が4時半にもどってきたが現在地点の確認のみで、水を取ってくることはできなかった。そこで水を得んがために、調査隊に私も加わり沢を下る。みんなのヘビに対する恐怖感は相当なもので、みんな非常に警戒している。水を大急ぎで汲み幕場へと引き返す。途中つけていった赤布が非常に役立つ。我々が幕場についた時には、もう完全に陽は落ちていた。上へでかけた調査隊もすでに帰ってきていて飯がすでに用意されて、我々を待つばかりになっていた。これからみにくい生存競争がはじまる。強い者が勝つのではなく、早いものが勝つのである。夕食後3年、4年とOBとで明日からの行動のためのミーティングを開く。まず上と下との調査隊の意見から現在地がほぼ確認される。つぎに残された短い日数を明日からどうやって使っていくかを討議した。今日で縦走をあきらめ、この尾根をどんどん下っていって部落に出るかなおも縦走を続けるかである。結局、結論はクロッカーのジャングルに慣れてきたこととぜひとも我々にとって幻の山となったスンゴイ山に登りたいということから縦走を続けることにする。明日こそはスンゴイ山へ登ろう。8時30分就寝。

3月9日（晴）

4時半起床、5時15分朝食、6時18分出発。きのうの道を途中まで引き返し、沢をトラバースし新しい道をどんどん進む。7時55分6330地点に到着。3年以上がルート確認のため、調査に出る。8時26分、寺光OB、高野さん、吉野さんと私の4人の先行隊が編成され出発。先行隊は地図と磁石とのニラメッコで進む。鞍部附近にはやけに竹が目につく。（日本の竹よりやや節が長いが色その他は、まったく変わらない。）8時53分ルートがわからなくなり、3年以上ガルート探しに行く。10時00分出発。道はほとんどない。11時近くになって道がでてくる。クロッカーのジャングルとはおよそこんなものだ。いまま

であった道が自然に消滅してしまったり、沢へ下ってしまったりしていた。11時38分6110のピークに着く。この山は何かおとぎの国の山のようだ。頂上附近の木には皆、苔がはえていてどれもこれも奇木で、なかにはトンネルを作っている木もある。いままで見てきたすらっとのびた熱帯雨林特有の巨木におおわれた山とは、似ても似つかない。12時28分ここを出発し、1時00分に6110と5800の間の鞍部で昼飯を食べる1時35分にここを出発したが細心の注意にもかかわらず……尾根に入ってしまった。

沢を下る

約1本分の横だ。来た道を少し引き返し、それからトラバースして進むべき尾根にとっつく。3時43分に5800を通過。快調にとばす。5時05分、5800とスンゴイ山との鞍部に天張る。今日こそはスンゴイ山、この峰へと思っていたが、ついに行けなかった。今日は高度が低くなったせいか山ヒルの被害がすさまじい。テントの中にまで入ってくる。どのテントもヒルにやられたという大声でいっぱいだ。8時30分就寝。

3月10日（晴）

4時半起床、5時半朝食、6時半出発。

ジャングルの中の急登をグングンと登る。いよいよ幻の山、スンゴイ山へ登頂、あいにくガスがかかっていたため景色が何も見えないのが残念であるが、今日こそは登るぞ！今日こそは……！と思っていただけに感激もひとしおだ。これまでの我々の健闘をたたえ、部歌ともいうべきガンバレ節をがなる。その歌、河のごとく、世界のお山を股にかけた気持は実に爽快だ。スンゴイ山からはスンゴイ8ボーリングI方面へ向かう予定であったが、残りの日数に比べてあまりにも藪が深すぎるためスンゴイ8ボーリングIへの登頂はあきらめ、部落へ出るのに最も近

いと思われる。5700へ続く尾根を下ることにする。なにしろ日数が迫っている。11日にはだれかがヘッドクォーターに着かねばならない。尾根を下ること30分で道らしきものが見つかる。しかしその道は我々の予定とは反対側の沢へ下りている。だがその沢を下ってもそれほど遠まわりにはならないため、その道通りに進む。道はまもなく沢へおりた。なにかこの沢はヘビが出そうな湿地で、つるの木の繁茂した沢で薄気味悪い。

原住民に道を聞く

しかしヘビに出合うことなく、やがていく本もの沢とぶつかり川となった。途中の河原には両手をあわせてもつかめないような竹が無数にはえている。5時29分に行動を終了し増水しても安全な河原に天幕を張る。今日はみんなバテバテだ。沢歩きは神経を非常に使うせいかたいへんバテる。サブザックぐらいなら水はいつでも飲めるし涼しいこんな快適なものはないのだが……。

3月11日（晴）

5時起床、6時朝食、7時出発。

ここらあたりに来ると川幅は非常に広く、川が蛇行しているため大きな氾濫原が目だつ。

まもなく沢に沿った平坦地に道が現われはじめる。行動すること3時間の後、6日ぶりに人に会う。ドゥースン族の男だ。ちょっとビックリしたが、やっと人の住む地へ帰ってきたという安堵感というかなんともいえぬ、うれしい気持でいっぱいになった。彼は多分16才位だと思うが、身長は155cm位で骨太で我々よりやや黒いが顔つきはよく似ている。彼は半袖の水色のシャツと同色の半ズボンとを身にまとい、頭にはよれよれの白い帽子をかぶり、腰にはサヤにおさまった長さ30cm位の蛮刀をさげていた。我々は

さっそく東京で覚えてきたマレー語で「Apa nama ini kampong」（この村は何という名の村ですか。）と尋ねた。「Kinwarnam」という答がかえってきた。これをもって我々のコースが正しかったということを改めて確信した。まもなくKinwarnamの部落を通り過ぎる。どの家も5坪位の非常に小さなわらぶき屋根の家だ。ここで隊長とヘッド・クォーターで11日おちあうことになっているため、全員では11日に着けないので、寺光OBと（4年生の）平野さんが隊長と11日におちあうべく、サブザックにて出発。本隊は先発隊の健闘を祈る。Kinwarnamをあとに点在する家々を過ぎ、川の横についた道をPahuへと向かう。ふり返ると川の両岸の緑の中に点在する小さな家々やヤシの木が南国の目にしみるような日射しの中に輝いている。そのはるか向こうには我々が活動してきたクロッカー山脈が雲海の下にぼんやりと見える。Pahuあたりにくると家々もまとまっていて、一つの小さな部落を形成しており、人々も人なつっこく、我々が休んでいるとまわりによってきてさかんに話しかける。しかし、非しいかな我々の知っている言葉は「Seramat hari」（こんにちは）「Telomacacy」（どうもありがとう）位と非常に実用的な会話のみで、話しかけられても常にニコニコしているだけである。それでも一年生などは乏しい知識の中から何か会話になるものを探しだそうと思って懸命になっているからおもしろい。PahuからGarasへ行くのに峠を一つ越えた。やはり高度がさがるとボルネオの太陽は強烈である。我々の体をジリジリと焼き付ける。その峠越えの時は最も暑く、おそらく摂氏40度近くあったのではないか。みんないささかボケ気味となった。Garasではじめて近代的な建物を見た。我々がそこの前で休んでいると、頭髪にポマードかなにかを塗り込んだインテリくさい青年が出てきた。彼は学校の教師だそうで英語が話せる。その近代的な建物は彼の家だそうだ。そして、その家から100m程離れたところに2教室だけの小さな学校があった。ジャングルを出てからはじめて見た学校であった。Garasを過ぎKiporingへ行く途中の部落で道を聞いて、そのお礼にタバコをやったら地酒を飲ませてくれた。米から造った酒で米粒がプカプカ浮いており、非常にアルコール度の弱い酒だ。今日は5時に行動をとり止め、Kiporingの部落のすぐ手前にある快適な芝生のはえている山の中腹

に天張る。テントを張ってのんびりしていたら、まもなく現住民の大人やら子供やらが十数名集まってきた。我々のすることなすことを物めずらしげに見ている。陽が落ちる頃ともなると誰ともなく彼らは帰っていった。夜、芝生に寝ころんでヤシの葉かげから見た満天の星は遠く離れた日本を思い出させる。

3月12日（曇り）

4時起床、5時朝食、6時出発

Kiporing を朝6時頃通過しSinzongの村を越えDadamを過ぎ、Sandatanへ。どの村にも豚、水牛、鶏などがいて非常ににぎやかだ。Sandatanで休んでいたら、小学生がよってきた。ここらあたりにくると、靴をはいた子供が多くなる。ことばはほとんど通じないが日本の小学生と、まるっきり同じようだ。Tegdonへ着いた時には夕暮れ近くなっており、みんな疲労困憊している。Tegdonからは林道があるので高野さんと私の2人が空身で雨の中をランドローバーをつかまえにBundutuhanへと向かう。しかし、ランドローバーなどまるっきり通らないし、ランドローバーのありそうな家などもない。Bundutuhanへ出れば必らずランドローバーはあると確信していたが、ここの部落にあるランドローバーはあいにくラナウに行っており7時をすぎないと帰ってこないと言われ、やむなく重い足をむちゃくちゃに引っ張りヘッドクォーターへと向かう。しかし、幸いなことにBundutuhanから30分位歩いた所で、ランドローバーのおいてある家を見つける。そこの主人は英語がほとんど話せないが、我々の表情からすぐランドローバーに乗りたがっているということを察したらしく「How much」（あんたはいくらだす）ときた。いかにも中国人らしい。さっそくランドローバーに乗り、隊長と先発隊のいるヘッドクォーターへ。隊長はあいかわらず元気そうだ。最終目的地に着いたという喜びはひとしおだ。ランドローバーに寺光OBが乗り、本隊を向かえにTegdonへ。本隊は夜の8時半をまわってからヘッドクォーターへ到着した。どの顔もクロッカー山脈の縦走をやりとげたという喜びでいっぱいだ。

3月13日（晴）

今日は停滞。洗濯などをしてのんびりと一日を過す。しかし、まともな停滞食がないのでちょっとさみしい。午後1時頃、福岡教育大学の奥富教授がやってくる。サバ州の植物を研究に来たということだ

った。もう半年近くになるらしい。2時から深谷OB、寺光OB、吉野さん、渡辺と私の5人で、ジープに乗りテンブローリーへ買付に行く。大体、日本と同じようなものは買えたが、肉と豊富だと聞いていた果物が買えないのが痛い。5時50分より、奥富教授の話を聞きながら夕食を食べる。食後、くじ引きを行ない、果物を買うべくラナウでの朝市に吉越、土屋、渡辺が行くこととなる。

3月14日（晴）

今日も昨日に続き停滞。午前5時に吉越、土屋、渡辺の買付隊はとび起きる。残りの者は9時15分に朝食を食べ、買付隊の帰りを待つ。9時45分に買付隊が戻って来た。ゴクロウサン！パイナップル、バナナ、ラーメン、タバコ等々わんさかいろんなものを買ってくる。さすがにラナウは大きな町だけあって何でもあるらしい。昼食を食べてから、テントをヘッドクォーターの事務所のすぐそばにある空地に張り、明日からの山岳行動に備えるべく合宿体制に入る。荷物の移動などの後、一息ついてからバナナとパイナップルを食べる。実にうまい。5時23分夕食。夕闇せまるなかのキナバル山は幻想的に見える。食後、北ボルネオ委員会は2年生の小林に対し、命令無視と職務怠慢から2年生としての資格を停止し、キナバル山には登らせないことに決定し、これを小林に伝える。寺光さんが小林について残ることになり、途中から4年生と交代することとなる。8時30分就寝。

3月15日（曇り）

4時起床、4時50分朝食、5時50分より公園事務所前でガイドを待つ。6時に来るはずであったが、6時25分になっても来ないので隊長と竹崎氏と私は先に出発した。パワーステーションまで行き本隊を待つ。30分後に本隊が現われる。ガイドは40がらみの男で1時間以上も遅れて平然と現われたという。さすが南国人だ。パワーステーションまでは自動車道だがここからは山道となる。パワーステーションからの道は影道があったりしてあまり暑くない。道はさすがに国立公園らしく整備されている。11時41分レーディオステーションを通過する。ここからコタ・キナバルなどに電波を発信しているらしい。中国語の歌が聞える。12時50分頃昨日登られた福岡教育大の先生に会う。非常に元気な先生だ。3時18分バナラバン小屋着。今日の行動はここまで。小屋の横に天幕を張る。ガイドはジュラルミン製のベッド

のついた山小屋の隣りにあるガイド専用の粗末な小屋に泊る。山小屋のにおいは日本の山小屋にそっくりだ。食後、ティータイムをとる。話題はもっぱら色気なしの食気のほうに集中する。8時30分就寝。

3月16日（晴）

4時半起床、5時25分朝食、6時28分出発。4年生は今日、寺光さんと交替するため5時に頂上へ向け先に出発した。7時08分1200フィート（約3600m）地点で1本たてる。非常に天気がよく、ここから見るながめはすばらしい。まっ白な雲海のはるか東南にはカリマンタンの山々が見え、南には50Km離れたサバ州第3の高峰トルスマディが見える。また雲海のはるか下には我々が活動してきたクロッカー山脈が手にとるようにわかる。キナバル山を先に登ってからは行く気がしないほどにちっぽけな山脈に見える。7時56分サヤットサヤット小屋着。1枚岩の上にテントを張る。水はどうかと心配したが岩の間にきれいなたまり水があった。まもなく先に登った4年生が降りてきた。はじめは2人とも下る予定であったが、ジャンケンで負けた高野さんのみ下ることとなる。8時35分高野さん下山。8時56分、本隊サブザックにて頂上をめざして出発。高度が高いせいか呼吸が苦しい。頭痛を訴えるヤツもいる。キナバルの頂上付近は1枚岩がずうっと並んでいる。雪が60cmでも積もればスキーができるだろうと誰かが言った。左手にはキナバルサウスが見え、右手にはドンキーズイヤーが見える。キナバルサウスの高さを越すあたりから真正面にローズビークが見え出す。なおも1枚岩の上を進み、ローズビークが真近に見える頃、ローズビークの左手にアレクサンドラピーク、セントジョーンズが見え出す。10時39分、東南アジア最高峰キナバル山ローズビークの上に立つ。バンザイ三唱の後、校歌早稲田の栄光を歌う。頂上に日の丸を立て、しばし休む。我々の登ってきたローズビークの南側は傾斜のゆるやかな暖かい斜面であったが、その北側はローズガリーといって2000mも落ち込んだ暗い絶壁であった。午後1時出発。1時23分サヤットサヤット小屋着。みんな思い思いに時間を過ごす。いささかもてあまし気味だ。8時就寝。ねずみがテントのまわりでゴソゴソやっていてうるさい。

3月17日（快晴）

朝4時13分起床、5時朝食、5時28分出発。キナバルサウスにて御来光を仰ぐための早出だ。5時50分キナバルサウス着。カメラマン氏は、みんなが岩

陰にかくれている中で1人寒さにふるえながら三脚を立て、じっとシャッターチャンスを待つ。まだかまだかと待つうちに、やがて東の空の下方が赤くなりはじめる。やがてピンク色の光が上方をさしはじめる。その間には海青色がはいっている。ちょうど朝日新聞のトレードマークのようになっている。6時18分真赤な太陽がキングエドワードの右方より上りはじめる。カメラマン氏、ここぞとばかりにシャッターを切る。6時33分再度ローズピークに登るべく出発。昨日果たせなかった個人撮影をするためだ。8時10分ローズピーク着、念願の個人撮影をする。（しかし東京へ帰ってわかったことだが、この写真はどれも2重撮りで、写っていなかった。）9時15分出発、ドンキーズイヤーの方向に向かう。9時43分ドンキーズイヤー直下にて昼寝。4000mの南国の太陽は強烈だ。ジリジリと我々を焼きつける。目をつぶっただけで眩しくて寝られない。11時出発。11時24分幕場着、11時35分に寺光OBが入られる。6時15分に公園事務所を出発したとのこと。さすがにまだ現役時代のタフネスぶりの面影を秘めている。1時30分ラーメンを食べる。非常にうまいが物足りない。とにかく腹がすいてすいてどうしようもない。1時39分吉野さん公園事務所へ下る。夕食後7時よりティータイム。この合宿のことや部の今後などについて話し合う。まだやらねばならぬことがたくさんある。ジョニ黒がうまい。就寝自由であったがみんな疲れているらしく、11時までにはみんな寝てしまった。

3月18日（晴）

午前5時30分、寺光さんと私とでローズピークに登るため出発。今日は昨日より暖かい。雲も昨日より少なく、クロッカー山脈もはっきりと見える。御来光は幕場から100m位上がった所で仰ぐ。ローズピークで再び記念撮影をする。途中、写真をパチパチ撮る。8時40分幕場へ戻る。本隊はすでにテント撤収も終っていた。再び思い思いのポーズで個人撮影をする。9時47分出発。いよいよ今日でボルネオの山ともお別れである。みな思い思いの感情を胸に秘め山を下る。10時25分バナラバント小屋着。10時40分発、11時06分バーカーケーブとの分岐着、空身にてバーカーケーブへ。11時12分バーカーケーブ着。バーカーケーブには沢があって水が冷たい。ボルネオで最も冷たい水だった。11時30分分岐出発。ドンドン下る。2時50分パワーステーション通過。

ここから歌を歌いながらのんびりと行く。卑わいな歌を歌うヤツもいる。3時34分公園事務所着。すぐに公園事務所の上の台地にテントを張る。皆モク切れでヒイヒイ言っている。英語の上手な上級生が事務所の英人所長の所へタバコを分けてもらいに行く。タバコがあって皆ゴキゲンだ。夕食の後、ファイヤーを囲んでコンパを行なう。明日からは再び都会の人となる。早くうまいものが食いたい。就寝自由。

3月19日（晴）

7時起床。8時朝食。8時半頃チャーターしておいた Mr. Choo の車が来る。皆あせってパッキングをする。日本から持ってきた日の丸旗にクロッカー山脈縦走キナバル山登頂記念と記し隊員の名前を載せ公園事務所のヒュッテにはりつける。日本からの登山隊も多く富山県教職員山岳会や日本大学探検部等のはった布もある。9時30分出発。ラナウロードとして有名な道路なのだが舗装が施されてなく、ほこりがすごい。みんなほこり高き男となる。11時40分タンパルリ着。ほこりにまみれた顔を洗い、市場で買ってきたパン、バナナ、キャンディーなどで昼食を食う。我々が車座になって広場で食っていたので、珍しいものだと思ってか、我々のまわりを100名近い土地の人が囲み出した。食後、土地の人に囲まれながら、紺碧の空を合唱する。12時53分出発。ここからは舗装道路で快適だ。ドンドンいろんな歌が飛び出す。1時33分キンファーホテル着。すぐその足で深谷OB、寺光OB、土屋、萩原と私の5人は挨拶を兼ねて日本領事館へ荷物を受け取りに行く。領事館の人々は我々の快挙を喜んでくれた。監督は委員会決定で、小林を先に日本へ帰すことになっていたのでMSAへ旅券の書き換えを申請に行く。了承を得たので寺光OBがその旨東京へ電話する。皆シャワーを浴び、ヒゲをそり、さっぱりとする。夜7時から合宿中話題であったコタ・キナバル第1のレストランガーディニアで晩さん会を開く。

3月20日（晴）

金を節約するため、朝は我々が日本より持参したラーメンを食べることとなる。インスタントラーメンもかなりいける。午前中は海へ行く者、手紙を書く者、町を散歩する者などそれぞれ気ままに過ごす。午前から隊長、副隊長、吉越と私の4人が副領事の藤巻氏とともにガバナー（サバ州で一番偉い人）に謁見に行く。30分位話し込んだ後、ガバナー邸を離れる。帰りにMSAへ立ち寄る。MSAへ行き小林

問題が紛糾する。彼が我々の決定を無視し、勝手にまた旅券を書き換えてしまったのだ。彼の身勝手さに一同憤慨したが、あとの祭で、とりあえず東京へ再び電話をすることとなる。しかし電話はなかなか通ぜず、5時を過ぎ電話局が終わりになってしまったので、明日電報を打つことにする。一年は上級生の苦労をよそにコタ・キナバルの生活をエンジョイしている。

3月21日（晴）

今日でコタ・キナバルの町ともお別れである。みな早々とパッキング、部屋の掃除をすませ思い思いの場所に出かけ最後のなごりを惜しむ。昼にこのホテルの主人が我々に目いっぱいのごちそうを食べさせてくれた。12時25分、チャーターした Mr. Chee のランドローバーとこのホテルの車で空港へ。計量後2時30分まで自由時間となる。みな空港内の土産物屋に入りびたって買物をする。なかにはそこの女の子に「また会いましょう。」などと言って握手を求めるずうずうしいヤツもいる。2時55分、我々を乗せた機は、コタ・キナバルを離れる。コタ・キナバルはもう一度来てみたいと思わせるような、いい町だった。4時45分シンガポール着。MSAの車でヨークホテルへと向かう。空港から40分位の所にあって洋風のなかなか感じのいいホテルだ。7時すぎに夕食を食べ、自由行動をとる。

3月22日（晴）

午前8時ホテルで朝食を取り、きのう頼んでおいたハトバスで市内の主だった所を見学する。ヒスイの家、タイガーバームガーデンなどのこの地の有名な所へ行ったがあまりおもしろくない。昼にアラブストリートでハトバスから降ろしてもらい、ここから自由行動をとることにする。アラブスリートはキナバルのふもとの公園事務所に泊まっていた英人兵士から物価が安いと教えられていたところだ。ここは日本のアメ横みたいな所だ。ここで英軍放出のシュラフなどを買い込み、タクシーで繁華街へ行きショッピングを楽しむ。7時にホテルへ戻り夕食を取る。食後は自由行動とする。12時すぎにホテルに戻り、眠りはじめた頃、たたき起こされる。なにごとかと思うと、我々の乗る予定であった飛行機が故障のため、朝6時30分のコタ・キナバル経由の飛行機にかわったとのこと。全員に伝える。

3月23日（晴）

4時半に起床する。非常に眠い。MSAの車で空

港へ、5時18分空港着。空港のベンチでしばしまどろむ。6時30分離陸。8時37分コタ・キナバル着、ここにMSAの非常にお世話いただいたタン氏が来ていて我々のために一等のチケットを8枚くれた。上級生の特権を行使して3年以上がこの恩恵にあずかることになる。9時30分コタ・キナバル発。さすが一等は座席もゆったりしてクーラーもよくきいて快適だ。またなによりも運ばれてくる食物がすごい。2時間食べどおしであった。12時45分香港着。出向かえの車でゲストハウスへ。このゲストハウスなるものは非常にお粗末なものであった。なによりもいただけないのはこの部屋備え付けのダブルベッドである。男同士でこれに寝るのだからたまらない。6時夕食。食後自由行動。

3月24日（晴）

7時半にホテルの朝食を食べ、チャーターしたマイクロバスで香港の主だった所を見聞する。中共との国境にも行ったが、想像していたほど興味ある所ではなかった。国境は鉄条網でできていて歩哨塔がポツンポツンと中共側に立っているだけで緊張感はほとんどない。途中バリッとしたレストランで広東料理を食べる。量が多くて食べ切れない。ホテルへ引き返し、荷物を取り、空港へ。2時45分香港発。今日で日本へ帰るのかと思うとなにかまだ物足りない感じがする。9時11分羽田着。コーチはじめ諸関係者の盛大な出向えを受ける。

キナバル山を登る

# 本部報告

# 北ボルネオ合宿連絡網図

**国内本部**

早稲田大学ワンダーフォーゲル部

部　長……神沢惣一郎

代理監督……小谷浩一

本部連絡所

新宿区戸塚町1丁目　早大体育館内　TEL(203) 4141

**事務局**

南部紀一郎
土屋正忠
川崎清明
山本隆夫
青木稔
田嶋達夫

事務所連絡所

夜PM6：00～小谷浩一
板橋区上赤塚町6(939)0372

昼AM9：00～PM6：00川崎清明
富士銀行銀座支店(561)3171～8

**現地連絡所**

日本領事館(在コタキナバル)内海清一
Consulate of Japan
Great Eastern Life Buiding
Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia
(Tel) 4695, 4698

MSA支社(在コタキナバル)
Malaysia Singapore Airlines.
1, Chester street, Kota
Kinabah Sabah Malaysia
(Tel) Town....4811, 4871～5
Airport..2553, 4160
Cables .. TERBANG

**隊員家族**

**稲門ワンダーフォーゲル会各代理事**

**関係各所**

ニュー白十字(緊急集会所)
クレバス
芳葉
MSA日本代理店
杉本保(MSA営業部)

**遭難対策委員会**

安田平八
山本稔
青木正
石井豊
小谷浩一

# 本部報告

川崎清明

北ボルネオ合宿も大詰に迫った。2月17日、現地行動隊と国内本部の打合せ会が開かれ、早稲田大学ワンダーフォーゲル部北ボルネオ合宿本部の名称のもとに、正式に本部会が発足した。本部会の組織及び編成については当初、OB会の組織がある遭難対策委員会の研究部に於いて原案が練られていたが、遭難対策の意味からも、ほぼ原案通りの組織、編成に決まり神沢部長小谷代理監督を中心として、コーチ3名、遭難対策委員会研究部から3名、計8名によって構成されるに至った。

同日、引続き第1回本部会を開き、本部会の構成をより機能的にするために、本部会を本部と事務局に分け、本部事務局が、現地情報及び、国内連絡を総括することとし、それに伴う、連絡網の整備について検討が加えられ、連絡網のリスト作成を急いだ。

2月24日、本隊の出発に先立ち、本隊と本部会の最終ミーティングに於いて、現地国内の連絡方法、日程に関する再確認が行なわれ、特に隊員家族への事務局から、あるいは、事務局への隊員家族からの連絡ルート、及び連絡方法について充分徹底してもらうよう要請し、隊員家族、関係各署のリストの再確認を行った。引続き事務局は現地からの定期連絡に備え、連絡文の原案作成、印刷を行い、現地連絡があり次第、発送出来る準備をした。

3月4日、先発隊と本隊が現地コタキナバルに合流した旨、又先発隊の調査結果及び、今後の連絡日程、方法について国際電話が入り、事務局は、主として、コースの変更に伴って起る事態に備えるべく本部会を3月14日に行ったが、特に問題もないので、連絡文の内容を変更することを確認するにとどまった。

3月10日、隊長からの現地連絡で、無事クロッカー山脈の縦走を終了し、これから、後半のキナバル山に向う旨、電話が入り、又帰国の日程について連絡があったので、事務局は隊員家族、関係各署に電話連絡を行った。

3月19日　の現地連絡で、キナバル山の登頂に成功し、無事下山したとの連絡が入ったので事務局は、最終の国内連絡を行い、本隊の帰国を残すだけになった。

3月24日。合宿隊が全員無事帰国するに伴い、本部会は、合宿隊に事後処理を全て委任し、4月12日、の報告会に於ける本部報告を終え解散した。以上が本部

会の報告であるが、次に2、3の反省と問題点について触れてみたい。

第一に本部会の編成があるが、今回の海外合宿では、ルート、日程、各係の計画について計画段階から、本部会のメンバーが参加しており、問題はなかったが、ルートの変更等は海外での行動に於いては十分考えられますので、国内本部のメンバーも十分細部に渡って計画を熟知しておく事が必要であろう。又本部会の編成については、今回、海外遠征合同委員会、遭難対策委員会研究部という今回の海外合宿との関連の深いOBに参加を依頼し事務局の人数も出来るだけ減らして構成した訳であるが、平常時には実質的な討議が出来るので、今後とも実質的な編成が望ましいと思われる。

第2に、連絡網については、今回は、主として国際電話により、より早く、又正確な情報を得る事が出来たが、今後長期に渡って連絡が出来ない場合も当然起って来るので、地域によって、他の方法も十分考慮される必要があろう。更に、現地情報の受入れ、国内からの連絡の体制の問題として、連絡ルートの明確化は当然の事として、出来るだけ、情報の窓口を狭くしておいた方が、複雑な問題が生じた場合、混乱を避ける事が出来るし、又正確さも増すと考えられる。

最後に、本部会の編成にあたって積極的に協力していただきました、海外遠征合同委員会、遭難対策委員会、OB各位の皆様に本誌を借りまして厚く御礼申し上げます。

# 反省

この合宿を円滑に進めるために、準備、実行動、事後処理の各段階を一括して、専任係分担を行い、現役が主となって、活動を行なってきました。各係とも、熱帯ボルネオの地に即して研究を進めてきましたが、実際現地活動を経験し、研究不充分な面もいろいろとみられました。

ここでは先の三段階を追って各係ごとに記してあります。この記録が今後のボルネオ活動、また部の海外活動の参考になれば幸いであると思います。

# 係別反省

## 装備

剣持典夫

「準備段階」

海外合宿という特殊性を充分考慮に入れ、重量軽減に力を注いだ。年が改まるとすぐに装備の点検、購入天幕防水等を行なった。

(船送)

今回飛行機1人当り重量は30キロリミットであった。次の装備、食糧を1月下旬にジャバン近海(平岡OB第8期)広修丸でコタキナバルへ船送した。これにより本隊出発時に相当の食糧を日本から持って行くことができた。

(梱包)

船内のネズミを考慮に入れ、ミカン箱を用い、内側にトタン板を張った。

「実施段階」

団体装備、個人装備リストは次の通りである。今回は個人装備の軽量化をさらに押し進め、サブザック、予備電池及び電球、替靴ひも、裁縫用具等も隊の必要数だけ持参した。

次に団体装備で気づいた点を述べる。

・天幕——この防水には、バラフィンロウとガソリンとを混ぜた容器を湯で暖める湯煎という方法を用いた。部員が防水を行なったがよく効いていた。

・ラジウス——キナバル山3800メートル附近の食当時において、調子が多少悪くなった。これは高度の影響によるものである。

・ベグ——今回ベグの紛失が目立った。今後頭に黄のエナメルを塗る等の工夫が必用である。

・石油——前半1日1人006ℓ使用
後半1日1人009ℓ使用

「梱包の問題点」

・梱包物の重量規定はないが、係の持ち運びを考えると、1個あたりせいぜい15キロ位迄であろう。

・税関を通す為には、荷物とパッキングリストを持って行っただけでは駄目で、パスポートかビザ、あるいは切符等をその際必ず持参せねばならない。

・今合宿においては先発隊と本隊の装備、食糧を混ぜて梱包したが、先発隊の現地での荷ほどきの手間を省く為、分けてパッキングをした方が良い。

# 個人装備

| | 品目 | 数量 | | 品目 | 数量 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 山靴 | 1 | 22 | エレキ1式 | |
| 2 | キスリング | 1 | | 予備電池 | 2 1.2.3年 |
| 3 | シュラフ | 1 | | 〃 電球 | 1 のみ |
| 4 | 山ズボン（コットン） | 2 | 23 | ポリタン | 2 |
| 5 | カッターシャツ | 2 | 24 | 武器 | 1 |
| 6 | 厚手セーター | 1 | 25 | マッチ | 3 |
| 7 | 靴下 | 2対 | 26 | 地図・磁石 | |
| 8 | ヤッケ | 1 | 27 | 腕時計 | 1 |
| 9 | 帽子 | 1 | 28 | 学生証 | 1 |
| 10 | 短パン | 1 | 29 | ビザ・パスポート | |
| 11 | ハンゴウ | 1年のみ1 | 30 | 裁縫用具 | 1年のみ1 |
| 12 | サブザック | 1.2年のみ1 | 31 | サイフ | 1 |
| 13 | 雨具 | 1 | 32 | 筆記具 | 2（ボールペン） |
| 14 | 細引（5m） | 2 | 33 | チリ紙 | |
| 15 | 軍手 | 1年 3（ナイロン必1）<br>上級生2 | 34 | 洗面用具 | 1 |
| 16 | 新聞紙 | 20 | 35 | 下着 | |
| 17 | ビニールシート | 1 | 36 | エアーマット | 1 |
| 18 | 個人医療 | 1 | 37 | 米袋 | 2 |
| 19 | タオル | 2 | 38 | キャハン | 1 |
| 20 | 手拭 | 1 | 39 | ピンチ | 3 |
| 21 | 替靴ヒモ | 1（1年のみ） | 40 | 海水パンツ | 1 |

北ボルネオ合宿団体装備

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| テント | | 3 | フィルム箱 | | 1 |
| ラジウス | | 4 | カメラ | | 2 |
| | ノズル | 5 | 三脚 | | 1 |
| | 三脚 | 13 | 8ミリ | | 1 |
| | ジョーゴ | 2 | テープレコーダー | | 1 |
| | 金アミ | 4 | 赤布 | | 2m×3m |
| | スピン | 8 | マジックインキ | 黒 | 2 |
| | スパナ | 4 | | 赤 | 1 |
| 中ナベ | | 2 | 武器 | | 2 |
| 小ナベ | | 2 | 国旗 | | 2 |
| ノコギリ | | 2 | W旗 | | 1 |
| 大ナタ | | 1 | ライター用ボンベ | | 1 |
| ナタ | | 1 | ハンゴー | | 5 |
| エンピ | | 1 | サブザック | | 7 |
| 丸袋 | | 29 | 修理工具 | | 1 |
| ザイル | | 1 | | 天幕修理布30²cm² | 1 |
| 背負子 | | 1 | | グラシ用ひも | 3 |
| 石油ポリ | | 6 | | スピン | 6 |
| 石油 | | 12ℓ | | 修理糸 たこ糸 | |
| ガラクタ | | 1 | | 綿糸 | |
| | 包丁 | 2 | | 針 たこ糸用 | 5 |
| | おたま | 2 | | 綿糸用 | 5 |
| | へら | 2 | | 予備張り網 | 2 |
| | 針金 | 30m | | ポンド | 2 |
| | うちわ | 4 | | エアーマット用ゴム | 20cm² |
| | ロープ | 11 | | プライヤー | 2 |
| メタ | | 1 | | 自在 | 3 |
| 医療箱 | | 1 | | クギ | 50 |
| | | | | パッキン | 4 |

船送パッキングリスト

総計　85.2Kg

| | 項目 | 数量 | 重量 | 総重量 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | テント | 3 | 9.3Kg | 27.9Kg |
| 2 | ノコギリ | 2 | 0.4〃 | 0.8〃 |
| 3 | ナタ | 2 | 0.7〃 | 1.4〃 |
| 4 | エンピ | 1 | 1.0〃 | 1.0〃 |
| 5 | ロープ | 30本 | 0.06〃 | 1.7〃 |
| 6 | メタ | 4 | 0.35〃 | 1.4〃 |
| 7 | スポーツオイル | 6 | 0.07〃 | 0.4〃 |
| 8 | アルファ米 | 240袋 | 0.16〃 | 38.4〃 |
| 9 | 米 | — | 12.0〃 | 12.0〃 |
| 10 | 金網 | 6 | — | 0.2〃 |

## 食糧

一、重量軽減
二、高カロリー
三、保存のきく食料
四、日本人的嗜好の献立

以上の4点を北ボルネオ合宿における食糧上の問題として捉え、計画段階においてその対策が係や委員会で検討された。

前記の4つの問題点を個々について述べると、

一、重量軽減……ジャングルの中での行動を考えるに日本の夏と同様負荷物は軽量が望ましい。また里に出て来ても我々の食糧となるものは入手できないので、行動日程と見あわせ、最低9日分の食糧の負荷をしなければならない。また飛行機便の重量制限内で、より多くの食糧を日本から持って行きたい。

二、高カロリー……暑さと、厳しい行動に耐えるためには高カロリーでなければならない。

三、保存のきく食糧品……買付けをしてから使用するまでの期間が長いので、暑さのため変質しな

いものでなければならない。ただし、缶詰は重量面から思わしくないので、あまり取り入れなかった。

四、日本人的嗜好の献立……ワンゲル活動に入るまでの現地での待機期間に、現地の食堂で余り食べなれないものばかり食べていなければいけないと思われるので、山岳行動中は、いつも合宿で食べ慣れているものや、梅干し、のり等をとり入れた。しかし、実際には現地の食堂の飯はかなり我々の口に合うものであったので、それほど日本の味を切望しないでも済んだ。

現地の問合せから、野菜類はほとんど日本と同じものが手に入るとの情報があり、その他の食糧品も都市部ではだいたい手に入るのだが、値段、手数という事から、飛行機重量制限内のうち、食糧に割り当てられた180kgいっぱいは日本より持って行った。また、先に船便でテント等の装備類と一緒に米とアルファ米を送った。船便を利用するのは隊の行動をスムーズに運ぶためにも良い事だと思う。

この様に、現地で買付けたものは、野菜類、米、砂糖、塩類であり、その他、ピンチ食、嗜好品に至るまで殆んど日本より持ち込んだ。

また、隊費の約1/6を占める食糧費をなるべく経減するために、現物寄附を食糧品会社に申し込み、2、3社から快諾を得ることができた。

合宿行動日程のうち、ジャングル活動の計画は現地での先発隊の実地踏査で決定するという特殊性のため、日本からは、個々の献立のパックを作って行き、決定計画に合わせてすぐそれらを組み立て、献立を作ることが要求された。

現地についての情報はだいたい正確だった。野菜類は貧弱なものではあるが、手に入れることができたし、インスタントラーメンの様な食品、肉類等も都市部では買付けることができた。山間部の部落では、何一つ、果物も手に入れることができなかった。ただ、キナバル公園事務所附近のブンドトゥーハン村では大きな村のせいもあって、買付ができた。

非常食は共同一括購入とし、それによって正確な重量、カロリーの把握、団装の観念を強めることに役立った。

献立の内容について軽く触れると、昼飯のカンパンはバターなどと一緒に食べるので高カロリーとなる、負荷しやすい、手間がかからない。ピンチ食にもなる、等の長所が多く採用した。アルファ米は、食当の負担

の軽減と、重量軽減、キナバルでは高度の関係で生米は使えない、とのことから金銭的にゆるすかぎり使った。

合宿後の反省としては、重量軽減にあまり走りすぎたきらいがあり、カロリー不足があったことはいなめない。また、各献立毎の水の計算等の必要かつ十分な水の把握を怠ってはいけない。今回は、現地食は研究不足により、とり入れることができず、日本に於ける夏合宿の食糧を主柱にして考えたものだった。合宿も終りに近づくと、全員快調で、常に空腹の状態の隊員に満足感をもたらすのには苦労した。

最後に、実行した献立表を掲せておく。

〔献　立〕

行動中カロリー不足が目立ったのは、第一に計画段階での食料係の工夫不足、次に重量軽減の為である。

コタキナバルで選んだ食料を十分活用出来なかった。

行動中、行動日程の伸びを考え、8日の夜以後、米の使用量を少し減らし、前半の食い伸しを行った。減らした量が少なかった為影響なし。

行動中、塩の不足をきたし、ラナウで買付けた。これは計画段階でチエック不足。

〔おもな品物の使用数〕

| | |
|---|---|
| 乾パン | 280袋 |
| アルファ米 | 280袋 |
| ラーメン | 80個 |
| 米 | 22kg（約15.7升） |

（人数15～14名）

献　立　(1)

| | 朝　　食 | 昼 (1) | 昼 (2) | 夕　　食 | 備考〔幕場〕 |
|---|---|---|---|---|---|
| 3月5日 | コタキナバル<br>キンファーホテル<br>出発 | | 乾パン<br>コンデスミルク<br>ジャム<br>ジュース | 〔ニューギニア(イタメ)〕<br>味噌　ピーマン　ナス<br>干しいたけ　食油<br>現地野菜　砂糖<br>米２３合 | 〔アラブ山下〕<br>コタキナバルで買付けた野菜がにがい |
| 6日 | ラーメン<br>(野菜入り)<br>茶 | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔ビーフシチュー〕<br>シチューの素　ジャガイモ<br>即席肉　インゲン豆<br>食油　人参<br>アルファ米１８ | |
| 7日 | 即席ミソ汁<br>ツクダニ<br>アルファ米１１ | コンデス<br>バター<br>ジュース<br>乾パン | ジュース類<br>ジュース<br>乾パン | 〔釜メシ〕<br>即釜メシの素<br>コンソメ<br>アルファ米１８ | |
| 8日 | 即席ミソ汁<br>ツクダニ<br>フリカケ<br>アルファ米１１ | 乾パン<br>バター<br>ジュース | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔酢　豚〕<br>即席酢豚の素　ジャガイモ<br>即席肉　マメ<br>干しいたけ　人参<br>アルファ米１４ | 夕食より食い伸しを始める<br>(計画では１１日の昼までて前半は終り) |
| 9日 | 即席ミソ汁<br>味ノリ<br>ツクダニ<br>アルファ米９ | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔酢のまぜメシ〕<br>すしの粉　味ノリ<br>紅ショーガ　コンソメ<br>アルファ米１４ | |
| 10日 | 即席ミソ汁<br>お茶づけの素<br>ツクダニ<br>アルファ米 | 乾パン<br>ジャム類<br>バター | 乾パン<br>ジャム類<br>コンデス<br>(十乾パン) | 〔カレー汁〕<br>カレールウ　即席肉<br>食油<br>(野菜ナシ)<br>アルファ米１４ | 計画では、ブンドトウハン村で野菜を買付ける予程だったが、まだ村に出ず |
| 11日 | 即席ツユ<br>フリカケ<br>味ノリ<br>コンビーフ<br>アルファ米９ | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔酢のまぜメシ〕<br>紅ショーガ　すしの粉<br>味ノリ　コンソメ<br>サラミソーセージ<br>アルファ米１４ | 〔キボーリン村〕<br>の芝生の上、<br>予備食使用 |
| 12日 | 即ミソ<br>フリカケ<br>ツクダニ<br>コンビーフ<br>アルファ米 | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | ラーメン　釜メシ<br>お吸いもの<br>アルファ米<br>１０袋 | 〔ヘッドクオーター〕<br>夜より１５名 |

献　立　(2)

| | 朝　　食 | 昼 (1)　昼 (2) | 夕　　食 | 備考〔幕場〕 |
|---|---|---|---|---|
| 3月13日 | 即席味噌汁<br>ツクダニ<br>フリカケ<br>米１５合 | 肉イタメ<br>フリカケ<br>コンソメスープ<br>米１５合 | 目玉ヤキ<br>レタス<br>トマト<br>ビール<br>米２４合 | 〔ヘッドクオーター〕<br>停　滞<br>監督はおかゆ |
| 14日 | 即席お吸いもの<br>ゴマシオ(玉入り)<br>茶づけ<br>米１２合 | ラーメン<br>(野菜　コンビーフ入り)<br>ジャガイモのコンビーフ<br>イタメ | 〔カレー　ハヤシの混合〕<br>カボチャ<br>ジャガイモ<br>タマネギ | 〔ヘッドクオーター〕<br>停　滞<br>体力多少回復<br>監督はおかゆ |
| 15日 | 即席味噌汁<br>フリカケ<br>アジノリ<br>アルファ米１０袋 | 乾パン<br>(チーズ)<br>コンデンス<br>バター<br>ジュース | 〔野菜イタメ〕<br>バター　コンビーフ<br>キャベツ<br>インゲン豆<br>アルファ米１８ | 〔バナラバン〕<br>ポーターが加わる。 |
| 16日 | 味ノリ<br>即席味噌汁<br>コンビーフ<br>アルファ米１０ | 乾パン<br>ジャム類<br>(チーズ)<br>ジュース | 〔ハヤシライス〕<br>ハヤシルー<br>コンビーフ　即席肉<br>長ネギ<br>アルファ米１９ | 〔サヤットサヤット〕 |
| 17日 | 即席すいもの<br>イソのフキヨセ<br>コンビーフ<br>アルファ米１１ | 乾パン　ラーメン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔釜メシ〕<br>釜メシの素<br>即席ツユ<br>牛カン<br>アルファ米２０コ | 〔サヤットサヤット〕<br>停　滞 |
| 18日 | 即席スイモノ<br>フリカケ<br>アルファ米１１ | 乾パン<br>ジャム類<br>ジュース | 〔ビーフシチュー〕<br>即席肉　食油<br>インゲンマメ<br>コンビーフ<br>米２６合 | 〔ヘッドクオーター〕 |
| 19日 | 即席味噌汁<br>トマト<br>フリカケ | テンブローリー村<br>トマト<br>果物 | コタキナバルのキンファーホテル | |

# 医　療

二屋　猛

・（計画及び準備段階）

我々がまず恐れたのは、マラリヤ、コレラ、破傷風等の風土病と、最も切実な問題である飲料水によるアメーバ赤痢、更に、ヘビにかまれた場合の処置……であった。その為、これらの問題を中心に、各団体にその対策を、更に、本等によって徹底的に調べ上げ計画を進めていった。また、普段からお世話になっているスポーツ医事相談室で、心電図、レントゲン、血圧、尿検査等の身体検査を行ない、各人の身体の健康状態を調べ上げた。医薬品の量に関しては、現地での購入がむずかしい為、表からも分かるように、相当大幅な量を持って行った。また、パッキング方法に関しては、相当の湿気が予想された為、従来の「カン」に変えて、完全密閉のタッパウエアーの箱を用いた。更に重量軽減ということで、薬品の包装方法を考えた結果、薬品には影響がないということで、ナイロンに包み、フィルムのケースに入れ換えて、持っていくことにした。

・（行動中及び反省）

行動中に関しては、怪我らしい怪我もせず、非常にラッキーであったように思う。幾分悩まされたものといえば、ヒルと、とげぐらいなもので、これとて、特に害はなかったので、安心して行動できた。また、心配していた水の問題も、2～3人の者が、軽い下痢を起こした程度で、ほとんど心配はなかった。医療係としては、福島医大の竹崎氏の同行によって、部員に、精神的安心感を与えていてくれたことが、何よりも心強かったように思える。

器具類

| | | | |
|---|---|---|---|
| ガーゼ | 10フクロ | カミソリ | 3本 |
| 包帯3裂 | 2本 | ゴムチューブ | 2〃 |
| 〃 4裂 | 5〃 | 眼帯 | 5枚 |
| 〃 6裂 | 3〃 | サポーター膝 | 2〃 |
| 脱脂綿 | 100g | 〃 足首 | 2〃 |
| 油紙 | 10フクロ | 注射器 | 2セット |
| バンソウコー | 2本 | ビタカンファー(1mℓ) | 10アンプル |
| バンドエイド | 1ハコ | クロマイ(2.5mℓ) | 1〃 |
| 体温計 | 2本 | 〃 (1.5mℓ) | 1〃 |
| ピンセット | 1〃 | メチロン(1mℓ) | 10〃 |
| ハサミ | 1〃 | ロートポン(1mℓ) | 10〃 |
| 綿棒 | 1〃 | 蚊取線香 | 5ハコ |
| 毛抜 | 1〃 | バルサン | 20本 |
| 爪切 | 1〃 | スプレー | 1本 |
| 耳かき | 1〃 | | |

内服薬

| 分類 | 薬品名 | 数量 |
|---|---|---|
| 胃腸薬 | 三共胃腸薬 | 200錠 |
| 腸内殺菌剤 | エンテロビオフォルム | 200〃 |
| 解熱剤 | アスピリン | 60〃 |
| 鎮痛剤 | セデス | 60〃 |
| 精神安定剤 | アトラキシン | 24〃 |
| 鎮痛・鎮痙剤 | パパスコ | 30〃 |
| 緩下剤 | サラリン | 60〃 |
| 止血剤 | アドナ | 40〃 |
| 強心剤 | 救心 | 30〃 |
| 抗生物質 | クロロマイセチン | 120〃 |
| サルファ剤 | レダキン | 60〃 |
| マラリヤ予防薬 | レゾヒン | 300〃 |
| | | |
| | | |

外傷薬

| 分類 | 薬品名 | 数量 |
|---|---|---|
| 消毒・殺菌 | マーキュロ | 3ビン |
| 〃 | ヨーチン | 2〃 |
| 〃 | アクリノール | 2〃 |
| 〃 | アルコール | 2〃 |
| 火傷 | 軟膏 | 3錠 |
| 〃 | ヒルドイド | 2〃 |
| 目薬 | 大学目薬 | 3 |
| 〃 | テラマイシン眼軟膏 | 2錠 |
| 湿布薬 | パテックス | 24枚 |
| 〃 | テラピア | 1錠 |
| 〃 | サロメチール | 2〃 |
| かゆみ止 | キンカン | 1ビン |
| 〃 | レスタミンコーワ | 3錠 |
| | ホルムス | 1ビン |
| | 過マンガン酸カリウム | 1〃 |

# 気象記録と反省

小西克三

一、計画段階

北ボルネオ合宿計画当初においては気象記録の充実をという配慮のもとにラジオ、温度計、湿度計、高度計を持って行き、天気図、気温、湿度、気圧を記録しようという考えがあったが、予算の関係上、湿度計、高度計は除外し、又現地気象通報が英語の他、外国語で行なわれているため、天気図作成も行なわないことにした。これらから気象記録は、気温、天気、風向、風力、雲量を記録するにとどめた。

二、行動中の反省と記録

a、反省

3月6日、実行動2日目にして、C2の幕場で係の不注意により温度計を破損してしまい以後の気温記録が不可能となり、天気、風向、風力、雲量のみというひどい気象記録しか得られなかった。全くの軽薄な事故により貴重な気象記録を不備なものにしてしまったことを深く反省しています。

b、記録　（別紙）

# 気　象　記　録

| 日 | 3月5日 | | | 6日 | | | 7日 | | | 8日 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 時間 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 |
| 天気 | 晴 | 晴時々曇り | 曇り | 快晴 | 曇り | 曇り | 快晴 | 晴 | 曇り | 霧雨 | 曇り時々晴 | 快晴 |
| 風力 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 |
| 風向 | | NE | | | | | | | | E | | |
| 雲量 | 1 | 5 | 9 | 0 | 10 | 8 | 0 | 6 | 8 | 10 | 8 | 0 |
| 気温 | 27℃ | 21.5℃ | 17.8℃ | 15.2℃ | 16.2℃ | | | | | | | |
| 備考 | コメ・ギナバル | 4860f 林道 | 〃 | 5000f 樹林 | 6840f 樹林 | 樹林 | 樹林 | 樹林 | 樹林 | 樹林 | 4800f 樹林 | 4950f 沢状地点 |

| 日 | 9日 | | | 10日 | | | 11日 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 時間 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | A.M 6:00 |
| 天気 | ガス | 曇りガス多し | 晴時々曇り | 霧雨ガス多し | 晴 | 曇り | 曇り | 晴 | 晴 |
| 風力 | 0 | 3 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 〃 |
| 風向 | | NE | | NE | | | | NE | |
| 雲量 | 10 | 10 | 8 | 10 | 5 | 10 | 10 | 5 | 4 |
| 気温 | | | | | | | | | |
| 備考 | | 6110f 樹林 | 5800f 樹林 | 樹林 | 沢 | 沢 | 沢 | 沢 | キボーリング村手前の芝地点 |

| 日 | 12日 | | | 13日 | | | 14日 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 時間 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | A.M 6:00 |
| 天気 | 晴 | 曇り | 曇り | 快晴 | 晴たり曇ったり | 晴 | 晴 | 晴 | 晴 |
| 風力 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 風向 | | | | | | | NW | | |
| 雲量 | 3 | 9 | 10 | 0 | 6 | 3 | 5 | 6 | 3 |
| 気温 | | | | | | | | | |
| 備考 | キボーリング村の北の屋根 | サンダタン村沢 | ブルタン村林道 | 公園事務所 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |

| 日 | 15日 | | | 16日 | | | 17日 | | | 18日 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 時間 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 | A.M 6:00 | 12:00 | P.M 6:00 |
| 天気 | 曇り | 晴れたり曇ったり | 快晴 | 快晴 | 快晴 | 晴 | 快晴 | 快晴 | 快晴 | 快晴 | 曇り | 快晴 |
| 風力 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 5 | 3 | 1 | 2 | 0 | 0 |
| 風向 | | | | | | NW | E | E | E | E | | |
| 雲量 | 7 | 6 | 0 | 0 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0 |
| 気温 | | | | | | | | | | | | |
| 備考 | 公園事務所 | 8500f | ジナバ小屋 11000f | ジナバ小屋 | ローズ峯 | サヤサヤ小屋 | キナバルサウスの下 | サヤサヤ小屋 | 〃 | 〃 | 水場分岐点登山路 | 公園事務所 |

# 記録係反省

剣持典夫

北ボルネオ合宿を幅広く捉える為、記録ノートを細かく分類した。隊の行動記録に3名を配し、他に隊長日誌・副隊長日誌・リーダー日誌・係別日誌（装備・食糧・医療・気象記録・カメラ・渉外・会計）を設けた。又、個人記録については今迄の書いても書かなくてもよいというのを改め、必ず書くようにした。このように計6冊のノートを用意し万全を期したところ、現地において各人良い記録を残すことができたと思う。

さらに新しい試みとして、合宿中における部員の思考・体験を声に収録しようとテープレコーダーを持参したが、合宿中機械の調子が悪く記録を残すことができなかったのは残念である。

# カメラ反省

高野裕文

今合宿のカメラ係の方針は、今までの国内合宿の記念的傾向を少なくし、記録に重点を置いた。前半のクロッカー山脈内では白黒フィルムを主に使用した。これは露出が不足気味なので、カラーの使用がむずかしかった為である。この山脈は、ジャングルではあるが、大木が平均20mもあり、日本のヤブでは撮影不可能だったジャングル内の迫力ある活動を十分に撮影することができた。

クロッカーからキナバル山への里道では、色彩的に美しい対象物と、めずらしいものを主に撮影した。対象物にはそれほど苦労しなかった。又原地の風俗、習慣、生活等も多少だが撮影出来た。

キナバル山では、カラー、赤外フィルムを中心にした。ここではクロッカーと反対に露出が十分すぎるほどで、フィルターも使用した。使用法をまちがえて、おもしろい写真も数枚出来あがった。

フィルム数は日本でそろえた本数で、本数的に十分であった。尚、記録と記念用に写真帳を作製した。

| 品名 | 数量 | 名称 |
|---|---|---|
| カメラ | 2 | キャノンベリックス |
| | | キャノンFT |
| 8ミリ | 1 | キャノン |
| フィルム | 7 | コダック |
| | 1 | サクラ |
| | 3 | フジ |
| | 2 | サクラ赤外 |
| | 9 | フジカラー |
| | 5 | サクラポジカラー |
| | 10 | 8ミリダブル |
| 付属品 | | |
| 三脚 | 1 | |
| 望遠 | 1 | 200㎜ |
| 広角 | 1 | |
| レリーズ | 1 | |
| フィルター | 4 | O2, Y3, UV, クローズアップレンズ |

# トレーニング係

剣持典夫

国内の合宿よりジャングル・猛暑等一層の厳しさが予想される海外合宿に望む為、できるだけ体力並びに精神力をつけようとの方針のもとに、長期にわたるトレーニングを行なった。

第1期（1月10日～1月18日）

冬合宿を1月5日に終え、寒風をついてのトレーニングを10日から始めた。体力調整に重点を置き、3K走・サーキットトレーニング（ジャンプ・123・腕立・テンツキ・腰入・スクワットスラスト・シャガミ飛び・握力・上体起こし）1セット・アニマル（小ウサギ・亀歩き・大ウサギ）・腹筋・アレイを中心に行なった。

第2期（1月20日～2月8日）

この期間は自主トレーニングとし、3K走、腕立30、腹筋30又は上体起こし50を各自に課した。

第3期（2月12日～2月25日）

北ボルネオ合宿を目前にひかえ、気合のはいったトレーニングを行なうことができた。

（トレーニング内容）

6キロ走、サーキットトレーニング2セット、アニマル、ウエイトトレーニング（バーベル・アレイ・エキスパンダー・巻上げ）、腹筋、背筋、人間スクワット、階段歩き、縄飛び、

今合宿において各自よく頑張ったのもこのトレーニングに負うところが大きいと、係として確信している。

## マレー語スクーリング

吉野弘純

ボルネオ合宿が決定してから、まず問題となったのはマレー語の修得である。一応4年生2人が中心になってスクーリングをやろうということになった。当然その2人は他の隊員に教えるつもりで、大学書林出版『マレー語4週間』で勉強を始めたのだが、全然知識として身につかない。そこで、とりあえず単語を覚えなくては始まらないということで、『マレー語4週間』から重要な単語約70語余りをぬきだし、隊員にも覚えるように、ファイルして冬合宿にもたせた。しかし、冬合宿中にファイルを出して勉強する余裕は全然なく、効果を期待することは無理だった。

このままでは現地行動に差しつかえるので何とかせねばならないということから、大学の期末試験も終った2月中旬より、東京外語大学インドネシア語4年生の柏沼美弓さんに4日間、約3時間ずつ、我々が必要と思われる会話を教えて頂いた。語学はやはり独学ではなかなか覚えられるものではない。この4日間のスクーリングは大変役に立ったと言える。マレー語は文法的には単純で、言わば単語の羅列にすぎないので、その基本的文法を知ってしまえば後は単語の修得が問題となるばかりである。

我々の行動は、現住民との接触を積極的に行なうものではなかったので、合宿中、それほど不自由はしなかったが、もし、もっと言葉が通じたら、我々の平地行動に異った面をもたらしてくれただろうし、面白味をつけ加えてくれただろうことは確かである。しかし約半年の間でそれほどの効果は期待できないだろう。

最後に、4日間の講習の中で覚えた会話のうち、特に必要と思われるものを抜粋し、ファイルにまとめて現地に持って行った。

# 会計

深井関雄

予算の立案にあたっては、台湾遠征の資料、諸パーティーの遠征資料をもとに、現地情報を重視し、幾度となく予算案を検討、修正してきた。今回の海外合宿予算で問題となったのは、国内支出では、計画書作成費、地図複写費、交通・通信費、飛行機代である。この内、前の3つは、予算よりも大分出費がかさんだのであった。特に交通、通信費の予算決定には、細心の注意が必要であると思う。また飛行機代は、なぜ問題になったかと言うと、これは、合宿が間近に迫るまで、渡航手続が飛行機にするか、あるいは、貨物船にするかが決まらなかったことによる。この為、我々は、飛行機全員使用の場合、貨物船全員使用の場合、そのいくつかの折衷案の場合にわけて、予算を組み立てることを余儀なくされた。次に国外支出であるが、ここで問題となったのは、出国税、両替料である。これは、明らかに我々のミスで、これらの予算を組まなかったのである。以上いくつかのミスはあったが、今回の予算案の立案は、結果的にみて成功の部類に属すると思う。

## 会計報告

（単位日本円）

No 1

| （収　入） | | （支　出） | |
|---|---|---|---|
| 個人負担金 | 1,444,000 | 国内支出 | 2,346,678 |
| 4年・現役積立金 | 130,000 | 国外支出 | 418,030 |
| 現役アルバイト収入 | 337,200 | 香港滞在費 | 75,000 |
| 海研積立金 | 322,296 | シンガポール滞在費 | 118,680 |
| OB寄附金 | 708,000 | 帰国報告書作成費・発送費（予定） | 200,000 |
| 一般寄附金 | 271,000 | 次期繰越金（予定） | 162,108 |
| 個人負担追加金（シンガポール・香港滞在費用） | 112,000 | | |
| 計 | 3,320,496 | 計 | 3,320,496 |

# 国内支出・国外支出内訳

No. 2

| ＜国内支出＞ | | ＜国外支出＞ | （単位日本円） |
|---|---|---|---|
| 装備費 | 19,255 | 装備費 | 2,502 |
| 食料費 | 74,150 | 食糧費 | 33,376 |
| 医療費 | 21,000 | 写真費 | 4,350 |
| 写真費 | 40,685 | 滞在費 | 223,512 |
| 梱包費 | 1,500 | 交通費 | 70,982 |
| 贈呈品費 | 65,900 | 通信費 | 28,512 |
| 計画書作成費 | 21,590 | ガイド料 | 2,400 |
| 東西南北印刷費 | 11,000 | 贈呈品費 | 13,224 |
| 地図複写費 | 34,055 | 記録費 | 920 |
| パスポート・ビザ手続費 | 39,375 | 出国税 | 21,360 |
| 保険加入費 | 33,384 | 荷物預け料 | 2,640 |
| 交通・通信費 | 62,229 | 両替料 | 12,200 |
| 帰国報告会費 | 15,000 | 雑費 | 2,052 |
| 飛行機代 | 1,890,000 | | |
| 雑費 | 17,555 | | |
| 計 | 2,346,678 | 計 | 418,030 |

# 総　括

寺光克彦

北ボルネオ海外合宿は、11月8日のOB理事会において、メンバー、予算、合宿地等が承認され、里見隊長、深谷副隊長を中心に、コーチ、委員、2年生、若干の若手OBの構成で、計16回の委員会を行なった。

計画は、準備、行動、整理の3段階に分かれ、準備段階においては、アプローチ、現地計画、各係、資金の4つを委員会メンバーで分担した。行動、整理は、各係の任務を中心に行動し、現地行動中は、神沢部長、小谷代理監督を中心に、コーチ、若干OB若手によって事務局を設置してもらった。

準備段階

43年4月頃より、当時の3年生を中心としてボルネオに関する資料収集に取り組み、9月中旬に北ボルネオ合宿の原則案が作成され、海研合同委員会で審議され、この間に現役の交代が行なわれ、部長承認を取り、現役の春合宿の一環として行なう方針を打ち出し、理事会で、現役、OB会の共同保管となっていた海研積立資金の利用と、メンバー等に対する承認がおりた。11月8日迄の資料収集状況は、主として、ボルネオ概観、地図、海外への諸手続関係、ボルネオ遠征隊の有無等の下調べ段階であった。新委員会発足以後は、船会社、航空会社、現地経験者等との交渉を中心に資料整理、現地計画、係計画、寄附依頼諸手続を行なった。

12月19日、体育局協議委員会にて承認され、大学行事の一環となった。

資金計画も、土屋OB、山本コーチを中心に、青木、岡田OB、現役若干にて、OBへの個人的募金活動を展開し、目標額を上回る金額を達成するなど、好条件のもとに合宿地へ向け飛び立った。

1. アプローチ

ボルネオ向けの木材船を中心に、香港、シンガポールへ配船している船会社20数社をリストアップし、本格的交渉に入る。しかし、大手7社をはじめ、20社近くが、船員組合との協定、企業方針等によって乗船が不可能となり、12名の船便利用の線が崩れる。しかし、2社、計6名分の乗船わくの確保に成功する。しかし、配船及び寄港地が未確定等の問題も残ってい

たが、継続交渉として別にマレーシア＝シンガポール航空（略称ＭＳＡ）と交渉に入る。15名全員が往復普通運賃の時、15名が23日間の周遊券を利用した時、3名普通運賃、12名周遊券利用の時、15名を団体割引とした時、それに、重量制限の問題や、万一の事故で23日の周遊券でその日数以上かかった場合の時の支払い等に関する条件を再三、交渉する。当初の我部の原則案、行き3名飛行便、12名船便、帰り5名飛行便（4年生の就職期日の問題）、10名船便の予算約120万円。航空会社との交渉の結果、3名先発普通運賃、12名団体割引周遊券利用で約190万円。そして、約20万円をマレーシア＝シンガポール航空並びに、旅行代理店藤田観光より寄附という事で実算約170万円、差額50万円とし、次の条件、船便での体力消耗、集結の困難性並びに、先に到着した者の滞在費、現地計画へスムースに移行が可能か否か、リーダーの把握等の問題から飛行便に決定し、重量も1人30キログラム迄、周遊券の期限も、万一事故が発生した時、最大限1週間を認めるという特別な便宜を計って貰う事になった。そして、査証、パスポートの件もＭＳＡの杉本氏に指導して貰った。

ＭＳＡ利用の結果、現地コタキナバル、税関フリーパス、現地の安宿手配、現地新聞の我々の紹介、シンガポール回りが、（合宿日数が余った為）大変安価で行けた事、行きの香港で一流ホテルに泊れ、部員が少しは富裕階級の一端をのぞくことができた事などが、その利点としてあげられる。

結論として、その合宿の目的、状態によって、飛行便、船便をうまく利用するのが良い。ただ船会社には公文書を用意すると共に、出来るだけ強力なコネを探すべきである。今回の飛行便利用は、一応良かったといえる。尚、船便によって装備類を送る事が可能であれば、送ると良い。

(1)　現地計画

キナバル山の情報は、各処より入手出来たが、クロッカー山脈等の情報は、我々が期待するようには入らず、立案が遅れた。

現地の情報局に問合せを出したが要領を得ず、内陸部に足を入れた慶応大のパーティーや東京医科歯科大、大阪大学等の諸先生方より様子を聞くが、我々の部活動において必要な情報は得られなかったが、ジャングル、食糧、蛇等に関して大きな収穫があった。この情報をもとに、今合宿の目的、日数、場所、その他諸問題を決定する。まず自然における放浪性と開拓性の部

の方針に基づき、ボルネオにおいて、未知なる自然の4千メートル峰キナバル登山、熱帯特有の密林踏破の要素を折り込み、キナバル山に5日間、情報皆無のクロッカー山脈の密林に約2週間の日数をかける事にする。どちらの山域を先に行なうかは種々の関点より討議されたが、先発隊を派遣し、クロッカー山脈の密林の調査によって現地決定をし、食糧補給の形態も現地決定とし、3案程、コースを作成して本部事務局に置いて出発し、現地決定を手紙、電話の2つの方法で知らせる事にする。

現地コースが決定されないまま海外へ出かける事は、無謀と言えない事もないが、日本において情報が皆無であり、現地においても同様だったのだから仕方なかったろう。

しかし、今回の合宿は、一応成功したから良いものの、本来、海外であろうと、国内であろうと、志向する山の特徴、並びに、資料の有無、そして資料が有するならば揃えておくべきである。今回は、そういう意味で、海外という名にとらわれすぎ、山行における準備並びに、安易に海外合宿というものに熱中し、打出すべき目的と特徴付けが、準備段階から弱かったと思う。

(1) 各係

今回は、各合宿と同様、会計、渉外等を除けば、部の係員が各係を受け持ち、大体大きなボロも出さずに準備をした。特に医療係には、福島医大卒の竹崎ドクター（川崎ＯＢ義兄）を迎え、準備して頂き、準備段階より安心しておれた。合宿中でもそうであったが、一つの精神的安心感の意味で、未知なる自然においては重要な位置を占めるのではないかと思う。

(1) 資金

個人負担、海外遠征積立金、部員アルバイト、部会計等で約230万前後集まり、あとは、ＯＢの個人的寄附、並びに一般寄附によって約90万円集まり、金銭の苦労を知らないで海外合宿へ入れたのは、一般的に、非常に稀な事であったと言ってよいであろう。今回の合宿を行なうにあたり、現役はアルバイトを行ない、9名の部員が半年間に約33万円を捻出するのに成功した事は、今後、海外へ出るに際しての資金作りに、従来の、音楽会で、個人のノルマ制をひき、個人がその金額をかぶるという状態から新しい資金源を求めたことは有意義であった。それと、今回の海外合宿に際し、若手ＯＢの各代の合計金額が40万円プールされていたことは、現役側が、資金的

裏付けをもって外に目を向けられたのではないかと思う。現在の部体制で、海研資金のために、音楽会等の催し物をする事は、かなり困難であるので、長期的な目で計画着手と同様、資金作りもするべきであろう。

## 行動段階

現地コースは、先発隊のクロッカー山脈の密林調査によって、国内で計画しえなかった主脈縦走に切り換え、前半1週間でクロッカー山脈縦走、後半5日間をキナバル登山、それに予備日数2日、と最終計画を作成する。しかし、前半は、先発調査の地図の読み違いから1日の予備日数を費やし、又1回の予備日数を停滞に振り替え、キナバル山頂上近くで、1日の山上停滞とする。活動は、日本において計画していたものより密度の濃い活動を行なえたが、予定日数の狂いは、やはり、我部のような活動においては反省するべきである。

未知なる自然、記録、情報のない山域に入る時は、最初から、そのような計画を作成するべきであり、今回は、当初より諸条件がわかっていながら、従来の計画様式を持ち込んだ事は失敗である。

各係は全般によくやっていたが、カメラ係は、フィルムの2重写し、カメラ2台紛失という大失敗をしてしまった。誠に申訳けがない。今回、この件に関して、カメラ係という責任感が薄かったのではないかと反省する。今後、カメラに対する保管は厳重に、かつ、フィルム等も、自分のよく知っているものを使うべきである。密林内は、また、樹々の間隔が非常に密であるため、暗すぎ、密林の様相をとらえる事が出来なかった。合宿中は、大きな怪我も病気もなかったが、ドクターがついているという事は、大変精神的に有意義であった。食糧については、我部でここ4,5年言われている事であるが、軽量化と必要エネルギー、それに、満腹感といった問題等が、又もや問題となった。そして、食糧係の基本的な研究が不足しており、今後の指導の成果を期待する。

尚、今回、現地行動に於て、2年部員を後半で現地除名した事について、ただ単なる自覚不足、怠惰等の個人的責任に帰するだけでなく、委員会命令を無視するような部員を2年間も残した部の指導、並びに環境を再検討するべきであろう。

除名理由　2年生小林努

1. 個人装備で認めていない個人的カメラの携帯。こ

れに対し、再三、再四の勧告にもかかわらず、撮影続行。

1,係の任務怠慢。食糧、医療、2年生という3つの任務を全く遂行していると思えず、合宿に多大なる支障をきたした。

1,部員としての自覚不足。準備段階の委員会命令である、登山靴、特にビブラム底の手入れを徹底したにもかかわらず、行動以前に1人だけビブラム底がはがれており、前半を終え、2日停滞後、後半のキナバル山に向かう際には、両方のビブラム底が破れており、岩山であるキナバル登山に際し、安全性の見地より、きわめて危険であった。最初は、リーダーの注意により補修したが、後半は全くその意思が見えず、委員会の勧告にも反抗的に命令無視の態度であったので、現地委員会にて除名とする。尚後半は、コーチを1人つけ、キナバル山麓のユースホステルで保護した。

整理段階

帰国後、委員会、反省会、帰国報告会、帰国挨拶状、並びに礼状、報告書作成と、大体順調に整理段階を終えつつあるが、現役は、新人募集、新人教育、新人歓迎合宿とかなり多忙な生活を送っているので、少し整理段階でミスが出てくるのではないかと思います。しかし、できるだけミスをなくすよう努力します。

一応今回の委員会の経過、並びに反省を書いてみましたが、今回の合宿は、海外合宿を実行するについての一応の成果を上げたものの満足すべきものではないと思います。今後は、遠征計画、海外合宿、海外ワンダリングと外へ出る機会も多くなると思いますが。今回の失敗を2度と繰り返さぬよう、次期のために少しでも今合宿が役に立つ事を希望します。

# 感想・研究

# 北ボルネオの自然

深谷　豪・深井関雄
剣持典夫・土屋　猛

## 自然概要

5分の4がジャングルにおおわれているサバ州は、ボルネオ島の北部に位置し、ブルネイ、サラワク、カリマンタン（インドネシア領ボルネオ）に境を接している。西に南シナ海、東にスル海、セレベス海があり、海岸線は800～900マイルに及んでいる。クロッカー山脈は西南国境のサラワクからキナバル山（マレイ群島最高峰・4101メートル）に至る迄、海岸にそって平行に連なっている。この山脈と西海岸の間は海岸平野で、人口もかなり集中している。又、最も長い河はキナバタン河で、ウィティ山脈の奥地から流れはじめ、サンダカンとタンビサンの間の海に流れ込むまで、約350マイルにも達する。

## クロッカー山脈

クロッカー山脈の主脈はサバ州の西海岸から約30kmの所に位置し、タンブーナン附近から北北東へ、ブンドトゥーハンを越え、キナバル山へとのびている。その高度は平均2000m位である。

〈気候〉サバ州の気候は、熱帯雨林気候（Af）であるといわれているが、純粋なAfではなく、サヴァンナ気候（Aw）にも似ており、雨期と乾期との別がある。普通、乾期は12月から4月までで、その他の期間が雨期であるとされているがあまり定かではない。またその時期も、同じサバ州でも場所によりだいぶ異なる。我々が行った時期は3月であったが西海岸地方（コタ・キナバルがある方面）では乾期であり日本の夏のような暑さで曇空などは1度も見なかった。しかしクロッカー山脈やその他サバ州中央部に位置する山脈を境として、それより東の地方（サンダカン方面）はまだ雨期であった。クロッカー山脈は土地の人が言うことには乾期ということだったが、雨は降らなかったが、1日中晴天という日は少なく終日曇の日もあり、ガスのため視界が10m程しかきかない朝もあった。クロッカー山脈が乾期においてもさほど天気が良くないのは

地形と気流との関係によるものであると思われる。この関係はキナバル山からクロッカー山脈を見下ろすと非常によくわかる。クロッカー山脈より西の地方には雲はほとんど見えないのにクロッカー山脈は厚い雲の冠をかぶっている日が多い。

巨大な竹

〈動物〉

サバ州のジャングルにはグリーンスネーク・イエロースネークなどの毒蛇やオラウータン・ギボンなどの猿の仲間、ベランドク・バーキングディヤーなどの鹿の仲間、その他数百種の小鳥がいるが、我々がこの中で見たものは、数種の小鳥だけであった。ほんとうにこれらの動物がいるのかと疑ったが、しかしジャングルの中に無数のワナがしかけてあるのをみると、これらの動物たちはクロッカー山脈にもいるのであろう。

〈植生〉

ジャングルというとおよそ普通の人はターザン映画に出てくるようなジャングルを想像するであろうが、クロッカー山脈のジャングルは、平均して高度が2千m近くあるせいかだいぶ趣が異なっている。樹木はほとんどが広葉樹であり、カシ、クヌギなどの日本で見慣れた樹木も多く、鞍部附近には竹が密生しており、日本の藪山を歩いているのではないかという錯覚をいだかせる所もあった。しかしよく見るとこれらの樹木はどれもほとんどが20m余もある巨木であり、最上部附近にのみ葉が繁茂しており日本の樹木とは同種であってもいささか違っている。

また竹にしても、日本の竹よりもいくらか節が長めであった。クロッカー山脈でいわゆるジャングルにふさわしいと思われる植物は、この地独得のつるのついたトゲの木と小さなシュロみたいな木であろう。また巨木から垂れ下がった人間がぶらさがっても大丈夫なつるもジャングルにふさわしい植物であろう。

〈地形〉

綾線――綾線の幅は日本の山脈に比べて非常に広く、常にいちばん高い所を意識して歩かないと綾線からはずれてしまう危険性がある。また日本の綾線よりも小さなボコの数が多い。

尾根――尾根は地図（5万分の1）ではさほど顕著ではないと思われる尾根もかなり大きく、日本の山に比べて綾線から派生する尾根の数の多さと大きさには驚いた。巨木が乱立しているため視界がまったくきかず、地図と磁石のにらめっこで進んでいっても綾線をはずれ尾根に迷い込んでしまった時もあった。

沢――沢はつめ附近はやはり傾斜は急ではあるが、30kgくらいのキスリングを背負っても、どうにか上り下りできるぐらいの傾斜である。このあたりは湿地で、つるの木が密生しており薄暗くヘビが出そうで気味がわるい。つめから5分ぐらい下るとつるの木もなくなり、あたりは明るくなり岩が現われる。やがて10分位で岩の間から水が見え、はじめる。沢はやがていく本もの沢と交り川となる。川は蛇行しておりところどころに小さな砂州を作る。そこには両手をあわせてもとどかないような竹が密生している。やがて川が作った砂州は大きくなり道が現われはじめ、その道は左岸から右岸へ、右岸から左岸へと川を横切って上流の部落へと続く。概してクロッカー山脈の沢は傾斜がゆるやかで滝というようなものはほとんどなく、水もとりやすく、部落へのルートでもあり、山の鉄則とは正反対であるが、クロッカー山脈では、どうしようもなくなった時は沢へ逃げるのがもっともよいと思う。

# クロッカー縦走について

深谷　豪

北ボルネオで合宿を行うことが決定してから、クロッカー山脈をどうやっつけるかは、我々隊員及びコーチにとって、大いに頭の痛いことであった。

まず第一に、高地とはいえクロッカー地域は、熱帯のジャングルそのものであるということである。このことから必然的に、熱帯特有の風土病、動植物の害、ジャングルの風土そのもの及び水等から部員の健康を守らなければならない問題が生れてくる。

この問題を解決するには、クロッカー情報を集め、それに基ずいて対策を立てねばならない。しかし、クロッカー情報は、我々の努力にもかかわらず、国内はもとより現地ボルネオからも確たるものを得ることが出来なかった。

そこで我々は、考えられる全ての病気、怪我、動植物の害等をひろいあげ、対策を練りはじめたが、おもわしくなかった。というのは、病気や怪我は自らその名を我々に知らせてくれないからである。たとえば熱が出ても我々には、その熱が風邪なのかマラリヤなのかあるいはその他なのか区別がつかないからである。しかし、この問題は間もなく解決した。川崎コーチの知りあいで福島医大をこの春卒業する竹崎氏の参加を取りつけることに成功したからである。

第二に、クロッカー山脈のどこを歩くかであった。このことについても、どこが歩行可能か不可能かの記録は、はっきりせず5万の地図が唯一の基礎となった。

我々は日数とかねあいでいくつかのプランを作り検討したが、全く机上のプランそのものであった。

そこで、安全性と計画の確実な実行をめざして先発調査隊を送ることにした。そして、このことを前提として、先発隊出発前に最終プランを作りあげたが、このプランは先発隊の調査しだいで変更出来るという案にすぎなかった。先発隊には、深谷、寺光、吉野の3名がきまり、本隊出発1週間前にボルネオに入り、現地で情報を集めさらに最終プランのメーンエベントになるであろう。クロッカー主脈のアラブ山から東の綾線を前進できる限り進んで調査を行うということにした。

2月22日先発隊3名は羽田を出発し、香港を経由

して23日北ボルネオはコタ・キナバルに着いた。マレーシア国サバ州の州都である。このコタ・キナバルでの2日間で情報を集めようとしたが、雑用もあり、成果はあがらなかった。26日ジープに乗り、アラブ山の下まで行き、そこにテントを立てたがいままでの疲れがでたのか現在地の確認だけすますとあとはゴロリで動く気が全くなくなってしまった。

翌朝アラブ山まで行き（ここははっきりしたルートがある）刈りはらいのしてある山頂から、クロッカーの稜線を観察、のっぺりとただっ広い稜線、尾根、ビッシリ茂った樹木、いかにも苦戦しそうな感じだった。

とにかくクロッカーの稜線に東に向けて前進してみる。取付きの所でちょっと時間をくったが、そこをすぎると稜線上には踏み跡があり、サブザックの我々はかなり速いペースで東進出来た。意外であった。2時間半程進んだがペースにかわりはなかった。所々にコブがあったがビッシリ茂った潅木のため現在地確認はどこでも全く不可能であった。そこで我々はいままでの歩行スピードと時間から考え6810地点のコブの一部まで進んだものと考えてしまった。

テント場からアラブ山まで2時間、しかも登り、ほぼ同じスピードなら稜線上を2時間半歩けば同じ距離を歩けないわけはない。とすれば6810地点のコブの一部まで進んだと考えても不思議はない。現在地確認は出来なかった不安は残ったが。

以上のことから先発隊は、合宿計画を変更し、アラブ山以北のクロッカー全山を稜線に沿い北上するプランを立てた。クロッカーでは低地より高地は、はるかに行動しやすかったからである。そして、高地にいれば熱帯特有のもろもろの問題もぐっと少くなるとも考えた。

我々はクロッカー縦走の成功を確信して帰路についたが、ちょっとした油断から1時間程ルートを失ったが、とにかく無事テント場に着いた。午後5時ジャングルが暗くなる直前であった。

3月2日、本隊と合流、状況を説明し、先発隊の案を示し承認され、東京へも連絡する。ここにいたってやっと今合宿の行動計画が確立した。

3月6日、先発隊情報の下にアラブ山の分岐からクロッカーの稜線に我々は勇躍して前進を開始した。キスリングを背負った割にはハイピッチであった。2時間ちょっとで先発隊の最前進点を通過、したがって6810のコブに取り付いたと誤解する。このコブより稜線は北東方向に走っている。ここで調査に上級

生が3方向に行く、その結果稜線とおぼしきものは、ここから南方にのびているとのこと。全く意外であった。何はともあれその稜線を進む、稜線は予想外にヤセていてかなりのアップダウン。この項から現在地はどこか全くわからなくなる。と同時に先発隊情報の信頼性もくずれはじめた。以下行動日誌と重複するので行動概要は省くが、我々はバティーの全力を投入したが遺憾ながらスンゴイ山から東の尾根に入り、沢を下りクロッカー主脈を後にした。

クロッカーのジャングル

かくして先発隊プランは、クロッカー主脈を1/3強残して完全には実行できなかった。

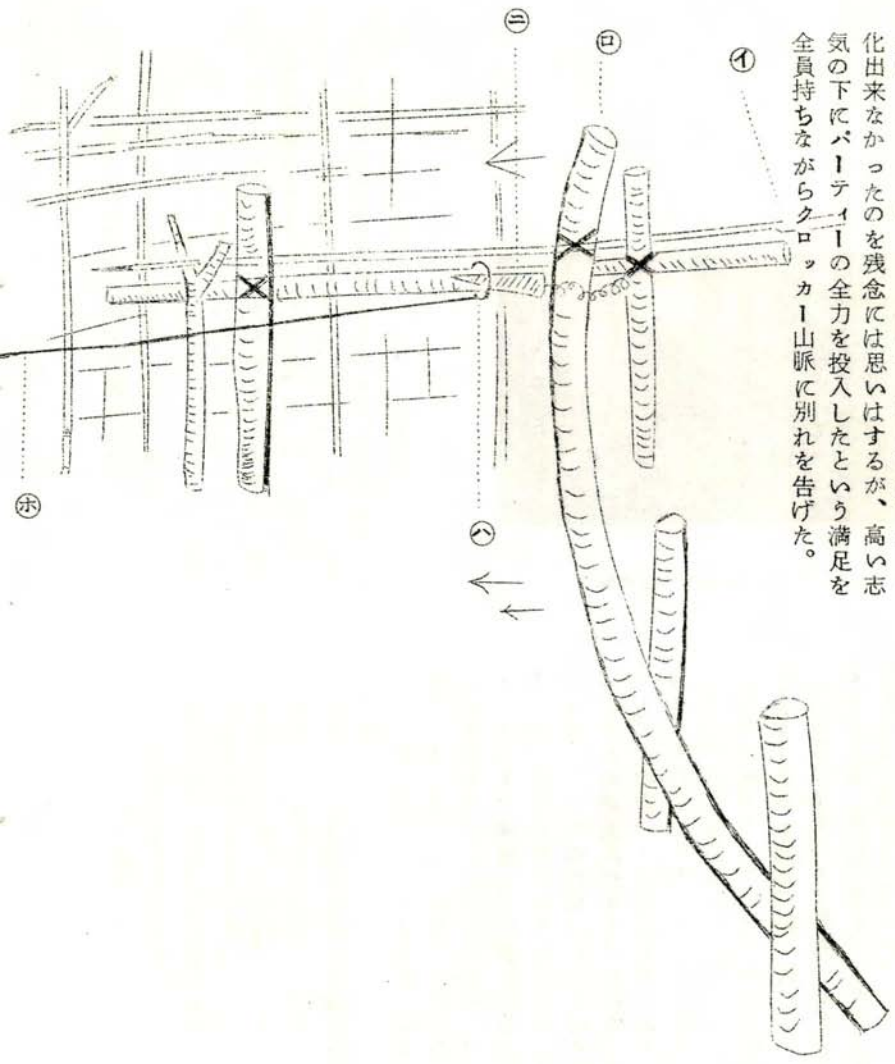
幸運にも全員快調で志気も高かったのにスンゴイ山から縦走を断念しなければならなかった原因は、日数も無視できないが食糧の不足であった。我が部が長年行って来た縦走形式では、実行動をダイナミックに行うには1週間程度の食糧の負荷が限度だからである。

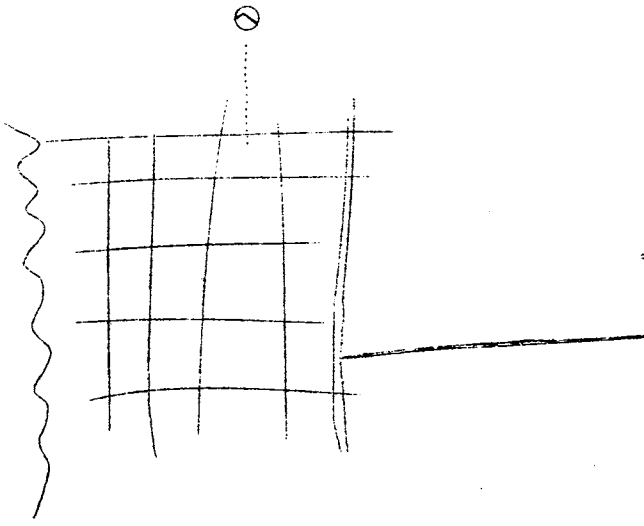
次の原因はクロッカー全域に高くビッシリ茂った樹木であった。この樹木のため国内のヤブ山のように現在地確認がひんぱんに出来ず、アラブ山からスンゴイ山まで稜線上で位置確認が完全に出来たのは1ケ所、部分的に可能な地点は2・3ケ所にすぎなかった。このため行動はしばしば中断し、稜線を確認するため調査に行かなければならなかったからである。このため1日地図上で3Kも進めない日もあった。実行動は案外スイスイ動けたが、方向をつかむのが非常に困難だったのである。このように先発隊情報に基ずくプランは、本隊の前進可能スピードを予測するのを完全に誤った。

先発隊はクロッカー稜線の状況を完全は把握することに失敗したのである。これがクロッカー縦走の苦戦の最大の原因であった。

しかし、先発隊に与えられた1週間の時間とクロッカーの状況から、あれ以上の調査を行うことは先発隊には不可能であった。

北ボルネオ合宿隊は当初よりクロッカー縦走に最大のウエイトをおいていたので、行動計画を全て消化出来なかったのを残念には思いはするが、高い志気の下にパーティーの全力を投入したという満足を全員持ちながらクロッカー山脈に別れを告げた。






「罠」

図の罠は我々がクロ・カー山脈縦走を開始して2日目頃から、ルートとしてとった踏跡道に沿って無数に見られたものです。

しばしば、この罠をまたいで進まなければならなかったので、ルートハンターが前もって木のバネの歯止めを一つ一つ外した。

部分の説明

イ……直径約0.5センチの細い竹の先を鋭く切り落したもので、矢の役目をする。

ロ……弾力のある新しい木で、長さ2～3メートル、直径3～4センチ。

ハ……つるで作った直径3センチの輪。

ニ……ハと共に、ロの木のバネをおさえる。形は、箸とくさびの中間的な形。

ホ……細い竹や雑木で、垣根のように組まれたもの。獣が、罠をしかけてある通り口だけを通らすためである。

迫われた獣がホのつるに足をひっかけるとこのつると結びついているハの輪が左へ引かれて、ニのくさび型の歯止めから外れる。

2本の立木をうまく利用して、バネとしたロは、ニとハとの結合によって弾力を蓄積しているのであるが、その歯止めが外れると、バネは放たれ、その先についている竹の矢イが通り口で足をひっかけた獣に突刺さる。

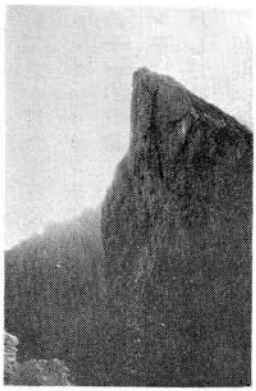
# キナバル山

キナバル山は、北ボルネオの西岸に沿って南北に走るクロッカー山脈の北端部（北緯6°5'、東経116°30'）に位置していて、東南アジア最高峰（海抜4101メートル）の山である。成因は、褶曲したクロッカー山脈の柔かい部分が浸食を受け、硬い部分だけが残って、現在の姿を形成している。パナラバン小屋を過ぎるあたりの3300メートル以上は、花崗岩から成る巨大な岩の塊りになっている。頂上付近は東西に約4マイル北に約4マイルのびていて、丁度U字の形をしており、これに沿って沢山のピークが立ち並んでいる。主なピークを上げると、西山稜に位置するものとして、最高峰のローズピーク（4101メートル）、セントジョーンズピーク（4099メートル）、アレキサンダーピーク（4003メートル）、そして、最も雄大な形をしているキナバルサウス（3932メートル）があり、東山稜に位置するものとして、キングエドワードピーク（4096メートル）、キングジョージピーク（4067メートル）がある。また、東山稜と西山稜の丁度中央部に位置し、最も奇異な形をしていて、ロバの耳によく似ているドンキーズイヤー（4054メートル）等がある。このU字形状に立ち並んでいるピークに、食込んでいるのが、我々に恐怖の念を抱かせたローズガリーの壁である。そこは、ひっそりとしていて、日もさし込まず、風が不気味に、うねりをきかせている。垂直に1500メートル以上も切れ落ちていて、登山不可能と言っても過言でないくらいのスケールの大きさがある。それとは対照的に、直射日光を受け、平和そのものの南側の緩斜面は、まるで陸上競技でも開けそうな広々とした台地状になっている。

ローズピーク

4000メートル以上の頂上付近でも、1年を通して全く降雪を見ず、1番寒い時でも薄氷がはる程度である。登山の季節としては、最も雨の少ない1月、2月、3月が適当とみられる。雨期の登山は、岩の部分では滝のように雨が流れる為、非常に危険を伴うに違いない。

キナバル山の名の起りについては、多くの説があるが、中国人の間で信じられているのは、キナ（China）はシナ（China）のなまり、バル（Balu）は



ローズガリー

Baharu（新しい）というマレイ語が変化していったもので、つまり「新しい支那」を意味するものである。中国語では神山と書く。また原住民のカダザン族やドゥスン族の間では、この山を、古くから信仰の山として、この世を去った者の霊魂の永劫の安らぎ場所と信じられている。アラブの頂上で見たキナバルは、まさにそれにふさわしい姿をしていた。

動植物の分布は、バイナップルやバナナ等の熱帯性植物からサヤサヤという日本のはい松によく似た類の高山植物まで、広範囲にわたって分布している。話によると、この地域には、かなり多くの種類の植物がみられるらしいが、我々が特に目についたものは、蘭の花と食虫植物のウツボカズラぐらいであった。植物に興味のない者でさえも、このラッパみたいに口を開けたウツボカズラの奇妙な姿には魅せられてしまう。また、この地域に生息する動物としては、日本の山地に住む動物の他に、オラウータン、野牛、サイ、ヒョウ等が目撃されているが、現在、クロッカー山脈の走っている西部では、ほとんどが人間の住む領域となっていて、このキナバル山周辺においても、野獣は非常に少なくなっているということである。東部では、数少ないが見られる野象も、この地域では全くいないし、期待していたオラウータンも見られない。我々が見たものと云えば、サヤットサヤド小屋付近で見かけたねずみらしき動物だけであった。また、この他にサバに産する鳥類、昆虫類等もほとんどがこの地域で見られるということである。

# 原住民の生活

高野裕文・小西克三
渡辺正美

## 民族

1, その構成

マレーシア連邦サバ州に住む原住民には、カダザン族、ムルト族、バジャウ族などがあり、そのうちカダザン族が、原住民、非原住民（中国人、ヨーロッパ人など）を合わせての32%の民族構成を持っている。

我々が村で見かけた原住民は若干のドスン族を除き、ほとんどがカダザン族であった。

2, その一般的印象

カダザン族は概して好意的で陽気で人なつっこく、我々の休息している所に、わざわざ多勢でやって来て、笑顔で応対（と云っても何も通じはしなかったが……。）したりした。又時には幕営地に2・30人の原住民が日が暮れても我々の夕食が始まるまで一緒にいてわけのわからぬことを話したりしていることもあった。そして彼らは我々が次の早朝、出発する時には、待ち構えていたように、わざわざ我々にルートを明瞭に教えてくれるために途中まで一緒についてきて、そのルートを先導してくれるという熱心さであった。又ある時には、我々が畦道を通っている時に、幼児を背にしたオバサンが大きな声で、Jalan（道）はあっちだと一生懸命指図してくれたこともあった。

実のところ私には、彼らのこのような好意と親切が不思議に思われた。なぜなら、そのボルネオ原住民という言葉の受ける印象から、あるいは、その村落形態を一見した時の印象が、余りにも他民族との交流が欠如しているという風に考えられ、その結果として、彼ら以外の民族を驚きの交った敵意の目で見るであろうと考えていたからである。

しかし帰国後理解したことであるが、イギリス統治当初においては、彼らの民族的誇りと、自負心によってその統治が容易なものでは決してなく、又当時の勢力が莫大なものであったという事実から、彼らは他民族に対して、何らのおじけと敵対心を持っていないということが明らかになり、彼らの親切心と好意的性格の実際が理解できた次第である。

ところで彼らの生活意識の面と云えば、言語上の

不備や、十分な彼らとの接触がなかったので確定的なことはわからないが、彼らは、我々のように生活することと自体にアクセクしているということなく、又深く自身のこと、あるいは世界のことを思考することは決してないように思われた。悪く云えば、彼らは、その日暮しの生活を満足して生きて行くのみであり、一般動物と何ら差異はないのであるが、我々の意識の中には、名誉欲、金銭欲、保存欲など後天的に移植された意識があり、それに苦しめられるということが日常茶飯事となっているのに比べ、彼らには決してあるとは思われず、純粋素朴な自然児として生きているという印象が強烈であった。

3. その風俗

a、服装

男は、白か無地の半袖のカッターシャツに短いジーパンか短パンを着ており、たいていいみんなはだしであり、何も履かずに岩の上をピョンピョン跳ねながら歩いているのは驚きであった。そのためか、足の形態が我々のとは若干異っていた。又腰には約50センチ位の蛮刀をサヤに入れて下げており、勿論、ジャングルの伐採に利用するのではあろうが、誰も彼も下げており、その蛮刀は男としての象徴か、あるいは、何らかのお守り的要素を成しているものではないかと思われた。

女は胸から足首までの長い派手で種々の模様の入った布を巻きつけており、簡単で派手なブラウスのようなものを上に着込んでいた。女もやはりはだしであった。

なお、これらの繊維製品は、彼等によって自給されているものとは思われず、(というのは、それらを製造する機械らしきものを目にしなかった。)華僑との物々交換によって得たものであろうと推測される。時には、女の下着なども見うけられ、これらが自給されたとは、とうてい考えられず、やはり、華僑との交流によって得たものと考えるのが妥当であると思われる。

b、家屋

カダザン族の家屋は、恐らく、乾期の飲料水を得やすくするために、又降雨期には、水はけを良くするためにという生活上の知恵からか、山肌を切り開き、その急斜面上に階段状に建てられていた。それらの家屋の各々は高床式の形態を有していた。床と壁面は竹を簡単に張りつけたもの、あるいは粗末な板を張ったものであり、日本の土壁はなかった。又窓

は少く、1㎡位のが1つか2つあるくらいで、棒が立ててあるだけの粗末なものであった。家屋が高床式のため、入口には階段が作ってあった。屋根は、ヤシの葉でふいたものが一般的であったが、時にはトタン板を利用しているのを目にし、驚いた。又、水は各家庭に行き渡ってないらしく、各村には1本か2本のトイがあり、それを共同の水として利用しているらしかった。

c、その他

一番身近なものとしてタバコについて少し気のついたことを書いておきたい。

女は、変なものを口にして一明らかに、それはタバコの1種だと思う一口の回りを真赤にしてガムか何かのようにグチャグチャやっていた。出くわす女みんなが、そんな様子で余り気持の良いものではなかった。男はといえば、(もっとも確定的な事実ではないが)バナナの葉を干したものの中にタバコを入れて、それを、本来のタバコのように細長く丸めて喫うのであるが、我々もキナバル登頂途中にHOFF氏に1本頂だいしたが、空気の流入が激しすぎて、空気ばかりスコスコ入ってくるだけで、タバコを喫っているなどという気分は全く起きなかった。なお、そのタバコは、かなり強いものだった。

## 農業

沢から平地に出た時、まず目についたのが焼き畑であった。現地到着前、私も、彼らの農業形式は、当然焼き畑中心で、その焼き畑面積もかなりの広範囲に渡ってなされているものであろうと考えていたが、それを実際見てみると、極めて小規模のものであるのに驚いた。

原住民の部落

そして又、焼き畑と云っても、何らかの方策が施してあるのではないだろうかなどと思っていたが、それらは全く原野を焼き払っただけの文字通りの焼き畑にすぎなかった。その焼き畑は、わずかな平地や、山の斜面が利用されていたが、まだ焼き終えたばかりのようで、何が栽培されているのか判明しなかったが、日本での焼き畑と同様、恐らくサツマイモなどのイモ類が栽培されるのと考えられる。

部落の周辺には、バナナ、パイナップル、ヤシの木などが豊富にあり、又これらバナナ、ヤシの実などの果実類を利用して、衣類あるいは、他の生活必需品を、華僑との間で物々交換するのであろう。しかし、これらも、自給と交換以上の役割は果たし得ず、すなわち、商業的意味を持つ、プランテーション形態を有しているのを見ることができず、残念であった。

ところで、ある程度の平原には水田が見られ、（もっとも当時は乾期であり、水は全然なかった。）米も食料に利用しているらしい。しかし、これらの稲作の栽培形式を、我々日本のそれと同様に考えるならば大違いである。又東洋という地域性から想像される稲の大量生産というのをこの地に当てはめるのも大違いである。我々がそれを目にした時は、稲もすでに、収獲段階にあったのだが、それらを彼らは、狩り取るというのではなく、穂の先を鎌で切り取るだけであり、その形跡が随所に見られた。このような粗野な方法で栽培されているので、収獲量はごくわずかで、自給率は20%そこそこだと云われている。

このような稲作方法もさることながら、もっと驚いたのは、その水田の中に、水牛が10余頭ものんびりとたわむれており、それに対して原住民が何らかの注意も払っていないということであった。水牛は、確かに、彼らの生活にとって必要不可欠なものであることは疑えないが。それを遇りに遇って（本当に遇りに遇ってという感がした。）稲の上にのさばらしておくとは、彼らの無欲の一面であると考えられなくもないが、それにしてもどうも、彼らの心境が理解できない気持である。

## 家畜

我々が目にした家畜は、水牛、黒豚、鶏、ヤギなどであったが、それらは、一家族に私有的に所有されている風には見えず、村落の共同財産的なものであるように思われた。これらの家畜は、彼等の重要な動物性タンパクの補給源の意味をなしているのであろう。

## 集落

彼らの集落形態を見ると、一部落は、10余戸からな

り、それが、1つ、あるいは2つの山をへだてて、他の部落に続くという形式をとっている。

先の家蓄の項でも若干見たように、それらは、1家族の私有という風には全く見えず、（というのは、それらは完全に野放しにされており、どこの家の付近にもうろちょろと近づいていた。）それらはその部落の共同財産的なものであると思われた。すなわち、その集落形態は、完全な個別家族から構成されているものとは考えられず、原始共産的な要因で構成されているものと考えることができる。しかし、その集落が、血縁関係によって構成されているとは、地域性と、他民族（とりわけ華僑）との交流が盛んであるということを顧みて、とうてい考えられず、（なぜなら血縁内婚姻の劣性が十分認識されていると考えられるから。）恐らく氏族関係により構成されていると考えるのが妥当であろう。このように考えてみると、他部落との友交関係も理解できる。

## おわりに

彼らの生活は、都市生活に浸り切っている私には驚きであり、種々な思いを起こさずにはいられない。彼らは、何らかの高度文明を甘受しておらず、全くその日暮しの感であり、我々とは生活感情も、精神構造も、人生に対する考え方も根本的に違っているであろうし、彼らには、我々の日々の苦悩はなく、自然の中に正に自然児として生きているように思われた。我々には、学問をすることができ、書類も読め、テレビを見ることができ、何の不都合も感じないはずの生活であるのに、彼らとの対比は、人間としての生の意義を基本線に戻って考えねばならないのではないかということを教えてくれた気がする。

# 都市の生活

吉野弘純・田原史人

## 〔町の概観〕

コタキナバルはマレーシア連邦サバ州の州都である。東方は丘陵、西方は海にはさまれた、人口約3万の小さく、細長い町なので、車に乗れば市街地の端から端まで、20分弱で通過できるくらいだ。市街地には、中央に芝生や草花の植った中央分離帯がある広いアスファルト道路が走り、それに沿って、両側に3・4階建てのビルが立ち並ぶ。ビルの1階は食堂や雑貨屋などの商店が占め、2階以上は一般市民の住宅になっている。

偶然知り合いになった王平遠(24)さんの家もこういう建物の中にあり、4DKくらいの部屋数の所で、20才の奥さんと、2人の子供達、彼等に加えて、王さんの弟、妹とで、快適な生活を送っていた。住居

費は、東京のそれと比べると、相当安いらしい。家の中は、装飾品があまり見られなく、殺風景ではあるが、よく整頓されていて小ぎれいである。

市街地の南のはずれには、水上家屋が群をなして並んでいて、市街地とは対照的な、南方アジア的な雰囲気を感じさせる。しかし、それら家屋の下は、あたかも、メタンガスが発生しているかと思われる。ドブの如くである。

市街地から南へ車をとばすと、広い芝生の中に、一軒一軒かなり広いベースをとって、規則的に並んだ公務員の住宅が見える。

どの家も、建物のまわりに南国の草木を美しく植えている。中にはカンナの花もあった。

我々パーティー、15名の宿とした所は、街の中心よりいくらか南に位置するキンファーホテル（京城酒店）であった。ホテルと名がついているものの、そこは、食堂、兼下宿屋のような所で、極めてリラックスした感じの宿である。宿泊費は、10畳位いの広さの部屋に、3人入って、1日約千円である。

我々は、このような部屋を5・6部屋を占め、現地行動前に3日、後に3日、そこで過した。

そのキンファーの前の道路での車の往来は、時間によってかなり差がある。朝は6時半～8時頃と、夕方は涼しくなる5時過ぎから1時間程の時が一番激しい。

昼間の炎天下では、車の大部分が道の端に駐車している。そして、これら、我々がみる車の2台に1台ぐらいは日本製であり、特にダットサン、コロナ、の種類が多い。

人の往来も同様に、朝まだ暑くならないうちに行動し、真昼には道行く人もまばらである。そして日暮れになると、街のほぼ中心にある芝生の美くしい広場へ、三三五五涼みに来る。そこはちょうど海に面しているので、日暮れから夜にかけて、潮風が快く感じる。

## 〔官庁〕

サバ州はマレーシア連邦の中の一州であるが、この国において、州の自治というのは、マレーシア連邦の権威があまりない事（このことは、シンガポールが1965年に独立している事からも察せられる。）地理的に離れている事などから、他の連邦国よりも強いようである。政府の機構がどうなっているかわからない。しかし、私が情報収集のために訪ねた官庁

of Information Department, Surbay&Land Office のかなり高い地位の人はすべてマレー人（少なくとも中国人ではない）であった。

そしてかなり教養もありそうであった。

つまり、英国語が広く使われ、イギリスのものがかなり形式にとり入れられた機構と、実業界の実権を握る中国人、そして政治的にサバを統制している現地人、ここにこの国の複雑な実状が現われている。（我々の北ボルネオにおける行動終了後、約1ケ月たって、マレーシアにおいて人種問題をめぐる暴動が発生）

また、この国の5万分の1の地図を手に入れようと思って官庁を訪ねたが、あっさりことわられてしまった。理由は、国の防衛上の秘密なのだそうである。

半年ほど前に、かなり新聞をにぎわした、フィリピンとマレーシア連邦とのサバ領有問題も現地にすれば予断を許さない事なのであろう。

サバは木材の輸出税によってかなり裕福であるらしい。空港にいく途中に、左側に見られる官庁の建物はかなりりっぱである。

〔教育〕

我々がコタキナバルに生活していた間に、そこで偶然に見聞した事柄のうちから、教育に関係ある事を述べて見よう。

このサバの首都であるコタキナバルの青年は、ほとんど教育をうけた者であるようだ。

サバにおいては労働力の不足という事から、就業率は百パーセントであるそうだ。こんなことからも都市部ではかなり義務教育が進んでいると言えるようだ。我々が都会生活において接触をもったのはほとんど中国人であるが、特に中国人は教育に熱心と言える。我々のホテルの隣の青年は、夜にはいってもスタンドランプの下で机に向って勉強していたし、ホテルの息子も良く教科書を開いているのを見かけた。我々がいつも食事していた食堂の娘(18)は、店番をしながら数学の勉強をしたり、小説を読んでいた。教科書はすべて英語で書かれており、授業はすべて英語で行なわれているということだった。1967年より国語はマレイ語と法律で定められているそうであるが、英語スクール、中国語スクール、マレイ語スクールの如く、人種及び言語によって各種学校がある。

我々の訪問したガヤカレッジはコタキナバルの郊

外の丘の上にあるかなり広い敷地をもった学校である。カレッジといっても、教員養成の2年コースの高校である。全校で300名たらずの学生数で、全寮制である。校長のトッド氏は英国人であり、先頭にたって我々を案内して下さったが、学校設備は、日本の高校程度である。しかし、勉強をするのには充分恵まれた環境といえるだろう。

〔報道〕

コタキナバルには5つの日刊紙（朝刊のみ発行）がある。

- Kinabalu・Sabah Times　（英語、マレー語）
- Daily Express　（英語）
- 亜庇新報　（中国語）
- 華僑日報　（中国語）

どのくらいの発行部数があるのかはわからない。しかし、新聞の内容はあまり充実しているとは言えない。なにしろ、我々の到着が一面に写真入りで大きく扱われるほどであるから。しかし、社会面にはベトナム戦争のことが出ているし、アメリカのアポロ計画の記事も報道されている。しかし、三面には、とるに足らぬような強姦の記事が、日本の三流週間誌のような手法で、2ページをついやして、こと細かにかに書かれているのがあった。

ラジオは、サバ放送局が、英語、マレー語、カダザン語、中国語と、いろいろ放送しているらしい。事実、キナバル山には、放送のために電波塔もあった。しかし滞在中ラジオを聴いている人を見かけなかった。

テレビはまだない。

〔商売〕

街の中央に位置する、芝生が美しい広場の端には、小さな出店や食堂があり、夕方から夜9時過ぎまで大変にぎやかである。そこの食堂ではうまい焼ソバが食べられ、その近くで、コンロを前に据えて、50がらみの男がサテを売っている。ちょうど焼鳥のようなもので、たれがすごくうまい。

出店では、1つの店で色々な品物を売っている、くだもの、あめ、歯みがき粉、トランプ、たばこなど全くのよろず屋である。

一般の商店も同様で、レコード店へ行けば同じ店内で本や事務用品を売り、おみやげやアイスクリームまでも売っている。知り合いになった中国人の陳さんの店も、電気屋であり、銃砲店をも兼ねている。このように、特定の品物を専門に取り扱っている商店は極めてまれである。

街の商店は、午後4時過ぎになると、およそ半数の店はシャッターを降ろしてしまう。

市場は街の中心部より少し北側の一角に集まって

おり、だいたい売る品物によって、各々まとまっている。野菜、果物を売るのが一番多い。ここでは、街に店をかまえている中国系商人とは打って変って、大部分カダザンなどの現住民が売り手である。特に、中年のやせた婦人が売っているのが目立ったが、中には、12・13の女の子が、梅ぼしくらいの小さなラ。サという実を、5個づつまとめて並べ、客待ち顔にしゃがんでいた。つい、いじらしくなって、その5個を10セントで買ってしまった。甘ずっぱい味のする実だった。

現代建築物のとなりには水上生活者が

野菜は、数種の例外を除いては、だいたい日本のものと同じ種類が並んでいる。例えば、キャベツ、白菜、えんどう豆、ジャガイモ、ナス、などがある。ジャガイモ、タマネギは表皮の部分が紫色がかっている。ナスは、日本で普通あるものの3倍ぐらいの大きさである。

肉、特に豚肉は倉庫のような造りの建物の中で売っていたが、客の出入りは少ない。市場以外で町の中の食堂で鶏の丸焼きなどが買えるらしい。

魚の市場も広い建物の中にあった。

生きた鶏を金網の中に10数羽入れて売っているのは、いかにも市場らしい。

## 〔交通〕

サバ州の地図を見ると、日本の地図と少しちがっているのに気づくと思う。サバには、鉄道が非常に少ない。その鉄道も、日本の都電を思い出してもらえばよいような、チンケなものだ。それに比較して道路は、割合整理されていて、コタキナバル周辺は、アスファルトで舗装されており、りっぱなロータリーもあった。住民の足となっているのは、バスと、大型のジープ（ランドローバー）で、かなりの利用者がある。特に気がついたことは、自家用車が人口に比して多いということだ。サバは鉄道の時代を向えずに、直接自動車の時代を迎えてしまったようだ。

## 〔娯　楽〕

市場に隣合って、映画館があり、台湾で製作したと思われる中国の剣術劇や、洋画、怪獣が登場するもの、などが上映される。日本製の映画も多く、特に評判がいいらしい。

驚いたことに、小林旭が街の子供達の間に人気があるらしい。コタキナバルではテレビが映らないので、それだけ映画ファンが多いのだろう。

レコード店の数も多く、いつも客が入っている。私達が入ったレコード店では、私達を日本人と知ってか、しきりに日本の歌謡曲をかける。「骨まで愛して」とか「東京流れ者」など、3年前頃、東京ではやっていた曲である。

他に娯楽としては、マージャン、ビリヤード、ゴルフなどである。キンファーホテルの近くに、台が4台ある粗末なビリヤード場があったが、私達がその前を通る時はいつも40～50がらみの無気力そうな男達が10人位集まっていた。

一方、街から車で20分ほど南へ走ると、やしの木がその海岸に美しく並んでいる海水浴場がある。はるかに広がる南国の海岸に、泳ぐのは私達だけしかいない。

そのそばにはゴルフ場があり、コタキナバルの金持商人達や外人が集まっている。そこの食堂は会員制であるが、特別のチケットを買うと誰でも入れ、洋風のけっこううまいものが食べられる。

郊外の、芝生やマンゴーの木やヤシの木に囲まれた競馬場では、1月に1回、草競馬が行なわれる。熱帯樹と競馬場とは、私の感覚では連想できなかったので、ちょっと異様に感じられた。

スポーツは、サッカー、ホッケー、フットボール、バスケットボール、バトミントン、などが若者達の間で行なわれている。街の中や　外には、市民の為のサッカーグラウンドが多くあり、芝生が一面に敷きつめられている。日本では考えられないほど、好条件がそろっていて全くうらやましい限りだ。

## 部員の活動

寺光克彦・吉越昌治
萩原英次

### 荷出し

今回の北ボルネオ合宿においては、全く問題はなかった。しかし、これは、例外であろうし、我々のミスも表面には、出て来なかったのであろう。

外務省情報文化局に、体育局の派遣に関する公式文書、部の念書、計画書、隊員名簿、各係の装備のパッキングリスト等を2部ずつ提出し、その1部を在サバ日本領事館に送ってもらえるように依頼した。

しかし、当初船便にての渡航計画が飛行便に変更となり、MSA、キャセイの両航空会社が北ボルネオ

に乗り入れているので、どちらを選択するかで迷ったが、マレーシアへ行くのでMSAに決定したのが好結果を招いた。

まず、東京の事務所より、現地コタキナバルの事務所へ、テレックスで、「先発3名が23日に到着する。重量は1人30kgで通常の重量より10kgオーバーしているが、登山用の装備なのでよろしく頼む。」という内容の文章を送った。又本隊の3月2日到着も同様の内容であった。先発は香港乗り継ぎで、香港MSAの事務所へ荷物を預けた。これは一時預け（ボンド）にする予定であったのだが、香港のMSA係員が税関に話をつけてくれたので引き取りは全く問題なかった。翌日はその事務所から我々が荷物を引き出したので、確認も出来、コタキナバル便に確実に乗せる事が出来た。コタキナバルの空港では、MSAのトニー、タン氏が税関に話をつけてくれ、検閲なしでスムーズに通過、本隊は、香港で一時預けとしたが、香港検閲もなく、又コタキナバルでは、先発同様フリーパスであった。他の乗客は、スーツケースなど調べられているのに我々は、横目でながめてスイスイと通過というのは、ちょっと特権階級になったようで気持がよかった。往路は前述の通り問題なく、復路も、シンガポールでも無検閲で、一時預けの場所がないため、MSAのマイクロバスでホテル迄我々と一緒に送ってくれ、香港では、一時預けで問題はなく、羽田でも、無作為抽出で2個のザックが検閲されたが、共に1年のザックで問題はなく、酒、煙草も制限内に押えていたので、航空便による税関問題は、往復共に問題はなかった。今回、規定の15名の総重量が300kgから450kgのわく迄を認めてもらったのと、そのわく内で重量がおさまったので問題はなかった。わく内におさまらない場合は別便の航空便で送ると規定重量超過料金1kg約1000円より安いという事である。又、今回別に空港で問題がなかったのは、香港、シンガポールは自由港であり、サバは、ほとんどの製品を輸入に頼っている関係と、登山団体が、それ程多く入って来ないという事で我々に対して寛大だったのであろう。

一方、平岡先輩を通じてジャパン近海の広修丸にて船便で90kg弱を送った。これは、航空便内でおさまらなかった場合、かなりの金額がかかるという事で、平岡先輩にお願いして乗せてもらった。8個の頑丈な箱に、装備と米をつめ、横浜の運輸会社に行き、荷送り状を作成してもらい、横浜税関に出してもらった。横浜税関では、本当にボルネオへ行くという意味でパスポートが必要であるが我々は、パスポート作成の段階だったので、現地ガヤカレッジからの招待状のコピーを持参した。一応それで問題なく、広修丸に積み込まれて、ボルネオに2月15日前後に着いたようだ。

先発隊が2月24日、まず荷受けのクロスファイドハリソン会社に行き、コタキナバルに着いていると

いう内容の書類をもらい、税関に行く。12時5分すぎであって、ランチタイムだから、2時から来いという。ボルネオ時間は、こういう点が、きっちりとしており、食堂などでは、注文してから食べ終る迄約1時間30分もかかるのだからたまらない。その日は、情報局や、キナバル事務所などで時間がつぶれ、翌日、午前中に行く。まず税関内に入る所で、名前とパスポートナンバー、ホテル名を聞かれ、半券をくれる。倉庫の2階の事務所で荷受け状を出すが、倉庫内ではなく、別棟の税関へ連れて行かれる。中国人の役人は中味はなんだと聞く。我々は英文のパッキングリストを持参していなかったので、日本語の個装、団装、船便のリストを出して、日本語を、英語や漢字で書いて説明する。すると個装の中の「武器」という字をみつけ、手まねで吹矢とか、のまねをする我々は、ここで、ブロークン英語と、チャイニーズキャラクター(漢字)で、我々登山するものが、飯を食べる道具、「スプーン」を武器だと説明するが、なかなか納得しない。しかし、船便の中味と別な事とスプーン一切れで押し通したので、書類をつくってくれたが、またまたランチタイムとなり、2時迄またなければならなくなった。登山用品の課税はなく、荷物保管料若干とられたのみで問題はなかった。午後から取り出しに行くが、広い倉庫の何処にあるかわからない。やっと8個みつけて、税関を出た所で、明日からの調査のため、テント1式を路上で取り出す。すると子供達が我々のまわりをどっと取り囲むし、太陽が容赦なく照りつけてくるし、こんな時、先発の装備一式をパックにしていてくれたらとくやむことしきり。それと荷物は目立つようにしておくと倉庫内ですぐみつけられるだろう。

そのうちにタクシーをひろってきて領事館に残りの装備を預ってもらう。

海、空とも税関では問題なかったが、これは国によってちがうので、在外領事館へのパッキングリストは勿論、在日大使館を通じて本国へ、そして我々から直接、税関へ、公文書並びにパッキングリストを出しておくと更によいであろうと思われる。

## 空の旅

我々一行は羽田での盛大な歓送を背にしながら、KLMのボーイング707に乗り込んだ。機内では美しいスチュワーデスがマレーシアの民族衣裳を身につけて忙がしく働いていた。エンジンの音をゴーゴーいわせながら重い機体を軽々と持ち上げて離陸した。離陸と同時にゴイゴイ高度をかせぎ一気に雲海の上に出た。動いていないかのような錯覚を覚える程に見渡す限りの空間を一路南へと向かった。期待と野望とを胸に秘め隊員一同の目はエメラルドのように

輝やいていた。台北で悪天の為、なかなか飛び立たなかった時は、もしかしたら今日はここで泊まるのではないかと気をもんだりしたが、無事香港へ着いた。香港で一夜を無事過ごし、いよいよ目的地コタキナバルへ。香港島と九竜地区を空から見て改めて香港の過密化に驚かされた。過密都市香港をあとに機は再び南へと向かった。紺碧の空はどこまでも続き、白い雲は太陽の光を受けて輝いていた。窓を通して南国の熱気が伝わってくる。左の窓の外にキナバルがその容姿を見せて我々を歓迎してくれた。

ランチ、リフレッシュメント、ディナー、飛行機内の食事はとてもうまかった。ワイン、コーヒー、紅茶、そしてタバコとさすがにサービスが良かった。それにきれいなスチュワーデス。全く空の旅はすばらしかった。

## コタキナバル

ヤシの木はえる静かな空港コタキナバルはやはり暑かった。飛行機を降りると熱気がむっときた。先発隊の黒い顔と新聞社のカメラのフラッシュが我々を迎えてくれた。我々がそれ程有名なのか、それ程この町が小さいのかと妙な気持だった。

コタキナバル市内

コタキナバルはサバ州の州都ではあるが、人口5万に満たない小さな都市で、静かで平和な、のんびりとした所である。見慣れたザックをタクシーに分散して積み込み、ホテルキンファーに向かった。道路は完全舗装で左側通行である。空港から中心街への道路は舗装されており、グリーンベルトが続き、ロータリーが設けてある。快適な気分でホテルキンファーに着いた。ホテルとは名ばかりの、日本で言えば木賃宿とでも言うような三流ホテルだった。我々にふさわしいようなこのホテルで、クロッカー山脈縦走及びキナバル山登頂の最終計画が立案された。日本領事館に預けてある装備及び食料の大部分第一ラウンドで使うものと第二ラウンドで使うものとに分け、あるいは使用しないものとに分け、パッキングをして、米、野菜、果物あるいは石油、新聞紙等を買い付け、3月5日の出発に備えた。暑い監獄のような部屋でなかなか寝つかれずにいた。5日朝、ランドローバー2台に分散して、炎天下をアラプ山へと出発した。

15日ぶりに戻ったコタキナバルは何もなかったように我々を迎えた。真黒に日焼けした我々は再びホテルキンファーへ戻ってきた。シャワーを飽きる程浴びて、ばっちり着換えてその夜はコタキナバル一の高級レストラン「ガーディニア」で待望のブラックペパーステーキを食べ、ヘネシーを飲んで、合宿の成功を祝った。全然酔ってなかったが我々はメインストリートのグリーンベルトの中を行進し、「都の西北」を大声はり上げて歌った。夜とは言ってもまだ9時頃で人通りもかなりあって窓から顔を出して何の騒ぎだろうと見る人もあった。みんなびっくりしたような顔で我々を見ていた。

翌日は、そばの海辺で2時間位遊んだ。皆の顔の皮膚がボロボロむけ出して、すごい気持ち悪い顔になった。

楽しかった思い出を残し、3月21日我々はシンガポールへ飛びたった。

## ガヤカレッヂ訪問

3月4日ガヤカレッヂ訪問。ここはサバ州で最も博学才媛の士が集まる文化の園である。広々としたグラウンドを持ち、最新式の設備を整えた校舎。室には小鳥がさえずり、庭には原色の花が咲き競っている。

我々一行は途中迄バスで行き、そこからチャランボランと歩いて行った。ギラギラと輝やく太陽をさえぎるものは何もなく炎天下を皮靴を履きネクタイをしめて、麦わら帽子をかぶって、汗を拭き拭き歩いていった。途中1本立て又歩きはじめる。なかなか着かないでいらいらし始めた頃ま寮が見えてきた。マンションみたいなその寮を横目で見ながらなおも又歩き続けた。我々はどのような歓待を受ける

のかと想像をめぐらしながら、カーブを曲がった。カーブを曲がると、目の前に静然としたたたずまいのガヤカレッジ全景が目に入ってきた。特徴のある大きな彫刻が先ず目に飛びこんできた。それは学校のシンボルであった。授業をしているらしくシーンとしていて、出迎えの人がいるでもなく、日の丸の国旗が立っているでもなく、全くお呼びでないといった感じだった。それでもそんなはずはないと信じていたら、中から白髪の英国紳士。校長のトッド氏が笑顔を浮かべながら現われた。我々はそれぞれ挨拶をかわし、サインをしてから、ティールームへ接待され、しばし歓談をした。我々のペナントと早稲田大学のしおりをあげ、ガヤカレッジのりっぱな案内書をもらった。暑い部屋で熱いコーヒーを飲んで、カレーの味がするパンを食べながら、慣れない英語で、無理に花を咲かせようとした。しばらくたっていろいろな設備を見て回った。校長の説明も半分位しか理解できなかったが、一通りの事はつかめた。理想的な環境にあるガヤカレッジは我々に強い印象を与えた。正午頃記念写真を写してガヤカレッジを後にした。

一方、サバ州の教育の現状について見るとそこには新興国としての悩みを数多く抱えている。連邦国家であり、複数民族国家であるマレイシアにとって教育上の問題は我々が想像するよりはるかにむずかしいものである。

教育制度は初等教育、中等教育、高等教育、成人教育、教員養成とに分類される。初等教育は小学校教育で公立小学校、ミッションスクール、地方立小学校、現地人任意期限学校、及びエステート内学校等があり、英語、マレイ語、中国語の3つの言語コースにおいて教育が行なわれている。中等教育は中学校教育であって3年制・6年制等をとっている。高等教育は2校の師範学校と一般高等教育を行うサバ・カレッジが設けられているが、大学などの高等教育の施設は未だ存在していない。したがって高等教育を受けたい者は、私費又は奨学金によってマレイ半島あるいはオーストラリア、ニュージーランド、英国、香港、カナダ等に留学することになる。成人教育とは成人の文盲者の撲滅を主目的としてその他簿記、速記、タイプライター、エンジン、電気方面の講習会が開かれる一方、英語、マレイ語、数学、料理、服飾、裁縫等の講習会が各地で私塾的に開かれている。教員養生の問題は深刻である。現在サバ州の教員見習や実習生によって満たされている。年々増加する生徒数に対し、教員数はそれについていけず、教員の質的向上に努めている。我々が訪れたガヤカレッジは小学校、中学校教員の育成及び、英語専門教員の養成を目的に開校され地味ではあるが確実に教員を送り出している。

# 原住民との会話

ボルネオ原住民は、西海岸の平地カダザン族、ドスン族、クロッカー山脈付近の内陸にいる山カダザン族東海岸のサンダカン方面に多いバジャウ族、カリマンタン国境のムルト族等、約20の原住民がいるが、我々が接したのは主に山カダザン族と、わずかのドスン族であった。彼等は非常に穏健で親切である。単語しか知らないマレー語で〃セラマットハリ（こんにちは！）〃と手を上げると、ニコニコ笑って応ずる。クロッカーをおりて、南国の太陽をジリジリ受けながら、里道を歩いていると、最初は不思議そうな顔をするが、ジャランイニ（この道）カンポンブンドトゥーハン（ブンドトゥハン村）〃と単語だけを並べて、（〃この道はブンドトゥハンへ行く道か？〃と言いたいのだが・・・）話しかけると解ってくれたか〃ヤアヤア（はいはい）〃と答えてくれ、親切にも、我々について来てくれ〃この道をまっすぐ行けばよい〃というような動作をしてくれる。言葉は通じなくとも心は充分に通い合っている。素晴らしいことである。どこかへ用事に行く途中我々とすれちがっても、わざわざ引き返し、ついてきて教えてくれる。

クロッカー山脈をおりてブンドトゥーハンへ酷暑の中を歩き、キボーリンという村の手前の牧場の様な所へ、天幕を張った時のことである。その手前の村から、ずっと我々の後をついて来た夫妻と子供2人の親子づれがいた。彼等は我々が、今夜ここに泊まる準備をしラジウスで飯の用意をしていると、母がやはり、飯を作るのに興味があるのか、ラジウスを見てびっくりしているようだ。そればかりでなく、テントや我々のク

シュリムを囲んで話もはずむ？

ツ等全てがめずらしいのだ。オヤジさんにタバコをやると嬉しそうな顔をして、喫う。子供達には、日本から持っていったボールペンをあげると、めずらしそうに〃テレマカシー（ありがとう）〃と言う。そこで我々は、すかさず、〃サマサマ（いいえ、どういたしまして）〃とやりかえす。30分ぐらいして親子は立ち去った。しかし、少しすると村の方からぞろぞろ村人がくる。どうやら親子が、村人に、変な人間が変な事をしているとでも言ったのであろう。夕方になったので、肌寒く、我々はセーターを着ているのに、相も変わらず、短パンとシャツ一枚である。初めのうちは、遠くから見ているが、なごやかに話しかける？とだんだんそばに寄ってくる。夕暮れの中にくっきりと浮んでいるクロッカー山脈を指さして、〃我々はコタキナバルからずっとクロッカー山脈を歩いて、ここまで来て、これからコタキナバル山に登るのだ。〃というような意味の事を言うと〃ホー〃と驚いたような顔をする。山の名前とか川の名前は、ほとんど知らない（我々の言っているのが理解されないのか）がコタキナバル（州都）とキナバル山は、誰に聞いても知っている。日本から持ってきた単語帳を開いて会話する。会話するより、マレー語を文字にした方が理解されるのは早い。大人にはタバコをあげ、子供にはボールペンをあげると、より一層の親近感をもって接してくる。最初は5・6人しかいなかったのが、あとからあとから続々と集まって来て、20人程になった。マレーシアと日本の交歓会である。日本の歌を聞かせてやろうと、みんなで〃ボロは着てても、心は錦〃と歌うと、楽しそうに笑いながら聞いている。歌い終って、原住民に、歌を歌ってくれと言うと、はずかしそうにしてなかなか歌ってくれない。結局彼等の歌は聞くことはできなかったが……。彼等の中に1人シュリムという名の若者がいた。彼が突然〃アリガトウ〃と言い出したのだ。ビックリ仰天すると、誇らしげに笑う。戦時中でも日本軍から教わったのか。それで、〃ワタシ〃とか〃アナタ〃というような言葉を教えていると〃オナアル〃と言う、理解できなかったが、よくよく考えてみると、妻がいるというのだ、それで2人の子供もいるという。びっくりするやら、うれしいやらで、彼とは1時間程話す。なかなかの好青年であった。暗くなると彼等は帰った。そろそろ晩飯なのか。セラマットティドゥール（サヨウナラ）〃と言って、なごりおしそうに帰る。翌朝、彼等の村を、通りすぎる時、村中の人が、家から顔を出して見送ってくれる。次の村へと

歩を早めると、昨日のシュリムが息を〝ゼーゼー〟言わせながら走って来た。次の村へ行く近道があるからついて来いと言っているらしい。昨日はよほどうれしかったのだろう。今日は真白な開襟シャツを着ている。後へ従って歩く。充分案内してくれ、我々が仕事があるのだろうからもう戻ってくれというような動作をしても帰らない。峠付近までついてきてくれ、これで安心だと思ったのか、お礼にタバコ1箱あげる、握手をし別れた。何度も何度も手をふる。いい奴だった。なごりはつきない。今頃、山奥の村で、彼等は我々の事を思い出していてくれているだろうか。ドブロクを飲ませてくれた人達も、我々の事を話しているだろうか。素朴な、真に純粋な人々だった。

## ヘッド・クォーターにて

前半戦が終了したのち、我々はヘッドクォーターに2日間停滞した。ヘッドクォーターは、キナバル山のふもとに位置し、キナバル登山のベース的存在である。

さてその2日間我々のすることは、いわゆる疲労を回復し、後半戦への鋭気を養うことであった。我々は、1日目は、バンガローに泊り、洗濯をする者、バトミントンをする者、日なたぼっこをする者、など各々好き勝手なことをしていた。キナバル山は、朝のうちはその雄姿を我々の前に現わすが、昼になると、雲の中に隠れてしまう。停滞日は何もすることがないので、やたらに腹がへる。1日目の夜、やたらに腹がへるので、明日ラナウまで果物を買いに行くことにする。買付け隊員はアミダで選ばれた。2日目は、ラナウから果物を買ってきたので、それほど腹はへらなくなった。2日目の午前中も、昨日と同様各自思い思いの時間を過ごす。隣のバンガローの子供が前の広場で遊んでいる。5才にもならないのに、生意気に英語を話す。どこの国でも小さな子供はとてもかわいい。

午後からは、後半戦の準備にとりかかる。装備、食糧、医療とあわただしく動き回る。一応の準備を終えた後、バンガローを出て、テントに移る。幕場は、見晴らしのいい台地で、ブンドトゥーハンもよく見える。夜になると空が澄んでいるので星がよく見える。連日、南十字星はどれか?について皆で論じ合う。某OBは「ヤシの葉かげに十字星」と歌われているから南の水平線近くに見える、などと、必死に理論づけよ

うとする。夜になると特に星がきれいだ。

翌朝はガイドの到着を待って出発することにする。このガイドとぼけていて、約束の時間になってもやって来ない。1時間近く遅れてからやって来た。いよいよキナバル山頂めざして、出発する。このガイド、チベさんは、最初ものすごく早かった。それもそのはず、たいした登りでもない里道を、何も入っていないサブで歩くのだから。しかし我々は最初このガイドはなかなかタフそうだなどと思っていた。しかしこのガイドの化けの皮はすぐにはがれた。パワーステーションの急な登りにさしかかるとペースが落ち、隊列の後方を歩くようになる。1回目の昼めしが終ったころからは、隊から遅れだす。午後になると、完全に遅れてしまって我々が一本立てて待っていると20分近く遅れてやってくる。バカケイブを見るため後からきた吉野さんの話しによると、このおっさん途中で昼寝をしていたそうだ。あきれたもんだ。これで金になるのだからガイドはいい商売だ。キナバル下山の時、他のパーティーに会い、別のガイドを見かけたが、みんな、キリッとしている。どうも我々に付いたこのガイドは、一番ダメチンなガイドのような気がする。

## ラナウでの買付け

クロッカー入山以来、食料事情が悪く、全員生気の抜けた状態で公園事務所にたどりついた。特に、どこの村でもバンバン買えるはずの果物が、季節はずれとかいう事で全く手に入らず、ビタミンC不足が深刻な(?)状態になった。というよりはむしろ、みんな腹一杯新鮮なバナナ、パイナップル等が食べたかった。翌日買付けにブンドトゥーハンに下ったが果物は手に入らず、全員ガックリしていた。夜、冗談まじりに誰かが、ラナウ迄行けば確実に手に入るだろうと言う。〃ラナウ迄行けば……。〃とみんな合槌をうつ。ある程度の町で、商店もあることだから、買えることは買えるが、ラナウ迄はここから20キロはタップリある。生気の抜けた我々には、あまりにも遠い。テンブローリー、ラナウ間は1日一往復の定期ランドローバーはあるが、確実に買えるのは朝市だと思うから、とても間合わない。かといっても、通る車をあてにはできない。ラナウからは、車は容易につかまるだろうが……。しかし、食べたい！。その場のムードはあきらめムードから、〃ラナウに決死隊を編成しよう。〃〃というふうにガラリ急変した。しかし、誰が行く、〃〃ネコの首に鈴をつ

ける〃ようなものだ。みんなうつむきかげんになる。残る手は、唯一つ、クジ引きで決定をつける古法。4年生以上の御老体は、とてもとても歩けるような状態ではない。現役全員、運命のクジを恐る恐る引く。みんなキャッキャッ喜んでいる中で、1年土屋、渡辺両君の顔がみるみる険しさを増す。決定だ。しかし次第に彼等は意を決したのか〃よし俺達がやってやる〃というような顔つきにかわってきた。そこで、リーダー、1年2人じゃかわいそうだとでも思ったのか〃仕方ねえ、俺も行くよ。〃と言いだす。かくして決死隊は吉越、土屋、渡辺の精鋭、教育学部トリオで構成された。明朝5時出発、ワンゲルピッチ3時間でラナウに着く予定である。3人は早々にシュラフにもぐる。他の者は、一応〃ガンバレヨ！〃と激励する。

朝5時、夜明けはまだまだだ、星がきれいだ。悲愴なる決意でレストハウスをとび出す。寒い。エレキで照らしながら歩く。3人共黙して語らず。唯うつむいて歩く。ジャリ道は歩きにくい。〃ラナウ、ラナウ〃と言いながら歩いているみたいだ。ものの30分程歩いただろうか？。突然、車の音が背後で聞こえる。〃車だ！〃3人一斉に声を上げる。しかし、車の音はなかなか近づいて来ない。かえって遠のくように聞こえる。〃チクショウ、ブンドトゥーハンの方に行くのか〃一時はあきらめた。しばらくすると、また車の音がする。こんどは近づいてくるように聞こえる。ピタッと3人の足は止まった。暗闇の中にパッと車のヘッドライトが女神のように浮き上る。〃来た来た〃道路の真中で両手を大きく広げる。2台のトラックは止った。コタキナバルからラナウへの長距離輸送だろう。〃ラナウまで乗せて行って下さい。〃なんて言う複雑なマレー語は知らない。どうでもいいから、乗りたい仕草をしたり、英語で語りかける。解ってくれた。OKのようだ。私は前車、他の2名は後車に、助手席に乗る。〃アーよかった、助かった。神様、仏様、トラック様だ。〃運転手は何か私に話しかけてくる。〃そんなにペラペラ、マレー語をまくしたてられてもわかるわけないじゃないか〃と内心思った。しかし誠意をこめて、理解できないような顔をする。しかし、よく彼の話を聞くと、なんと英語で話しているのではないか。だが、ここに書くのもなんだが、全隊員の中で英語がだめな者の確実に5本の指に入る私である。運転手さんには悪いが、とてもうまく対応できない。しかし精一杯の頭をしぼって話す。彼も解ってくれたのか、むずかしい質問はしない。6時頃になると、見事な朝焼けが展開する。〃早

起きは三文の得〃である。キナバルの東山稜のノコギリの歯も朝日に照り輝いている。緑の盆地ラナウは朝霧の下だ。霧が低くたちこめているので一層緑が生えている。赤い屋根も美しい。ラナウは日本でいったら村に毛がはえた程度であるが、何か、都会的ムードが感じられる町である。ボルネオということがそう感じさせるのかもしれない。市場の前でおろしてくれた。何度も何度も、御礼を言い、ヨーカンを与げた。トラックはオーバーヒートなのかしばらく動かない。荷台をよくみると、日本からの資材である。この町の奥で銅の採掘を行っている現場に運ぶのではないかと思われる。市場のそばで朝飯を食い、市場が開くのを待つ。10軒程の店が両脇に並んでいる。7時頃から店を開くらしい。食堂、雑貨屋が主で、市場の真中では、ものを売っている。学校へ行く子供達が通る。日本と変わらぬ朝の風景である。店の人は全て中国人である。必要なものを買いつけるが、果物だけが見当たらない。店の人に聞くと9時頃から近郊の村々から集まってくるとのことである。1日1本の定期ランドローバーは8時にテンブローリーに向って出発する。できるならばそれに乗って帰りたいが、果物なしでは彼らに顔向けができない。仕方ないので、店先のベンチで腰を下して待つ。ランドローバーの出発分前に、ヒョコヒョコと、カゴに一杯のバナナを入れて老人が歩いて来た。食堂のオバサンがその老人を呼んでくれ、我々はかろうじて、ランドローバーに間に合った。定員は12名で、車の後にトレーラーをつけて荷物をのっけるようになっている。出発して5分ぐらいすると、カメラがないのに気づく。いぐら捜しても見当らない。忘れてきたのだ、運転手に言うと、〃それは大変だ〃という様な顔をして、気持よく戻ってくれた。カメラは店に置き忘れてあり、チャンとその場所にあった。

途中、ランドローバーは、ラナウの近くにある、タンダサンという部落で止まり、一休みをする。そこにも商店が3軒程あり、バイナップル、バナナ、レモン等が売っている。バイナップルとレモンを仕入れた。これだけ果物を買えば、役目はすんだ。

## テンプローリーにて

公園事務所をランドローバー2台で出発して砂利道をドッテン、揺られながら、すっとばした我々は、すさまじい砂ぼこりで皆白髪のおじいさんのようになっ

てしまった。コタキナバルへの中継地であるテンブローリーは又クダット方面への道が分岐する一宿場町のようなものであった。我々がここに着いた時はちょど昼時であった。我々はここで、手分けして各種の果物を買い集め、風変りなものを試食してみた。ここではさまざまな果物が売られていて、各種マレー人や中国人が忙がしく働いていた。又、野菜、魚、かんづめ、アイスキャンディー、清涼飲料等から日用品に至るまで、およそ生活に必要な物なら何でもありそうな大バサールを形成している。輪になって昼食を草の上で食べていると周囲に現地人の子供が1人、2人とやってきて数分後には黒山の人だかりとなった。皆、異様なものでも見るようにしげしげと我々を見ていた。我々はずうずうしく座りこんで、パンやバナナやオレンジや名前も解らぬ果物を食べながら、周りの子供達を魚にして話に花を咲かせていたが、何とも変な気分で、旅回りの一座のようだった。いつまでたっても暇そうに立ち去る様子もなかったので、我々は「都の西北」を声高らかに歌って、子供達がびっくりしてきょとんとしている間に、再びランドローバーに乗り込み、なつかしのコタキナバルへと向かった。

## サバ州元首との会見

サバの州の元首は州首席と呼ばれ、マレイシア国王が任命する。その任期は4年である。州の行政権は憲法的には州首席にあるが、実際上は主席大臣がこれを行使する。内閣は主席大臣および4名ないし8名以下の閣僚をもって構成される。主席大臣は事実上行政の責任者である。州首席は州立法議会において、多数の信任を得ていると判断した者を主席大臣に任命する。我々は、その州の元首、州首席の方にお会いすることができた。

里見隊長、深谷副隊長、そして現役代表として、吉越、深井の計4名で出向いた。日本領事館の高級車で藤牧副領事と共に、緑の丘の上にある元首の官邸〝ホワイトハウス〟に向った。緑の木の生い茂った坂道をゆっくりと車は登る。鉄砲を持った衛兵が奇妙な敬礼をする。車が玄関につくと、すごく体格のよい、元首の護衛のような兵隊が出迎えた。車を下り官邸に入る。まず全員記帳をする。官邸、直属のカメラマンらしき人がフラッシュをたく。なんだか偉くなったような気分である。まず秘書官が出て来られて、応接室で少し待

った。秘書官と隊長が何か、話をしておられるが、我々は、コチコチに固くなっている。しばらくして、元首の室に通される。元首はにこやかに一人一人と握手をされた。メガネをかけた純粋のマレー人で、品のある大柄な方である。まず体育局からいただいた、体育局のペナントと校歌入りのオルゴールつきシガレットケースを差し上げる。カメラマンはすかさず撮る。元首は大そう喜こんでいらっしゃる。全員ソファーに腰を落ちつけ、歓談に入る。我々の行動した地域、キナバル山について、そして、訪問したガヤカレッヂの事、あるいは早稲田大学の事などが主なる話題である。秘書官が非常にユーモラスな方で、その場のムードをなごやかにされる。深井も気軽に話し合っている。クロッカー山脈に関して、詳しい事はあまり知らないようだが、キナバル山の話になると、やはり誇りに思っているのか、話しがはずむ。約20分程の時間であったが、実に貴重であった。帰りの車の中は行く時と違って、緊張もとれ、皆ホットしたのか、話がはずむ。藤牧さんも案心されたのだろう。ボルネオの最後の活動が、ピリッとして、活動全体をキチンとしめくくった感じがする。翌日の新聞には、写真入りで大きく、取り上げていた。

# 香　港

税関でのトラブルもなくなんとなく外へ出た。外はガヤガヤと騒々しく活気に満ちていた。ザックはボンドにして預け身軽な格好でミラマーホテルのリムジンカーに乗った。日本の電機会社や製薬会社の大きな看板がやたらと目についた。自動車がせわしげに警笛をギャーギャー鳴らしながら走り回っている。歩行者優先どころか、まごまごしていたらひき殺されそうな勢いである。ごちゃごちゃゴチャゴチャした所を通って、ミラマーホテルに着いた。ここは香港でも指折りの一流ホテルで、広々としたロビー、高い天井、大きなシャンデリア、フロントには気取った服を着たボーイが並んですましている。我々はノーチップ制を通してむだ使いをやめた。料金はカンバニーアカウントで夕食と朝食がついた。しかしこのようなホテルはなにかとやりにくく、部屋にいても落ち着かなく、食事をしていても自分が食べているような気がしなかった。不夜城香港は夜ともなると増々ネオンが輝きを増し、観光客相手の夜の女が活動を開始する。そしてバー、キャバレー、レストラン、ナイトクラブ等が活気づく大歓

楽街と化す。又、時計、宝石、カメラ、紳士用品等の店が何時までも商売をやっている。我々は、そんな時ホテルの部屋で、静かなる闘志を燃やしながら眠りについていた。

23日ぶりに再び香港の人となる。今度はカンパニーアカウントではないので安いホテルに泊まる。ミラマーとは大分違う変な雰囲気のホテルだった。自由時間に買い物をしたり町を見たりして時間をつぶした。24日朝シンガポールと同様に観光バスに乗って九竜地区を見て回る。映画に出てくるような難民アパートが林立し、洗濯物が一面に干してあり、飽和状態になった子供達が所狭しと遊んでいる。又麻薬患者の更正施設であるダムサイトを見物した。そこにはまだ若い人達が気の抜けたように働いていた。古い城壁に囲まれたマカロニウエスタンに出てくるようなレンガ作りの家があった。そこには一族郎党すべてのものが住んでいて、他の者とは生活を共にしない。そして生活費は海外に出ている者から仕送りをしてもらっている。最後に我々が訪れた所はやはり我々が最も見たがっていた所であった。中共国境は川を隔てて、有刺鉄線の向こうにあった。うすぼんやりとはるか中共の山々が見える。何か冷たい厳しいものを感じさせる有刺鉄線がどこまでも続いていた。

## シンガポール

国際都市シンガポール空港はMSAの本拠地であるだけあって、黄色の尾翼のMSA機が幅をきかせていた。空港にはヤシの木が列を成して植えられていて、南国ムードを盛り立てている。我々が空港に降り立った時、南国特有のスコールの洗礼を受けた。合宿に来て始めてのスコールに暑気をふき飛ばしてくれるようなさわやかで心良いものであった。シンガポールは観光都市のようにホテルがいくつも並びショッピング街があちらこちらにあり、通りにはそれぞれ○○ロード○○ストリートと名前がつけられ一方通行の行きとどいた、りっぱな商業都市である。日本製の自動車が数多く走り、一昔前の車が幅をきかせて走っている。又ここにも華僑の進出は目ざましく、がっちりと経済を支配している。我々のマイクロバスは中心街を少しそれた静かな木々に囲まれたヨークホテルへと我々を運んだ。ヨークホテルは小ざっぱりとしたきれいなホテルだった。部屋は広々として気分が落ち着いた。夕方ここでヨーロッパスタイルの食事をとり、食後は思い思いに散歩に出かけた。夜のシンガポールはホンコン

と少し遠って、静かなものだった。商店はシャッターをおろし、人通りも少ない。しかし中国人のやっている屋台のメシ屋は盛況で、ここにも華僑の根強い支配力が感じられた。あくる22日、我々は観光バスで市内見物をした。ハブが笛の音を聞いて首を持ち上げたり、大金持になった華僑がこけおどしにセメントで作ったタイガーバーム公園等を見てまわった。又ヒスイが沢山陳列してある家を見たり、猿が群れ遊んでいる植物園を見物したりして半日を過ごし、午後から思い思いにショッピングを楽しんで、ホテルに帰った。翌朝、早く朝食もとらずにホテルを出て、空港に向かった。朝もやの煙る中を飛行機は飛び立ち、コタキナバルを経由して、香港へと飛んで行った。

## 貧しい町。貧しい人々

竹崎三立

香港の第一印象は「うす汚れた町」という感じだった。背ばかり高いビルには洗濯物がはためき、そのすぐ裏手には掘建小屋の群。夜の香港は美しいと云う評判だったが、そのネオンのケバケバしい事。表は美しく飾っているが、裏の貧しさが透けて見えそうだ。まさに娼婦といった感じだ。

翌日、香港の難民アパートのある地域へ行って見た。そこには貧しい人々の生活がにじみ出ていた。我々が泊った Miramar Hotel ではコーヒー1杯120円するのに、この近所の店（店とは云っても屋台）ではそば一杯たったの6円、又映画が24円。百円持っていればめしを食って、映画を見て1日遊べる。小さな子供達が盛んに商売をやっている。

一方、香港の高級住宅街は全く清潔で、花が美しく咲き、道も広々としていた。Miramar Hotel では、美しく着飾った上流社会の婦人達がパーティを開いていた。東京もちぐはぐな町だが、香港はそれ以上だ。だからかえって貧しさが浮き彫りになって感じ

られる。

クロッカー山脈を縦走しおえて沢を下りはじめて人に会ったのは山へ入ってちょうど一週間目だった。はだしで、腰に蛮刀をさし、よれよれの着物を着ていた。部落に入ると、みんなものめずらしげに立って見ている。家は竹を割って作った全くの掘立小屋だ。その掘建小屋が山の斜面にへばりつくようにして建っている。川沿いの、狭い田に、背ばかり高く、実りの少ない稲

難民アパート

がはえている。泥の中にねころんでいる水牛、猪に似ている真黒なブタ、うるさく吠えたてる犬、そしてニワトリ、せいぜいそれ位のものしか見当らない。全く文明の社会からは隔絶した社会だ。村人はのんびりとしている。村もあまり不潔でなく、自然の中にうまく調和している。

ところがだんだんと文明に近い部落に近づいてくると、だんだん不潔で、騒々しく、貧しさが目だってくる。文明との交流のないような部落では、貧しさとして目に写らなかった同じ物が、文明の恩恵に浴している部落では貧しさとして写ってくる。

香港での貧しさ、ボルネオの山の中での貧しさ、共に我々から見れば悲惨な生活のような気がするが、同じ次元では比較し得ないものを感じた。貧しいながらも、自然の中に溶け込んで、まわりのものと調和ある生活。一方は表面的には美しく飾っていても、まわりとの調和がちぐはぐな、どうしても貧しさがにじみ出て来てしまうような文明社会の貧困。いったい貧しさとは何んなのだろうか。考えさせられてしまった。ただ単なる物質的な貧しさのみではなさそうだ。文明そのものが、貧しさを生み出しているのではなかろうか。

# O・B寄稿

# 海外遠征について

小川剛完

部が海外遠征という言葉を口にしたのは、あるいは部が創立された頃かもしれない。

我々の代（34年入学）の頃にしても、海外遠征という言葉はまだもの珍らしさが加わっていた。しかしその頃を境に日本全体の海外遠征はブームの観があり、（外貨の関係にもより）いろいろのグループが海を渡った。その中には、いろいろ海外にて批判されるような行動もあり、立派な業績を残したグループもあったと聞いている。我部においても、その頃、山でのキャンプサイトの集り、部室、コンパなどで、海外遠征がささやかれるようになった。しかし、経験はなく、他のグループの行動、方法、目的などいろいろ、きいたり、本をよんだものである。その頃私も部報に海外遠征のことをかいたこともある。しかし、部全体のムードとしては、海外遠征もあまり熱心には討議されなかったと思う。

私も35年に東京をはなれ、ここ下関に住んでいるため、部が海外に行動することの方法論、その他つっこんだ内容は全くわからない。しかし、当ってないかもしれないが、一応の推測で少しかいてみたいと思う。

結論的には、海外遠征をあまり大問題としないことが必要と思う。我部においては、もっともっと何回も出掛けることが必要だと思う、それによって、部全体に免疫が出来る。そこから、生まれる問題が真剣に討論され整理されて、やがて実っていくことと思う。長い歴史の中で、大変な失敗をやることも、次のステップには必要である。海外でほめられることばかりする必要はない。もっとのびのびと、行動すること、唯、部の未来に、どのような型でプラスできるかということを常に考えて行動なり考えを進めてほしい。思想もない行動ほど馬鹿げたものはない。そこから生まれた行動が他人に批判されても気にすることはない。批判されない思想は、世の中にはない。唯その思想が、自分のわがままに都合の良いものならば、なにおかいわんやである。その連中は、海外遠征のことを考えることもなければ、人生を生きていくこともあるまい。

今部は海外に目を向けたばかりである。私は海外がオールマイティとはいわない。しかし、何のために人生を生きるのかという人間としての大きな「問」に海外は、なにかを与えてくれるのではあるまいかという

気持がはなれない。いろいろの人を知り国を知ることがその人のその後の人生を豊かにすることがあるのではないだろうか。

我々は日本という国に住みながら、日本を、本当に知っているのだろうか。日本の良い所、悪い所を客観的にみることが必要であろう。そこから、日本の未来に対して、自分はどうあるべきかという「問」に、自からの生活の中で答えていくことが必要なのではあるまいか。海の外には、いろいろの国あり、人生あり、日本だけが、人の住める土地ではない。部員が海外へ移民しても良いではないか。それも又、人生だ。

部員諸君は、自分達の信ずる道を思い切り歩みなさい。私は反対するかもしれない。しかし、エネルギーを大切にすること。誤りもあるかもしれない。しかしエネルギーの欠乏に比べれば、問題にもならない。

我々も誤ちをくりかえして来た。部員も誤ちをくりかえしながら、未来を創造してくれるにちがいない。厳につつしむべきことは、現在に満足しないことだけだ。

最後に、海外遠征が資金的に困難だからという意見があるかもしれないが、この困難な資金集めをやることも立派な人生である。海外遠征の成果に比べて決しておとるものではない。どしどしアルバイトして海の外へ出ることだ。

# 台湾遠征を思いおこして

塚崎義樹

昭和37年に台湾遠征がおこなわれてから今年で7年になる。自分ではまだ昨日のことのように思っていたが歳月の流れの速いことを改めて知られた。

当時、3年部員であった私は遠征隊員の最年少者で、責任も軽く、ボッカと食当にその務めを果せばよかった。ところが、今度の北ボルネオ合宿では現役が主体で、3年部員がリーダーシップをとり、合宿の運営をしたのだから、部も進歩したものである。

台湾遠征は、渡辺栄太郎先生を団長とし、初代OBの山本稔隊長以上4名のOB・OGと6名の現役で編成され、バラエティに富んだ楽しいパーティであった。

その頃は外貨事情が現在のように良くなく、登山岳会に属する大学山岳部に限られていた。また、山行のとき荷物を背負ってくれた7名のタイヤル族のポーターがいる。彼等は高砂族の中で山岳地帯に住む部族で、山歩きを得意とし日本語も話す。夜になると一諸に焚火を囲み、ポリタンにつめていた高粱酒を飲みシカヨウ社の歌をうたった。山を下り別れるとき彼等にとって武士の魂ともいうべき番刀を記念に贈ってくれたが、返礼にカッターシャツをあげた。今でも着てくれていると思う。なにしろ衣類品は大切なもので、旧日本海軍のシャツを着ていた者がいる位だから。

さて、台湾にも早稲田大学の出身者が沢山おられ、台湾同学会という同窓会があり、そちらのお招きにもあずかった。諸先輩は立派な仕事につかれ台湾の各界で活躍なさっている。中でも楊肇嘉先生は政界で活躍なさった方だが、日本から訪ねた我々を我が子のように親しみを込めて御世話下さった。台中市郊外のお宅に招かれたとき、台湾土着の民謡を聞かせて下さり、食事や寝具も台湾独特のものを用意して下さった。先生の書斎の入口には、六然居という額がかかっていたが、脇の石碑に次のような詩が刻んであった。

自処厳然、他処簡然、無事冷然、有事斬然、得意冷然、失意泰然というものであり、これを見たとき、先生のお人柄を悟ったような気がした。自分も先生のような人になりたいとその時以来思い続けているが、まだ修業が足りないようである。

また、台地市郊外の丹鳳山でおこなわれた全民運動会というハイキングに参加した。台北市民が家族そろって歩け歩け運動をやるのである。我々は山岳協会の

ご家族とご一緒し楽しい一日を過した。大学生とも交歓したが英語は堪能で、金持の子弟は徴兵を嫌い、米国や日本に留学するそうである。兵役のない日本の若者がうらやましいと言っていた。

さて、このように台湾遠征はワンダーフォーゲル活動を通じて、台湾の多くの人と多くの場所で友好を深め得たのである。当時、現役であった私の目から見ると、OBの社会人としての責任感と、それに伴なう対外的な信用が大きく寄与してこそ、このように内容豊富な遠征が実現できたと思われた。

我部最初の海外遠征として幾多の試錬があったが、特にOBと現役が一体となって行動したことは、自分が社会に出る時に多くの学ぶ点が得られたと思っている。今回の北ボルネオ合宿のように現役主体の海外合宿も有意義なことだと思う。現在の学生が当時の我々より国際的になり、日本の国力が伸びて、国際収支が好調だからであろう。その意味で進歩しているのだと思う。しかし、OBと現役が一体となって行動することを懐しく思うのは自分が進歩していないからであろうか。

# 北ボルネオ合宿の成功に想う

山本隆夫

ボルネオ遠征合宿が無事終了した。

現役全員による初の海外合宿、人跡未踏のクロッカー山脈横断、早稲田体育会団体栄誉賞の受賞……どれ一つを取り挙げてみても、創部20周年を飾るにふさわしい。更に特筆されるべきは――我部創設以来の誇りである――無事故でもって遠征が成し遂げられたことであろう。この輝かしい成功は決して運とか偶然がもたらしたものではない。長年に渡る周到な準備の積み重ね、何物にも負けぬ現役の強い意志と力、そして全O・B挙げての強力なバックアップ。これらが、その持てる力を最大限に発揮し、共通の目的に集中されたことにより、この成功を勝ち取ることが出来たのだと確信している。

考えてみれば遠征実現までは、実に長く、苦しい道程があり、それは取りも直さず、現役O・Bを含めた我部の成長する姿であったと思う。

我部に於ては、昭和37年に台湾遠征の実績がある。7年も前のことであるから、又、我部最初の海外遠征

であったことからしてもその実現には今回以上の困難さがあったことと推察する。ところが残念なことには、当時の遠征計画を推進せしめた熱や力が途中でプッツリと、跡断えてしまっていた。しかし、これはあくまでも、第2回更には今後何回もの海外遠征を目指す具体的な積み重ねの跡断えを意味するのであって、より未知なるもの、より困難なものを求める。――可能性にチャレンジする精神は常に、我部に流れていたのである。我々が1年の秋、正部員に昇格した頃から、第2回の海外遠征を目指したいという気運が急速に盛上ってきた。ボルネオ遠征の第1歩は実にこの時踏み出されたのである。その後3年間我々は目的地をアフガニスタンに求め、その早期実現に全精力を傾注してきた。その時その時の合宿、トレーニング等により新しいもの、より高度なものを採用し、事故を起すことなく成功させながら、余力の全てはアフガニスタン計画に投入した。資料の収集、コース検討、資料対策、機関誌によるO・BへのP・R等々・仕事は山積みされていた。関係各機関を走り回り、夜遅くまで茶店の一角を陣取ってのミーティングが来る日も来る日も続いた。当時の我々の生活は、このアフリガニスタン計画を中心に回転していた。そして我々がリーダーになった時、遠征実現を年間方針に掲げることにより、それは全部的な動きに拡がっていったのである。

我々は過信でもなく、状況判断の甘さからでもなく、この遠征の実現を信じて疑わなかった。そのため、この遠征計画が諸々の事情により、断念せざるを得なくなった時のショックはあまりにも大きかった。自分の力の無さを嘲りもした。O・B会を恨んでもみた。自分が4年間、貴重な時間とエネルギーを費し、このワンゲルから得ようとしていたものが、土壇場になって、自分の手の届かないところへ逃げていってしまったような気がした。自分が今までやってきた事、これからやろうとしていた事が全て、結局は自身の為にも、部の為にも何らプラスにはならないのではないかとも思った。半年近く、悩んでいる間に気持の整理もつき、この問題に関し、冷静に、客観的に考察することが出来るようになった。

大学を卒業して我々は又動き出した。我々が新人の頃、零から出発したように、零から出発しなければならない後輩が、何人も続いているのだ。彼等の夢をはぐくみ、我々のおかしたミスを彼等が繰返すことのないよう、見守ってやらなければならない。

彼等は我々の期待に答えてくれた。石橋を叩いて渡

る慎重さでもって、それでいながら我々以上の熱を燃やしながら新しい計画を進めていった。そして二年後の3月1日、とうとう、現役全員が思い思いの期待に胸をふくらませながら、ボルネオに向けて飛び立っていったのである。当日は、まるで自分が出かけるかのように早朝からソワソワと落ち着かなかった。羽田のデッキに立ち西の空へ消えてゆくジェット機をいつまでも見送っていると、何とも言い表わし様の無い充実感を覚えた。3週間余はあっという間に過ぎ、同月24日、真黒にボルネオ焼けした遠征隊を出迎えた。

この海外合宿の成果がどの様な形で現われ、今後の部活動に何をもたらすのか、確信すべきものが無く、正直なところ若干の不安を持っていた。これは多分、3年程前にもO・B会で論議の中心になったことであるが、我部に於ける海外遠征の意義が、非常に不明確な為である。これは部の統一的な見解という以前に自分自身はっきりと納得のゆく定義づけが出来なかった故に、不安なのである。

非常に抽象的な言い回しではあるが、部員の視野が広がるとか、より充実した彷徨性、開拓性の発揮とかいった説明しか出来なく、それでありながら、海外遠征は絶対に行うべきだという考えが固ってしまっていたのである。遠征事後処理を手伝いながらも、こんなことを考えていると今一つスッキリした気持になれなかった。

ところが遠征1ケ月後に行われた新人歓迎合宿に参加することにより、そんな不安は、一度に吹き飛んでしまった。この合宿での上級部員のたくましさ――今まで何回もの新歓に参加してきたが、今回程、自信にあふれて合宿を遂行する部員を見るのは初めてである。自分が2年になった頃を想い、比較すると、一体俺は何をやっていたんだという気になってしまう。

この新歓における上級生の姿が遠征の成果を全て物語っている。

歴史の浅い我部では、まだまだ海外遠征について、全員で話し合い、決めてゆかねばならない問題が、残っているであろう。しかしそれはあくまでも技術的な問題にとどまり、海外遠征の大前提は今回のボルネオ合宿の成功によって、はっきりと浮彫りにされたものと思う。

第2回、第3回……と続く海外遠征をより充実したものにしてゆく責任が、ボルネオ合宿でイニシアチブをとった現役諸君に課せられている。そして我々O・Bには今回以上の協力体制をつくることが課せられ

ている。

現役、O・Bが同一精神にのっとり、同一目的の完遂を目指すところに、色々な意味で転換期にきている我部に新しい方向づけがなされ、新しい早大ワンダーフォーゲル部が展開するものと確信している。

昭和44年5月27日

## 北ボルネオ合宿をふりかえって

寺光克彦

今回の合宿は、OB、OGの個人的資金援助、若手OBの強力なサポート、現役の情熱が一丸となって、北ボルネオ合宿を成功させようと協力、努力したチームワークの結晶であると思う。

我部において、海外遠征、海外合宿、海外ワンダリング等が必要か否かは、前述したOB、OGによる物心両面の援助とも、現役の活動に対する情熱とも言えるが、今回の北ボルネオ合宿が、やはり、ここ約10年間の部活動において海研を中心に多くの部員が海外を夢みて努力してきて蓄積された海外へのエネルギーの一つのあらわれではないかと思う。

創立20周年を迎える我部は、ワンダーフォーゲル界の一方の旗頭としての位置を占むるにいたる活動をし、又実力も備わってきている。しかし、内部的には、ここ4・5年、部の合宿形態もマンネリ化し、上級生において魅力ある活動を展開するべく努力を必要とする合宿地、合宿形態等が薄らいで来ているのではないかと思う。これは、我部は、北海道から九州迄足跡を記

し、かつ、我国の人工化は自然破壊を促進し、自然を求める我々を、限定した地域にしか入れさせないようにし、かつ、ここ数年の入部者減少によって必然的に起る部員減少及び、妥協的ムードの支配は、より困難を求める部員と安易な方向を求める部員とが残るようになり、なんとなく、停滞ムードが支配していたように思う。このような時に、未知なる自然を持つボルネオへ現役全員合宿を展開した事は、今後の我部の一つの新しい方向を示したのではないか。

今回の北ボルネオ合宿は、活動そのものの価値は、スポーツ的登山活動においては初めてと思われるクローカー山脈の主稜縦走という事を除いて、何ら魅力ある活動ではない。

しかし、現役全員が、未知なる地域に、暗中模索の状態で合宿を遂行した事は、現役全員に一つの自信となり、かつ、この合宿で獲得した海外へのアプローチのしかたを学んだ事は、次に海外へ出る時のために有意義な経験を積んだものと思われる。この自信と経験を土台に、今後の部生活、部方向、部教育に役立たせて貰いたいと思う。世界のあらゆる地域に、我々の後輩がどんどん出て行って貰いたい。しかし、ここで問題となって来るのは、部の体質である。現在の部は、部員減少の矢面にたたされ部員の肉体的、経済的、時間的負担は、学生として限界にきているように思う。我部において、山の技術、知識、指導性等も現在では限界のようであるし、私としては、我部において、理想のワンダーフォーゲル活動とはどんなものかを表現しろと言われても分らない。今回、ヘッドコーチとして参加した者が、理想も、方向も、ましてや、部員をも把握していなかったのであるから、全く非難されて当然であろう。

私は、そのような点で、部の金を使用した事を全く申し訳なく思います。私は、入部した当時から海外へ出たくて、部の海研係に入れて貰い、アフガニスタン計画の時も、ちょっと活動させて貰ったが、アフガニスタン計画が中止になった時、"部の関係で海外には出ない。いつか、数人の気の合った仲間で、氷河のある山を目指したい。"という夢だけを追っていたら、今回、浪人で、しかも自由な時間を持っているお前が行かないか、と誘われ、ちょっと迷ったが、引き受けてしまった。身の程もわきまえず乗り出したのはよいが、失敗の連続で、ヘッドコーチの柄ではなかったように思う。このあたりで自己反省は終りとさせて貰い、部の方向、及び、部の体質について。

部活動には、必然的に部員教育がある。この部員教育も、一つの合宿毎に大体確になりつつある。そして如何にも、一つの合宿を行なわなければ、次のステップが踏めないようなシステムになっているのが現状である。こうなると、トレーニング・スクーリング・合宿、そして、大きな合宿を控えると、バイトで部積立てなどと、毎日、毎日ワンゲルにしばられどうしで、自分の方向を見失ないがちになる。かといって、ボッと時間があくと、何も出来ない。ワンゲルにしがみつき、小さな山をブラブラと歩いているしか能がなくなってしまう。だから、いつか夢も希望もなくなり、だめになってしまう。それは、自然の中に入る事が好きなのではなく、部に居る事が好きなのである。だから、現役を去ると山へも行かない、部へも顔を出さない。学生時代のワンゲルは良かったという懐古趣味に取りつかれ、自己満足してしまう。勿論、自分で飯を食うのが社会人なのだから、当然の事である。といってしまえば、ワンゲルの自然とは、学生生活だけの物であると言えるのではないだろうか。だから、部の方向で自然を求めるという事は、何ら永続する魅力をうえつけず、藪こぎの魅力は体力問題のみに限定される。体力も、トレーニングさえすれば向上するが、それも大体、学生時代で終える。よって自然から遠ざかる。というわけで、部の方向づけが困難であるから、これは、現役に全面的にまかせよう。現役よ、伸び伸びと4年間自然に接しなさい。心の中に自分だけの何かが残るだろう。

部の体質についても、大体同様の結論になるから止めます。ただ、部長、監督、コーチの方々には頭が下がります。たった5ケ月の臨時コーチの期間で、如何に激職であるかわかりました。私のような感情的で、忍耐力に欠ける者は、全くコーチの柄ではなかったと思いました。

現役諸君へ一言。4年間だけ、徹底して遊んで下さい。情熱によって金も動くでしょう。海外へは、遠く、長く、安く、を目標に頑張れ！。

# 経過報告

海外遠征合同委員会メンバー

OB　委員長　内田直彦
　　委員　塚崎義樹
　　〃　山本隆夫
　　〃　寺光克彦
　　オブザーバー　吉良洋二
　　〃　菊地健
　　〃　土屋正忠

現役（9月以前）主将　左近允輝一
　　海研ヘッド　西村健
　　海研チーフ　吉越昌治

（9月以後）主将　吉越昌治
　　主務　深井関雄
　　海研係剣持典夫

委員会構成メンバー

里見隊長他OB参加者　4名
現役2・3年、現コーチ　3名

1月　2年（20代）内部が次の代で遠征を行なう事に決定し、海研1・2年会にて1年（21代）の意向を問う。
　　1・2年全体でやろうという方針が出された。

3月　地域として全員で行ける地域を選択し、台湾、韓国、ボルネオ、モンゴル、ニューギニアを研究した。

5月　7日　実現の可能性、活動の場として最適であるボルネオを決定した。

中旬　ボルネオの概要、歴史、現在までの情報収集の結果をコーチに提出した。

6月～7月　3年が中心になり、主に現地帰りの人、大学、外務省、大使館で資料、情報を収集した。

7月　1日　第1回海外遠征合同委員会・吉良前委員長より現在までの経過の報告がなされた。

7月　4日　第2回海外遠征合同委員会・台湾、アフガニスタンの資料の整理を完成させた。

8月　5日　第3回海外遠征合同委員会・小谷OBより機構改革について指示され、合同委員会の在り方について研究する。

8月　7日　3年が里見監督に、来春2月～4月に女子を除いた全部員で北ボルネオに遠征する事を提言した。

9月～10月　1・2年が中心になり、主に商社をまわり資料、情報を収集した。サバ領土問題に関して、外務省、大使館、商社の見解を聞いた。

9月　9日　第4回海外遠征合同委員会：組織、委員の任期、定員、選出方法について検討し決定した。現役よりボルネオ計画の説明があった。

9月　21日　里見監督より来春2月～4月の間に北ボルネオ遠征計画にそって遠征を果行する承認を得た。

9月　24日　北ボルネオ遠征第1次計画書を作成した。

9月　25日　第5回海外遠征合同委員会：現役より提出された北ボルネオ遠征第1次計画書を検討し、台湾遠征経験者がアドバイスする。今後の課題を検討した。

9月　27日　北ボルネオ遠征第1次計画書（先の計画書の補足）を作成した。

9月　28日　部員総会の席上で、新委員が北ボルネオ遠征の実現をめざす事を発表した。

10月～3月　資金集めを行なった。

10月　1日　新人、2年が中心の係の新メンバーで北ボルネオ遠征の係別計画を作成するのに着手した。

10月　8日　第6回海外遠征合同委員会：遠征計画書に対して助言をし、これからの日程に関して検討した。

10月　9日　海外合宿に対して、どの程度のOBのサポートが必要かという問題を話し合ったが、結局、現役から隊長あるいはコーチとしてOBの合宿への参加を要請された時、OBが参加し、又資金面で出来る限りの援助をするという事に意見が統一した。

10月　12日　神沢部長より来春2月から4月の間に北ボルネオ遠征計画にそって遠征を実行する承認を得た。

10月　16日　月見の会の参加OBに北ボルネオ遠征計画を配布し、監督、内田海外遠征合同委員長より協力を要請する。

第7回海外遠征合同委員会：北ボルネオ

遠征実行委員会案を作成した。

10/31～11/6　強制バイトを日本通運で行なった。

10月　29日　理事会内諾を得た。

11月　8日　○第1回委員会（新員会発足）
○理事会（メンバー、予算案、海研資金、使用承認、現役海外合宿の線で推す、理事会募金活動なし。）

11月　16日　第2回委員会
地方出身者の帰省、冬合宿のトレーニング、強制バイト冬合宿の期日、海外合宿のトレーニング、試験等を検討し、今後のスケジュールを決定した。個人負担（OB）の金額を検討し決定した。

11月　26日　現役コースのミーティグを行った。
現地大学との接触の件、医師随行の件、現地連絡所、現地活動原則案、計画書原案について話し合った。
北ボルネオ合宿隊長に監督が決定した。
部長、監督が体育局を訪問した。

11月　28日　第3回委員会
主にアプローチに関して、会議を進め今後約10日間、船会社に全員で分散して交渉する事に決定した。
竹崎氏（福島医大ＷＶ部元主将）の合宿への参加を討議し、決定は里見、深谷氏に一任し、また、現在における各係とメンバーを決定した。

12月　1日　計画書を作成し、発送した。

12月　5日　（寺光、高野、吉野、吉越、深井）上野で今後の日程を検討した。
外務省へ吉越が出頭し、必要書類及びその内容を伺った。

12月　7日　第4回委員会
現在までに交渉し、一応の了解を得た会社を確認し今後常に会社とコンタクトし、アプローチに関しての情報をキャッチするようにした。係別計画をチエックし、また、手続き書類に関しての再確認をした。

12月　13日　里見隊長他3名で大使館、外務省、情報文化局、厚生省を訪問した。

12月　14日　第5回委員会
現地計画、マレー語の勉強方法、出入業

者、ＯＢからの確約金等について検討し、贈呈品に関して大まかに決定した。

12月　中旬　船会社とのコンタクトと平行して飛行機を用いる事も考え航空会社とのコンタクトも密にとるようにした。

12月　15日　竹崎氏に遠征に関しての計画書2部（学校用・竹崎氏個人）を送った。

12/15～12/24　必要書類及びパッキングリストを提出した。

12月　17日　里見隊長、深谷副隊長が竹崎氏と会い、参加が決定した。

12月　19日　強制バイトを日本通運で行なった。

12月　21日　里見隊長他2名、マレーシア、シンガポール航空会社で情報を収集した。23日の周遊券を用いる場合はある程度予算の見通しがつく事がわかった。

12月　25日　体育局、協議員会で北ボルネオ海外合宿を行うことが承認された。

S44 1月11日　第6回委員会

諸条件を考えて、全面的にアプローチは、船をやめて飛行機にすることにし、普通券にするか、周遊券にするかは次回に決定することにした。予算案の再検討を行なった。現地活動の原則案を決定し、詳細なコース、形態は次回に持ちこされた。船会社に対してわび状を1月初旬に出すことにした。

12月　25日　イスラム教スクーリング（現役と4年）を行なった。

・イスラム教の5つの教え、（唱内容　仏、礼拝、断食、課税、朝勤）

・安息日、禁止事項

1月　14日　第7回委員会

現地活動は20日あれば満足な活動ができると意見が一致し23日間の周遊券を使用する事に決定した。

1月　中旬　本隊の出発日を決定し、また先発隊長は深谷副隊長に決定し、メンバーは、深谷氏に一任した、現地コースは意見が分れて決定はしなかった。個人負担金1月末日をめどとする。

パスポートを申請した。

ＯＢ会報を発送した。船会社に断り状を出した。

1月 18日 第8回委員会
先発隊メンバーは深谷、寺光、吉野3氏に決定した。
現地計画は詳細コースの原則を決め、最終決定は現地計画班（深谷、高野、吉越2年）に任した。
荷物の船での輸送について討論した。現地連絡所は在サバ日本領事館とMSA支社にする事に対して確認をした。

1月 21日 （高野、吉越、2年）でコースミーティングを行なった。

1月 22日 予防接種を行った。
（コレラ、種トウ）

1月 23日 現地コースの最終決定を深谷副隊長他5名の現地計画班で行った。

1月 24日 OB理事会を行なった。

1月 25日 第8回海研合同委員会、第9回委員会
（海研合同委員会のメンバーも出席）
マレー語スクーリングを後期試験終了後に行なうことを決定した。北ボルネオ合宿の記録方針と報告作成について討論を行なった。贈呈品の発注を監督、深井に一任した。

1月 27日 一ノ瀬氏、剣持、小西で横浜シルクセンターへ行き、船送品を渡した。又、この日にパスポートがおりた。

1月 28日 荷物を税関で通す為、寺光OBが横浜へ行った。

1月 29日 平岡OBのはからいで、ジャパン近海の広修丸にて約90キロの装備及び食糧を横浜より送った。第2回予防接種を行なった。深谷、寺光、田嶋氏、吉越で、海外合宿に於けるリーダーシップの問題について話し合った。

1月 30日 遭難対策研究部会、
国内本部、事務局、連絡網を決定した。

1月 31日 個人負担金をこの日迄に徴収した。

2月 2月初旬 物品寄付を行なった。
現地連絡所を依頼した。

2月 1日 第10回委員会
留守家族との連絡方法、先発隊の日本との連絡方法、羽田出発時の服装を決定した。

2月 3日 東西南北（第5号）を発送した。

2月 5日 ビザを申請した。

2月 6日 第11回委員会
傷害保険加入を監督に一任した。先発要項の試案作成、先発装備リスト作成を決定した。

2月 7日 第1回破傷風注射を行なった。

2/8～2/10 強制バイトを行なった。

2月 12日 現役全員で係関係のミーティングを行なった。ビザがおりた。

2月 13日 第1回マレー語スクーリングを行なった。
大隈会館に於いて資金ミーティングを青木、吉野氏、吉越、深井で行なった。
壮行会を同会館で行なった。

2月 中旬 保険に加入した。

2月 15日 第2回マレー語スクーリングを行なった。
MSAの杉本氏が実用的な事項の説明にみえた（全員参加）。

第12回委員会
寄付情況、係進行情況の発表や、出発時の車手配、ホテルの手配等を決めた。

2月 16日 記念食堂に於いて合宿隊全員でトレーニングを行なった。

2月 17日 遭難対策委員会（事務局会議）
連絡網の確認、現地と本部の連絡打合せを行なった。

2月 18日 第13回委員会
出発案内状及び帰国後の手配について話し合った。先発調査事項の内容決定、係別最終チェックを行なった。

2月 19日 先発隊にマラリヤ予防薬を飲ませた。又、先発隊の健康診断をスポーツ医事相談室で行なった。熱帯医学協会を竹崎氏、吉越で訪問した。先発隊ドル交換を行なった。

2月 20日、 先発隊の団装配分を行なった。深谷、寺光氏が部長を訪問した。

2月 21日 第2回破傷風注射を先発隊が行なった。

2月 22日 先発隊出発。現役は皇居マラソンを行なった。

2月 24日 第14回委員会（一年も参加）
合宿前最後の打ち合わせ。2年とのミーティング。
合宿に於ける2年の役割、1年指導について話し合った。本隊の健康診断をスポ

ーツ医事相談室で行なった。

2月 25日 事務局会議
連絡等の最終確認及び引継ぎを行なった。

隊員にマラリヤ予防薬を飲ませた。本隊ドル交換を行なった。

2月 26日 現地より第一報が入った（カメラの件）。

2月 27日 本隊の団装配分を行なった。

2月 28日 体育局へ里見監督、吉越、深井が挨拶に行った。第2回破傷風注射を行った。

3月 25日、体育局、体育館、部長の所に里見監督、吉越、深井が、外務省、MSAには寺光OB、吉越、深井が挨拶に行った。

3月 26日 合宿反省会を全員参加のもとで行なった。報告書編集方針について討論した。帰国報告会案内及び礼状を発送した。

3月 27日、報告書委員会を青木OB・吉越、剣持、渡辺で開いた。大使館挨拶に吉越、深井が行った。

3月 31日 事務局慰労会を行なった。

この席で報告所分担を決定した。東西南北北（第6号）を発送した。

# 公文書・関係文書一覧

昭和43年12月20日

駐日マレイシア大使
フセイン・モハメッド・オスマン　殿

早稲田大学体育局長
安　井　俊　雄

早稲田大学ワンダーフォーゲル部の
マレーシア・サバ州訪問計画について

本大学においては、自然に親しむ多くの学生団体が活発な活動を行なっておりますが、ワンダーフォーゲル部はそれらの学生団体のなかでも最も伝統を有するクラブであります。また、自主的精神と厳しい規律のもとに活動を続けている早稲田大学体育部の一員であるのみならず日本における野外活動の団体として代表的な地位を占めております。

このたび、開拓性と放浪性を追求する野外活動を行なうとともに、学生交歓を通じてマレーシアとの親善に寄与することを目的として、サバ州訪問を計画立案し、1969年2月下旬から隊員15名を約3週間派遣するための準備を進めております。なお、同部においては、すでに昭和37年中華民国台湾省を訪問して交歓計画を実施しており、常に野外活動を通じての国際親善のために努力しております。

このたび立案中のサバ州訪問計画については、多くの困難な条件があることとは存じますが、この計画が実現されることは単に同部のよろこびであるのみならず本大学としても大いに光栄に存ずる次第でございます。

ワンダーフォーゲル部は日本の代表としてはずかしくない活動計画のもとに両国親善に貢献することと存じますので、ここにご紹介申し上げるとともに、代表的な学生団体として推薦いたします。

渡航計画について、種々ご相談申し上げることと存じますが、よろしくご指導ならびにご協力の程お願い申し上げます。

以　上

# ガヤカレッヂ訪問の依頼状

## WASEDA UNIVERSITY

TOKYO, JAPAN

November 30, 1968

President
Caya College
Sabah, Malaysia

Dear Sir:

I take pleasure in informing you that the Wandervogel Club of Waseda University wishes to visit Sabah for the purpose of traveling across the Crocker Mountains, and exchanging courtesies with young people of Malaysia to promote mutual understanding during the period from February through March 1969. The party consist of 15 members, including 3 graduates. Mr. S. Satomi, General Manager of the Wandervogel Club, will lead the group.

They are scheduled to leave Japan by sea and arrive in your city toward the end of February 1969. They wish to visit your campus in order to meet some members of your student body, and to have a look at your campus facilities.

It would be very helpful to us if we were to receive your reply on this matter at your earliest convenience.

Sincerely yours,

Soichiro Kanzawa, Professor
President, Wandevogel Club

# ガヤカレッヂからの招待状

16th December, 1968

Professor Soichiro Kanzawa,
President, Wandervogel Club,
Waseda University,
Tokyo, Japan.

Dear Professor Kanzawa,

Thank you for your letter of 30th November. It will be a pleasure to welcome your members to Gaya College. Plase let me know the detailed schedule at a later date so that we can finalise plans for your visit here.

With kind regards.

Yours sincerely,

J.E.Tod
Principal

# 情報局へのコース問合せに関する返事

25th January, 1969

Mr. Sekio Fukai,
Wandervogel Club Waseda University,
The gymnasium in Waseda University,
Totsuka cho Shinjuku ward,
Tokyo,
JAPAN.

Dear Sir,

I am to acknowledge receipt of your letter of December 24, 1968 and to furnish you with the following information as requested.

The paths proposed by you and your party on your proposed travel across the Crocker Range are for the most part still useable. However, the Department of Geological Survey, which we consulted on this matter since its staff are familiar with the Range, has recommended that you engage the service of a guide to take you from one village to the other as there are usually more side tracks than shown on the map. The Principal Geologist of the Geological Survey had written the following information:—

"The jungle is normally covered by thick primary rain forest and the topography is rugged being controlled by the nature of the rocks forming the Crocker Range. The climate conditions in February and March should be good. The temperatures are about 94 °F max and 66 ° min. being cooler in the higher areas.

As far as food conditions are concerned I think one should be able to get in Tambunan all the items mentioned. It is unlikely that petrol will be available in the other villages mentioned although locally produced food such as rice, eggs, vegetables, chickens etc. are usually obtainable."

It would appear that apart from petroleum, you will be able to obtain most of the necessities required for your journey. When you arrive in Kota Kinabalu, may I suggest that you call on me or the Principal of Geologist (Mr. Nicholas Wong) so that we may be able to provide you with additional assistance for your proposed trip. I trust that the above information will be of use to you.

Yours faithfully,

John Padasian
for State Information Officer
SABAH

# 新　聞　記　事

## コタキナバル到着

The Wander-Vogel Club of Waseda University,Tokyo is very active in mountaineering and adventures in the city of Tokyo. A team of 15 under the leadership of Mr.Shojiro Satomi arrived Kota Kinabalu by Malaysia-Singapore Airlines on Sunday,March,2 from Tokyo. They planned to climb Mount Kinabalu.

Members of the team are Mr.S.Satomi(Team Manager), Mr.T.Fukaya,Mr.K.Teramitsu,Mr.H.Yoshino,Mr.H.Takano, Mr.S.Yoshikoshi,Mr.S.Fukai,Mr.H.Kenmochi,Mr.T.Kobayashi,Mr.K.Konishi,Mr.H.Tawara,Mr.T.Tsuchiya,Mr.E.Hagiwara,Mr.M.Watanabe and Mr.M.Takezsaki.

Mr.Satomi said they had heard about Mt.Kinabalu and would use their three weeks stay in Sabah to climb it.

This would be the first expedition by a club all the way from Japan.

Five years ago the club visited Taiwan for the same purpose. They are expected to start climbing Mt.Kinabalu on Wednesday,March 5.

They will return to Tokyo via Hongkong by MSA ML654 on Sunday,March 23. (KINABALU SABAH TIMES,March 4)

## サバ州元首との会見

Mr.Shojiro Satomi of Waseda University,Tokyo,Japan,and General Manager of Wander Vogel Club,Japan,accompanied by the Japanese Vice Consul in Kota Kinabalu,Mr.Hiroshi Fujimaki,yesterday (March 20) paid a courtesy call on His Excellency the Yang di-Pertua Negara,Tun Pengiran Haiji Ahmad Raffae.

Mr.Shojiro led a team of students to climb Mount Kinabalu on March 1.

Picture above shows Mr.Shojiro presenting the University pennon as a memento to His Excellency. Looking on is Mr. Fujimaki. (March,21)

# 協力者リスト

敬称略（五十音）

## 個人

伊集院　兼信
井藤　光明
今立　源太郎
岡田　美代子
冠城　豊
栢沼　美弓
笹嶋　敏一
白幡　聰
塩川　優一
菅野　裕一
杉本　保
鈴木　久江
関　仁己
萩原　三良
萩原　四津雄
橋本　広
藤波　次郎
三井　源蔵
峰下　哲
森　国興

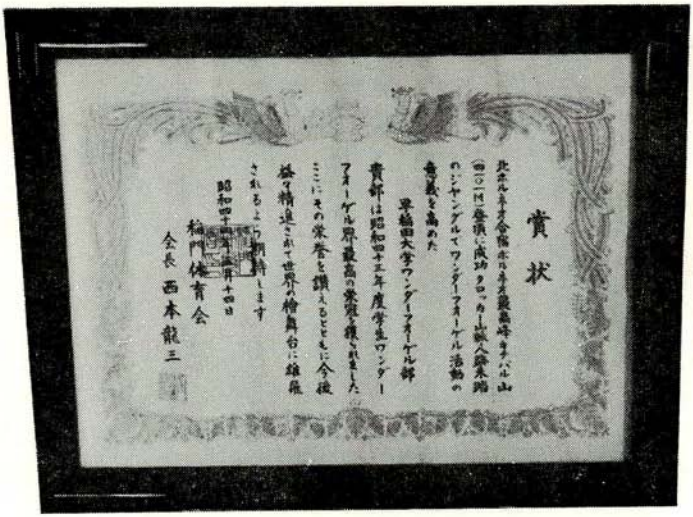
## 団体

安宅産業ＫＫ
インフォーメーション、デパートメントオフィス（在サバ）
上田商会ＫＫ
永和海運ＫＫ
海外資源鉱物ＫＫ
外務省
鹿児島大学学友会山岳部
ＫＫジャパン近海
山崎汽船ＫＫ
三光汽船ＫＫ
在サバ日本領事館
昭和海運ＫＫ
順天堂大学医学部
スポーツ医事相談室
東京海事ＫＫ
東京農業大学山岳部
東京農業大学探検部
東和汽船ＫＫ
同和海運ＫＫ
中村汽船ＫＫ
日商岩井ＫＫ
藤田観光ＫＫ
マレイシア、シンガポール航空会社
マレイシア、シンガポール航空コタキナバル支社
マレイシア大使館
明星食品ＫＫ
明治屋
雪印乳業ＫＫ
早稲田大学山岳部
早稲田大学診療所

# 北ボルネオ参考文献リスト


・日本と東南アジア
　小山朝光著　IN通信社
・ボルネオの人と風土
　海野一隆　古今書院
　林寿一　共著
・フロンテイア　4
　東京農業大学農友会探険部
・北ボネルの自然と生活
　慶応義塾大学文化団体連盟
　マレイシア。サバ州文化調査団
・マレイシア
　マレイシア大使館
　マレイシア連邦情報局製作
・サバ（東マレイシア）通観
　「政治・経済と開発計画」
　在コタキナバル（ジェッセルトン）
　日本国領事館
・北ボルネオ踏査隊計画書
　富山県教職員山岳研究会
・北ボルネオ踏査隊報告書
　富山県教職員山岳研究会
・変峰キナバルに挑む
　北ボルネオ踏査隊　橋本広著
　北日本新聞掲載（1968年10月11日～1968年10月30日）
・マレイシア、フィリピン、サバ領有問題新聞切抜
　（1968年9月25日～1968年12月24日）
・岳人
　「海外遠征特大号」
　1968年4月　247号
・山と渓谷
　「海外登山特集」
　1967年9月　346号
・マライ語4週間
　朝倉純孝著　大学書林
・鹿児島大学山岳部部報
・生活の医学
　「熱帯医学ハンドバック」
　日本熱帯医学協会編
　著者代表　塩川優一

# 体育名誉章受賞


賞状

北ボルネオ合宿ホルネオ最高峰キナバル山
(四〇一四)登頂に成功クロカー政府入跡来訪
のシンダルでワンダーフォーゲル活動の
普及を図めた
早稲田大学ワンダーフォーゲル部
貴部は昭和四十二年度学生ワンダー
フォーゲル界最高の栄誉を獲られました
ここにその栄誉を讃えるとともに今後
益々精進されて世界の檜舞台に雄飛
されるよう期待します
昭和四十二年度
稲門体育会
会長 西本龍三

我部は、この北ボルネオ合宿成功の快挙により、早稲田大学で毎年行なわれている体育表彰式において、体育名誉章ならびに稲門体育会賞を授与されました。この授賞はまことに喜ばしい限りであり、部全体がこの授賞に歓喜していい内容のある授賞であると考えます。なぜならば、ＯＢをも含めた部員一人一人の日々の努力の積み重ねこそがこの合宿を生み出したものであり、またその合宿内容も大自然を跋渉することにより十二分にワンダーフォーゲル活動の意義を高めたものであり、十分にこの授与に匹敵する合宿であったと考えるからであります。

しかし我々はこの授賞を単なる一度きりのものに終わらせてはいけません。この合宿を契機として、よりよい合宿が行なわれ、よりよい部員が育ってこそ、北ボルネオ合宿の意義・体育名誉章。稲門体育会賞授賞の意義があるのです。

# 編集後記

我々の念願の北ボルネオ合宿も無事終了いたしまして、ようやく報告書の発行に漕ぎつけました。この報告書作成にあたりまして、行動記録と共に、我々の眼でみたサバ州を浮き彫りにしてみようとしました。文章表現等の至らぬ面が随所にみられますが、やっとの思いで一冊の本として書き上げました。この報告書を将来の海外活動の礎石とあわせて合宿に協力下下さった方々の御厚意に答えたいと思います。

編集委員

里見昭二郎
吉越昌治
剣持典夫
渡辺正夫

北ボルネオ合宿報告書

発行日　昭和44年7月20日

編集者　代表　里見昭二郎

発行者　早稲田大学ワンダーフォーゲル部

新宿区戸塚町1－647
早稲田大学体育館内

（禁無断転載）

KINABALU
NATIONAL PARK
SABAH
MALAYSIA